一六二　小松帯刀ヨリ桂久武ヘ

岩下方平倫敦行等ノ件

（封紙ウワ書）「桂君閣下　小松　拝」

過刻は貴翰被成下拝誦、先々御安康被成御座、芽出度奉賀候、然は岩下家より之壱封御廻し被下拝見仕候、如命倫鈍行云々之条は最初之御決論通之方至極御尤ニ奉存候、尋問ニ相成候上は如何様とも答様は有之事御座候間、更ニ存慮無御座候、先刻西郷参候付当人とも御同様咄合仕候事御座候、御別封も西郷江差廻候付かの方より返上可仕候間、而御談合被下度奉頼候、扨又野夫ニ茂亦々腫物大発起、立居六ケ敷甚込入申候、併最ハ快方ニ相成申候間不遠出仕可仕候得共、其内御助合被下度奉希候、早速御請可申上候処客来等ニ而延曳、失敬御免可被下候、此旨御報迄如斯御座候、早々不備、

如月十七日

文書原寸　縦一六・五糎　横八二糎

一六三　長峯忠蔵原田三左衛門ヨリ市来仲介ヘ

穂北村殺傷事件

尚々、本文之一条、佐土原之御役人様ニおゐても、厚キ御配慮之程も御座候ニ付、互ニ内済之処相好ミ候訳ニ御座候得共、未た右之場合ニ押移り不申候、因而は　尊翁御来駕之上、御取計被下候ハヽ、程克相片付候は、必然之事ト愚案仕居候故、精々御願申上候間、私共両人御助救として、いづれニも御来臨被下度、偏ニ奉頼上候、以上、

急飛ヲ以啓上仕候、兎角春寒去兼候処、倍御安康可被成御勤仕奉賀寿候、然は最早御聞及も御座候半、当郡村々小前混雑之儀差発、去ル十五日島ノ内江集会之砌、過而佐土原藩侍を打果し候処より掛合相成、翌十六日富高御役所并佐土原御役人様方御立会之上、御検使相成、旁右一件于今内済熟談相整不申、下拙共ハ勿論、外村役人小前一同太仰天、十方（途方）ニ暮罷在候儀ニ御座候、右ニ付而は、御繁用中何共申上兼候得共、御苦労ながら　尊翁御光来

被成下、万端御賢計ニ被下候儀も出来申間敷哉、誠ニ以此節之儀ニ付、右之段御汲取被成下、何分ニも押而御出張之程、呉々も宜敷奉責上候、乍去長谷川孝平様も一昨日より佐土原へ御引移相成候訳ニ付、同方之様御越被下度、幾重ニも伏而奉希上候、先は右之段申上度、取込中以乱筆乍失礼如此ニ御座候、尚委曲は此使より御聞取可被下候御頼上候、早々已上、

二月廿日　　長峯忠蔵
　　原田三左衛門

市来仲介様

文書原寸　縦一六・二糎　横一一三糎

一六三　高岡市来仲介ヨリ黒田了介ヘ

穂北村殺傷事件

口上手扣

此節佐土原家中池田丑蔵於御料穂北、同所村方之百姓共多人数相会致殺害、相手不分明ニ有之、其形ニ而時日相過、不容易事件之故、穂北江差越彼地庄屋共江致内諭、下手人早々差出候様可取計御沙汰承知仕、同所三宅村庄屋原田三左衛門方江差越取計候形行、左之通御座候、

一昨廿五日三宅村江差越、同村庄屋原田三左衛門、北方村右同長峯忠蔵江此節池田丑蔵穂北六ケ村之百姓共多人数相会致殺害候ニ付而ハ、夫形差置候訳ニ無之、然処富高御手伝方江是迄及数度下手人差出シ有之候様、厳敷及問合居候得共、何分延引相成、然処其儀鹿児島表江も相聞得、出役有之、いつれ之筋急速下手人差出無之候而ハ、此末可及大変との趣、細々理解仕候処、右之訳合は両人共ニ汲受罷在候得共、富高より差図無之候而は、庄屋計ニ而下手人差出候段成兼、兎角近々出役可相成、夫迄之処、御勘弁被下候様、強而御訴訟申出候外無御座、再三承候得共、当分ニ而も殊之外程過、別而不都合之事候間、此上ハ片時も相延候訳ニ無之段、種々尽手厳敷相達申候処、両人之庄屋共申談、

左条之名前申出候、

一右通百姓共多人数寄集候訳、何そ丑蔵ニ抱候儀無御座、同所岡留村庄屋米良周平、南方村庄屋米良篤次郎共江不納得之訳有之、集会仕、夫より不図其場ニ有合候池田丑蔵外両人江押移、右次第ニおよひ候事ニ而、丑蔵共不束之儀全無御座候、

一　穂北村之内
　　髟之原居住
　　嘉兵衛

右之者其節疵を負、何分申遁不相成者候処、村方より相捕差出候儀は、対富高不相済候間、佐土原之御手より召捕相成、何様共御作法通御取計御座候而、聊申分無之段申出候付、弥其通相違無之候ハヽ、居所ハ勿論名前、年輩等書記可相渡申入候処、忠蔵右名前書認相渡申候、

一前件下手人差出、御首尾合相済儀ニ御座候ハヽ、此已後ニ至、百姓共一同何そ申立候訳無御座、難有御取計御座候間、其村之頭立候者共被召寄候而、向後そ忽不仕、何分此節之御執計、至極寛大之御処置御座候間、難有可奉存旨

薩州様御威光を以御申渡置被下候得ハ仕合奉存候段、三左衛門・忠蔵供々申出候、

右は御料穂北村髟之原嘉兵衛下手人ニ相渡候始末、前文之通御座候、此段申上候、以上、

卯
二月廿六日　　高岡
　　市来仲介
黒田了介殿

文書原寸　縦一六・八糎　横一八五・五糎

一六四　黒田了介ヨリ陸軍方黒田嘉右衛門へ
　　御料地穂北村殺傷事件　　別紙共二通

（包紙ウワ書）
「陸軍方
黒田嘉右衛門殿　　黒田了介

子二月廿七日発ス

「　」

一六一四ノ一

一此度御料所穂北村之百姓共混雑之砌、家中池田丑蔵不慮ニ及横死候折節、長谷川孝平殿御出役中ニ付、早速鳥居弥左衛門差出、解死人之儀及御掛合候得共、御壱人ニては決局付兼候趣ニ而、一応御引取相成、今ニ御出役無之候ニ付、家中之人心茂不穏、殊ニ池田丑蔵親族之者ニ至候而は悲憤ニ堪兼候次第、何時異変ヲ生候半も難計、旁及心配候ニ付、本藩黒田了介（清隆）并家中役々者共、妻万表へ差出、御料所庄屋は勿論、小前之者ニ至迄召集、解死人之儀精々及吟味候処、穂北平原村嘉兵衛と申者紛無之段、証文差出候ニ付、決着之上は片時も其侭難差置、且此節之事件本根より御糺相成候得は、不容易事柄と存、直様召捕討果申候、就而は万端内輪之御取計相成候様致度、御隣境之事候得は、民心致安堵候様淡路守（島津忠寛）ニも申聞、尽力致度心底ニ御座候、此段御心得迄申述置候、

卯二月廿五日

富高表御手伝

長谷川孝平様

原　賢平様

文書原寸　縦一六・五糎　横七四糎

一六一四ノ二

尚々、穂北村事実、別紙ニ相分り申候間、別段不申上候、い細之義は当御方様よりも御届相成候筈ニ御座候間、大略申上候、以上、

一穂北村之事件、一向運付兼候処、今日同村庄屋初メ村役々より池田丑蔵殿解死人平原村之嘉兵衛ニ弥相違無之旨、証文差出候故、早速召捕レ（り）打果し相成り、首尾相成り申候間、此段御届申上候、以上、

卯二月廿六日　黒田了介

黒田嘉右衛門殿

文書原寸　縦一六・五糎　横四九・五糎

包紙原寸　縦二八・三糎　横四〇糎

一六三五　桂右衛門ヨリ京都小松帯刀ヘ

四藩会議ト久光公ノ上京

尚々時分柄折角為国家御保護専要奉祈候、扨札一条之義ニ付而ハ、段々御深慮被召加候由之処、甚以麁忽之取計別而苦心仕候、い細西郷(隆盛)よりも承候、しかしなから、当方之次第実ニ不被謂心痛之余りニ而決策相立、右ハ承候得は能く実意不相通段共ニ而ハ無之哉、殊更差辺激論も出候半欤と致推考、心外之至ニ御座候、第一当方人気之処、御聞取申度儀と存候処、夫等之儀ハ指置、則崩しニ掛候訳欤と存申候、

得拝顔候ハヽ、得と申上度御座候、再乞、

三邦丸帰帆後ハ不得貴意奉背本懐候、春暖相成候処、益御壮剛御在職奉珍重候、当方

両御丸其外様益御機嫌能被遊御座奉恐悦候、私ニも無異条碌々罷成候間、御放慮可被下候、然ハ西郷等御差下し、彼是御吟味之趣共致承知、其上御細翰拝誦、不相変御懇篤之儀共難有奉厚謝候、就而ハ

御上京一条之儀、早速打寄及評議言上仕候処、御決着被成、土州・宇和島江西郷被差越、過日罷帰、彼之方至極御請込宜敷、い細之儀ハ西郷より申上越筈御座候付致省略候、就而ハ、弥

中将様御上京之筋御決定、三月中御着京之賦ニ御座候、私ニも御供御内命ハ承知仕居候得共、陸軍惣裁職ニも頻ニ歎願之次第も有之、当人より申ても余り過分之様ニも有之、筋を以申せハ無拠訳故、私よりとふも決答も承兼、当分ハ　貴側辺江為任被下事候得は、いよ〳〵罷上り候程合も如何欤と甚迷惑罷在、御推計可被下候、弥罷登時宜ニも御座候ハヽ、久々振拝顔かた〳〵懐事申上度、相楽居申候得共、水泡と相成候而ハ残念千万、御推計可被下候、西郷辺より彼是申上越候半と存候得共、其御元諸御都合向等之儀ハ可然御下知被下度御願申上候、将又乍余事

太守様ニも此度ハ御一緒ニ　御上京被成度、一応御内決之事候処、
中将様思召も被為在、時宜ニ仍而ハ　御上京可被遊との趣を以承知、初メ御内決被成候儀も兼而御案内之通下情も有之候付、右通之事候処、此度ハ彼是前後ノ御進退御斟酌無之候而ハ不相済場合ニ御座候得は、深く思召も有之事ニ御座候、此度之　御上京ハ屹と詮立候之様無之候而ハ不相済、十ニ八九ハ難渋ニ御座候得共、随分思召之六七ニハ至り可申機会欤とハ奉存候、　皇国之御為御紀綱之相立候処、専要奉祈事ニ御座候、此節ハ尚御骨を砕かれ候場合、何欤宜敷御願申上候、今日態々急飛脚指立られ候付、大略申上候、自来十日より内ニハ一艘之御軍艦、御先荷人数等繰登せ候心組御座候付、後便ニ申上残候、恐々敬白、

二月晦日　　桂　右衛門

小松帯刀様
参人々御中

猶々、誰江も書込不仕候間、宜敷御鳳声之処奉願候、

文書原寸　縦一五・七糎　横一六五糎

一六一六　児湯郡穂北村殺傷一件　合四通

六通ノ内二通ハ前出

一六一六ノ一

高岡

此節穂北表混雑一件ニ付而は、追々御届申上置候処、昨廿六日、富高御手代長谷川孝平富高江一往引取、亦々出張候筋申上置候得共、昨日より探索方江差越居候役目之内、今夕方罷帰候処、右長谷川儀出張之筋、先状迄茂差出置候得共、俄ニ病気差発り出張不相調、夫故佐土原より同所庄屋方江下手人差出候様強而申入候処、無余儀差出候様相成、昨日解死人壱人相請取、今朝於佐土原ニ打果シ、死体之儀は先方江引渡相成、後始末ニ付而は、此節御出張黒田了介殿ニ茂穂北江御出張之上、夫々別紙之通処置相付申候、右様御手厚御取計ヲ以一統一命助り、

誠ニ御恩沢之程感服いたし、同所庄屋ヲ始、村役・小前之者共凡六拾人程列立、佐土原江御礼として差越申候由御座候、左候而富高表届向之儀ハ、佐土原より町田吉之進・三浦信太郎両人ヲ以、別紙之通申入候賦ニ而、今日より出立差越候由、尤了介殿ニは、富高模様相分候迄は、同所御滞在之由御座候間、此段御届申上候、以上、

卯二月廿八日　　曖　本田甚七

同　本田次郎五郎

同　市来善助

御軍賦役衆

文書原寸　縦二五・五糎　横六七・五糎

一六一六ノ二

本文書ハ一六一四ノ一号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸　縦一六・五糎　横八四・三糎

一六一六ノ三

写

別紙穂北村庄屋忠蔵始、村役之者共より奉差上候解死人一札之趣、聊相違無御座候、為後日証書差上置申候、

慶応三年丁卯二月

児湯郡

童子丸村

百姓代　又市

年寄　金兵衛

調殿村

百姓代　佐太郎

年寄　又右衛門

右松村

百姓代　平吉

年寄　和吉

清水村
百姓代　嘉平太
年寄　清五郎
右松村
部当見習　俊蔵
三宅村
百姓代　丑弥
年寄　庄兵衛
同　助九郎
庄屋　正一郎
同　三左衛門

佐土原
御役人様

文書原寸　縦一六・八糎　横六四・五糎

一六一六ノ四

写

昨冬以来百姓共折々集会致、田畝之耕耘を怠り、村中不穏候儀、畢竟不得已情実より左様成立候儀とは乍申、不可然所業ニ候、右ニ付此度我々存慮之趣共申聞候処、何茂尤扱（汲カ）受、前非を改名（ママ）無隔意親睦致農業等可相励段申出、近比満悦之至候、依之乍聊郡中江為祝儀金子千両差遣候間、受納可致事、

文書原寸　縦一六・八糎　横三五・五糎

一六一六ノ五

写

請取申一札之事

平原村
嘉兵衛

右は池田丑蔵殿解死人差出候処、御討果之上死体御引渡ニ被成、慥ニ受取申候、此儀ニ付、後日故障申立候儀無之候、仍而一札如件、

穂北村
庄屋
長峯忠蔵印

慶応三卯年二月廿七日

佐土原
人改役
向井　友衛殿
佐々木祐平殿

文書原寸　縦一六・八糎　横三七・三糎

一六一六ノ六

写

奉差入一札之事

当二月十五日、穂北村小前之者共、島之内江集会之砌、佐土原様(島津忠寛)御藩中池田丑蔵殿通行被致候処、愚民共過而取囲横死被致候ニ付而は、右村方より解死人差出候様被仰聞恐入奉畏候、則相手方吟味仕候処、平原村之嘉兵衛儀疵請罷在候ニ付、其者ニ相違有之間敷と衆人より申立候間、右解死人ニ御召捕可被下候、然上は跡々之処内済相整候様御取計之程幾重ニ茂宜敷奉畏上候、仍而一札如件、

御料児湯郡穂北村
小前惣代
清兵衛印
百姓代
弥兵衛印
年寄
三郎助印
庄屋
忠　蔵印

慶応三卯年二月

佐土原
御役人衆中様

文書原寸　縦一六・五糎　横六〇糎

一六一七　穂北村庄屋等ヨリ佐土原役人衆へ
奉差入一札之事

本文書ハ一六一六ノ六号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸　縦三〇糎　横四四糎

一六一八　幕府ノ令達

樺太島規則、兵庫開港等ノ件

「丁卯年」(朱)

一六一八ノ一

卯六月六日閣老小笠原壱州(長行)御渡

大目付
御目付　江

来ル十二月七日より兵庫開港、江戸并大坂市中江も交易之ため、外国人居留いたし候筈ニ付、諸国之産物手広ニ搬運、勝手ニ可遂商売もの也、

右之趣御料・私領・寺社領共ニ不洩様可触知候、

一六一八ノ二

一　卯六月七日閣老井河州(井上正直)御達

松平安芸守家来へ

毛利大膳家来

松村　品蔵

右者是迄戸田淡路(氏良)守家来へ御預ヶ相成居候処、今般長州表へ御差戻相成候ニ付、其方共へ引渡置候間、都合次第送越、大膳家来へ引渡候様可被致候、尤委細之義は御目付可承合候、

戸田淡路守家来へ

毛利大膳家来

松村　品蔵

右是迄其方共へ御預被置候処、今般長州表へ差戻相成候間、松平安芸守(浅野長訓)家来へ可引渡候云々、

一六一八ノ三

一　卯五月廿八日於京都相達

大目付

松平大隅(信敏)守

御勘定奉行並

星野豊後(成美)守

大坂町奉行

竹内日向(幸彝)守

小笠原伊勢守(長功)

御目付

設楽岩次郎(能棟)

右兵庫表開港之御用取扱候様可被致候事、

一六一八ノ四

一　卯六月七日閣老小笠原壱州御渡

大目付
御目付江

御上洛御供并大坂表御警衛被仰付候面々、是迄交代期限御取扱相成居候得共、兎角交代遅緩ニ相成、不都合之義有之候間、以来　御上洛御供并大坂表御警衛在番之者、是迄之通交代期限凡三ヶ月以前相明候もの并於江戸表交代被仰付候ものは、其段掛大目付、御目付へ相達、不都合之義無之様可被致候事、

右之通去月廿七日於京都御供在京在坂之面々江相達候間、向々江可被達候事、

六月

一六一八ノ五

一　卯四月七日因州侯(池田慶徳)建白

今度兵庫開港之義ニ付、大樹言上之趣有之候処、於彼地三港　勅許之節、被止候

御沙汰之次第も有之、不容易重大之義ニ付、諸臣意見被　聞食度、就而は早々上京、無腹臓言上可仕、猶所労等ニ而隙取候ハヽ、見込之趣先以書取差上可仕旨被　仰出候付、謹而奉畏候、微臣以(ママ)之外臣之身、不計本ノママも蒙り

先帝非常之　朝恩、先年来度々之

勅旨、実ニ以恐懼之至、年来之宿疾トは乍申、病間を得、聊警衛之備員迄押而登京可仕ト、日夜湯薬ニ心を用罷在候内、重而蒙上京　命候上は、朝ニ奉命、夕ニ就途、速ニ出京意見言上可仕筈御座候処、近年相続大病相煩身体根気殆衰弱、迚も此体ニ而は上京仕候而も

拝

朝趣命難仕、是迄上京御猶予相願候末、重々奉願候段、恐懼之至奉存候得共、今暫く御猶予奉願度奉存候、其内少しも快方ニ趣候得は、上京仕候心得ニは御座候得共、隙取候而は

朝廷之御時宜如何ト相考、御沙汰之趣も御座候付、以封事意見　奏聞仕候、宜御執　達伏而希入奉存候、以上、

松平因幡守
（慶徳）
慶福

四月十七日

飛鳥井中納言（雅典）殿

野宮中納言（定功）殿

一六一八ノ六

一微臣慶福（慶徳）蒙重大之　勅問、殊ニ大政之儀、以不肖之身越位言上仕候段、恐懼不少候得共、勅命重き、敢而建言仕候、抑兵庫開港之義ニ付而は大樹追々言上候趣有之、　朝議之上、外臣共迄意見御下問相成候義、恭く

朝廷御時宜奉恐察候得は、実以奉畏入候次第、次大樹よりも兵庫開港之義ニ付、尋問之趣有之、既ニ其節愚考申達候通、癸丑・甲寅外夷渡来以来

皇国人心不和を生し、其末追々変遷、今之景況ニ至り、先帝深被為悩

宸襟、毎々諸臣江　勅問も被為在

叡慮御苦悩、終ニ一日御安慮之御間も無之、不計も登遐被遊候段、実以　神州之大不幸不過之、唯驚愕悲歎之外無之候、既ニ畿内近港夷船入津候義は、臣慶福先年在京中も

先朝不被為好、就而は摂海守禦防備之義、毎々故大樹江　御沙汰之義も親く奉伺居候得共、于今全備之処も難計、況哉一昨年三港

勅許之義、一時切迫之景況を以、故大樹強而言上有之

ニ付、　先朝　聞食、既ニ　勅許相成候上は、三港交通は素より之義、条約通信致旨ニ於而は
神州正大之御威信遠く海外ニ及ひ、衆夷服従仕候様無之而は不相成義は申上候迄も無之、既ニ三港　勅許之上は、兵庫一港之開鎖之得失は、僻邑之微臣、短才不肖之身ヲ以善悪申上候義は迚も難及管見、殊ニ大樹遮而建言之趣候得は、急度将来之見込も可有之、且　皇国富強之義ニ於而は、天下之蒼生不好者は無之候得共、唯兵庫之儀は暫く閣き、譬へ余港ニ御座候共、
先朝殊ニ被止候義を　御諒闇中
山陵未就、御即位も未被行折柄、万一　御遺勅ニ被為背候而は、乍恐被為対　先朝江、　勅旨如何可被為在欤、畿外之小臣　奏上仕迄も無之義、於僭越之罪は深恐懼之至ニ候得共、愚存無腹臓言上仕候様蒙　御沙汰、聊も包臓仕候而は、却而外臣之罪難遁、不避忌諱、謹而　奏聞仕候、臣慶福誠恐誠惶昧死百拝呈、

執事　　慶福

四月

一六一八ノ七

一　尾州侯建言

謹而御請奉申上候、今度兵庫表開港之儀、大樹建言之書面御渡、早々上京鄙見言上可仕旨等被仰降之趣、謹而奉畏候、実以　御沙汰被為在候通、不容易重大之事件ニ奉存候、既ニ大樹より咨詢之節も時柄之宜ニ候得は別段存寄も無之候、乍去天下之大事件ニ奉存候ニ付、尚天下ト呉々致謀議於
朝廷御安堵之途、尚又手厚相成候様申答置候義ニ而、此外可申上見込之筋無御座候、右之趣上京可申上候処、去頃以来宿痾兎角相勝不申、此節之処、押而上京難仕、尤少ニ而も収候ハヽ上京可仕候得共、期限も被為在候御事ニ付、先此段以書取奉差上候、誠惶誠恐頓首敬白、

四月　　大納言慶勝上

一六一八ノ八

一　熊本侯同断

今度開港之義、大樹より言上之処、一昨年十月三港勅許之節、兵庫表之義は被止候　御沙汰之次第も有之、不容易義ニ付、尚早々上京、見込之趣無伏臓言上仕候様御書付之趣奉得其意候、私儀持病之疝積(癪)強く、長途旅行無覚束、養子細川澄(護久)之助儀為名代出京之上、可申上筈ニ御座候得共、御期限も有之候儀、先以書取左ニ言上仕候、根元兵庫は

帝都程不遠所柄ニ而、開港は如何ニ候得共、於幕府は年来洋夷之情状、宇内之形勢等深洞察在之、殊更外国ニ対し、一旦条約取結候末、及破談候而は信義難相立処より、是迄内輪之不行届は、

大樹一身ニ引受、御断申上候而之歎願筋ト相見候得は、乍恐於

朝廷、大小軽重得と　御参酌

天幕御一致ニ被為在　御決定、弥以軍国之手当ニ差入、万事公法之政道を以各国を致圧候程之　御国体相立候様在御座度候儀奉存候、普通之管見ニは御座候得共、見込之趣、任御尋此段申上越候、誠恐誠惶頓首百拝、

四月　　細川越中守(慶順)

一六一八ノ九

一　卯六月十日閣老小笠原壱州より達　　酒井鉄(忠美)次郎

カラフト島之義ニ付、別紙之通規則取極候、右者先達而同島之内江領民出稼之義相達置候趣も有之候ニ付、為心得相達候、尤委細之義は箱館奉行可被談候、

一　からふと島規則書写

からふと島ハ魯西亜と日本との所属なれハ、島中ニある両国人民の間に行違の生せんことを慮り、互ニ永世の懇親を弥堅くせんか為メ、日本政府は右島中山河の形勢に依て境界を議定せん事を望む旨を日本大君殿下の使節はサンクトペチニルブルク江来りて、外国事務

役所へ告知ありしといへとも、魯西亜政府ハ島上にて境界を定むることハ承諾致しかたき趣を亜細亜局シレクトル役名タイニーリウエツニク官名スツレモウーホフ人名を以て報告せり、其故の巨細ハ大君殿下の使節へ陳述せり、且魯西亜政府は、右からふと島の事ニ付、双方親睦の交際を保たん事を欲し、左の存意を述たり、

第一条

両国の間に在る天然の国界アニワと唱ふる海峡を以て両国の境界と為し、からふと全島を魯西亜の所領とすへし、

第二条

右島上にて方今日本江属せる漁業等ハ、向後とも総て是迄の通り其所得とすへし、

第三条

魯西亜所属のウルップを其近傍に在るラルボイ(チ)・フラットチルボイ・フロトンの三箇の小島と共に日本江譲り、全く異論なき日本本領とすへし、

第四条

右条々承諾致難節ハ、からふと島ハ是迄の通、両国の所領と致置へし、前文の廉々互に協同せさるニ付、からふと島ハ是迄の通、両国の所領と為し置き、且両国の人民の平和を保たんか為、左の条々を仮に議定せり、

第一条

からふと島ニおゐて、両国の人民ハ睦しく誠意ニ交るへし、万一争論ある欤又ハ不和のことあらハ、裁断ハ其所の双方の司人共へ任すへし、若其司人にて決し難き事件ハ、双方近傍の奉行ニ而裁断すへし、

第二条

両国の所領たる上ハ、魯西亜人・日本人とも、全島往来勝手たるへし、且いまた建物并園庭なき処欤、総て産業の為に用ひさる場所江は移住建物等勝手たるへし、

第三条

島中の土民ハ、其身に属せる正当の理并付属所持之品

々とも、全く其身の自由たるへし、又土民は其もの之承諾之上、魯西亜人・日本人ともにこれを雇ふことを得へし、若日本人又は魯西亜人より土民金銀或は品物にて是迄既に借受け欤、又は既ニ借財を為すことあらハ、其もの望の上、前以定めたる期限の間、職業或ハ仕役を以て、これを償ふことを許すへし、

第四条

前文魯西亜政府にて述たる存意を日本政府ニ而若向後同意し、其段告知する時ハ、右ニ付而の談判議定は互に近傍の奉行へ命すへし、

第五条

前に掲たる規則ハからふと島上の双方長官承知之時より施行すへし、但し調印後六ヶ月より遅延すへからす、且此規則中に挙さる瑣末の事ニ至りてハ、都而双方の長官是迄之通取扱ふへし、

右証として双方全権任之もの此仮之規則に姓名を記し調印せり、此に双方之訳官名判を記したる英文を副たり、

日本慶応三年丁卯二月廿五日即魯暦千八百六十七年三月十八日　於北(比)特堡

小出大和守(秀実)花押

石川駿河守(鑑三郎)花押

一六一八ノ一〇

一　卯六月五日閣老井河州より達

松平越前守(春嶽)家来

大野弥三郎

右阿蘭国江罷越御誂軍艦製造中、諸職業前格別宜趣ニ付、別段之訳ヲ以御召拘、測量器械方肝煎被仰付、勤候内御扶持方五人扶持被下、為御手当金百弐拾五両被下候間、其段可申付候、尤海軍奉行並軍艦奉行承合候様可仕候、

榊原式部大輔(政敬)家来

中島　兼吉

同文言、被召抱海軍所鋳造方肝煎

一六一八ノ一一

一去月朔日於京都表、板倉伊賀守(勝静)様より同所詰家来之者御呼出しニ而、別紙之通被仰渡候様、此段御届申上候様申付越候、以上、

松平因幡守内

六月六日　小野　隼見

別紙

松平因幡守家来

水戸殿(徳川慶篤)家来当地詰之内より多人数出奔、因幡守国許へ罷越候趣相聞、事柄之趣不相分候得共、当節柄不穏挙動ニ付、到着次第留置、其旨申聞候様可仕候、

本文備前侯(池田茂政)へも差越哉之風聞仕候、尤当春中より江戸築地右同侯中御屋敷へ六七十人程、水府人滞留致居申候事、

一六一八ノ一二

一去月十八日於京都

御所御仮建江大蔵大輔家来重役之者御呼出有之、伝奏日野大納言(資宗)殿御演達之上、別紙之通御書付御渡有之、且

叡慮を以御内々賜御酒・御肴難有奉存候、此段御届申上候様被申付越候、以上、

松平越前守内

六月九日　大道寺喜三郎

別紙

国事之儀ニ付、応　召早速登京

叡慮不斜候、内患外憂切迫之　御時節候間、滞在有之厚致尽力、可奉安

叡慮之旨　御沙汰候事、

酒　三樽

鯉　十尾

一六一八ノ一三

一　卯六月九日閣老小笠原壱州御渡

大目付
御目付江

此度当地へ陸軍伝習御引移相成候ニ付、三兵為修行途中隊伍を立、品ニ寄教師同道ニ而当地近傍出行候義も可有之候、右は西洋之式法ニ寄鞘無之刀槍等をも携、罷出候事ニ付、此段為心得向々江寄々可被達置候事、

一六一八ノ一四

一　卯六月十日達

宗　対馬守（重正）江

（小笠原長行）壱岐守事、外国事務総裁被仰付候間、朝鮮国御用之義、都而同人可被談候、

一六一八ノ一五

一去月十三日於京地板倉伊賀守殿より達し有之旨届、別紙左之通、

青木源五郎

摂州長興寺村御焔硝蔵御警衛之義、御組合銃隊へ被仰付置候処、其方へ御警衛被仰付候間、委細之義は大坂町奉行可被談候、

冊子原寸　縦二四・三糎　横一六・五糎　一六枚

一六一九　上野良太郎ヨリ西郷吉之助大久保一蔵へ倫敦新聞所載ノ日本国危機ニ就テ　二通

一六一九ノ一

（封筒）
一西郷吉之助様
大久保一蔵様

上野良太郎

急用

」

比日出版セル龍同府新聞紙ニ載セタル日本之形勢、実ニ危急ナルヲ観察仕、実ニ外蕃恐ベキ事許等ヲ言上仕候、今

神州外蕃入来シ以来、姦商土人ヲ欺、莫大利ヲ求ンコト

意ノ如シ、故ニ日本ニ渡ル者実ニ数多ク御座候、従来日本国江不穏ヲ醸セシモ皆是ニ出ル者ニ御座候、然ル処此比諸藩挙リテ遠航ヲ目的仕、暫時愚眼ニ触レ、驚タル形勢ヲ陳述シ、兎角欧羅巴之習俗ヲ導入ニアラサレハ、終ニ大挙シ易ラサル事、

神州一般之通論に相成タルカト奉存候、尓来鎖サント欲ルノ論ヲ以、彼ニ説クトキハ、必ス兵ヲ以スヘシ抔恐怖セシメ、終彼ノ意ヲ振候事情ト罷成候儀、決而不可恐儀と奉存候、何ントナレハ、公法ニ反スルコトハ、宇宙一般之不可免大法ニ御座候、今欧羅巴各国、普通ヲ以テハ、他国之兵隊ヲ入ルコトハ許ス可ラサル儀ニ御座候得共、土人剣戈ヲ以テ害スル抔ノ法外ヲイタシ居候得は、日本政府取締厳重ナルニ至ラサレハ、退ケシムルノ談判モ出来間敷事ニ御座候、然ニ今新将軍宣下アリシ以来、諸藩大坂ニ会シ、一橋ニ御論判アリテ其後外蕃（後欠）

文書原寸（折紙）縦一三・二糎　横　二一糎　二枚　　封筒原寸　縦　一五糎　横八・五糎

一六一九ノ二

比日出版スル新聞紙上ニ見る処之形勢、既ニ諸藩大坂会議アリテ、一橋之曰、大将軍之任タル、我之器ニアラス、故ニ諸侯之内其任ニ当者、其職ニ昇ル可ナリト、併誰も一橋に向て答候者なかりし故、然らハ我其職ヲ奉スヘシトテ、国政元之所も一橋江御専任あるヘキヤ否奏上せし由、相見エ申候、既ニ昨夕之新聞ニ、既ニ外国ミニストル等を大坂江招キ、何か議定有之旨も相見得候処、ヲリハント英院列位任中ニアル者松木より御聞為有之筈也、右等之事情を見、大ニ相歎キ、今日本ニある有志之君侯江外夷さもゆるす可さる皇国之為肝要なる事許共相認め、急々差起候儀共承り、右之一封差上申候間、君前江御備被下度奉願上候、尤原文之侭致翻訳書相添差上度候得共、飛脚之刻限ニ相当り暇を得不申、何れ翻訳之義は於御地御取しらへ被為在相成申候義故、其侭差上申候間、可然様御披露奉願候、任差急候事故、略書如斯御座候、謹言、

（町田久成）
上野良太郎

西洋三月十七日

西郷吉之助様

大久保市蔵様

文書原寸（折紙）縦二三・五糎　横二二糎

一六二〇　内田仲之助ヨリ大久保一蔵へ

山内容堂公上京延引ノ件

十津川深瀬仲麿兼而土佐小笠原唯八と懇意中ニ而、相々参よしニ而、容堂公御登御見合之風説之趣を以、小印方江差越、全自分心得を以承候処、唯八大キニ心配之容子、実内場之混雑より御延引ニ相成、外方ニ而ハ既ニ誠因拒絶一戦ニも可及哉之風説も有之よし候得共、其程之儀ニ而ハ決而無之、乍併少々ハもつれも有之、全体夫より御延引ニも相成たる儀ニハ相違無之、御結合相成候末之儀故、是非御上京ニハ不相成候而不済事ニ候、此十四五日方ニハと大キニ苦心ニ候、大延引相成候而ハ、頓と薩江面皮上信義不相立候而ハ、返す〳〵赤面、此已後交も難出来、唯八大心配之よし、貴君御方江罷出候得共、生憎御下坂跡ニ而心事難申解、右ニ付深瀬を頼下坂為致、状実申上候含之哉ニ御座候間、決而右之手数ニ罷成可申哉、いか様森多司馬と申新留守居も因循之垣中ニ可有之哉、その様之口気之旨、深瀬申たるよし、十津川之愚物先生を頼差下位之事ニ而ハ、迚も埒明可申藩勢ニハ被伺不申、扨々笑止之次第ニ御座候、乍併弥此通之事候哉、深瀬可申候故、真信ハ難出来候得共、承得候付形行申上候、猶御地ニ而再々御聞合可被下候、兼而陰湿ハ甚敷御方ニは候得共、畢竟是ハ御延引之名をかり候趣ニ被伺申候、

一唯八申ニハ、浪華之留守居江厳敷懸合、信を天下ニ失ひ且薩ニ見放れ候而ハ、以何相立可申哉と義論も申遣候よしニ御座候、

右之通遠武より承申候間、実否ハ難相分候得共、早々申上候間、帯刀様江も御申上可被下候、相変儀ハ追々可申上候、以上、

朔日　　内田政風拝

大久保様

文書原寸　縦一八糎　横一一三・七糎

一六二　徳川慶喜卿之奏聞書

（端裏朱書）「丁卯三月五日　慶喜」

一昨丑十月中、条約勅許之節、兵庫は被止候旨　御沙汰之趣、早速外国人江可申渡之処、左候而は忽瓦解ニ及ひ、折角平穏之御趣意茂水泡ニ可相帰、且一旦取結候条約相変候は、只々信を万国ニ失候而已ニ而、所詮可被行儀ニ無之、其段深心配仕候得共、一時切迫之情態御諒察之上、条約勅許被為在候儀、尚又彼是申上候茂斟酌可仕筋ニ付、先其侭御請申上置、篤と熟考可仕奉存候折柄、長防之事件差起り、引続故大樹之大故ニ及ひ、遂ニ開港期限差迫り、各国よりは毎々申上候条件も有之、就右猶再応熟慮勘弁相尽候処、条約変更之儀強而施行仕候は、必定義理曲直之論ニ及ひ、大ニ不都合相生し、詰り百万生霊徒ニ塗炭ニ苦しみ、　皇国之御浮沈ニ茂相拘候様可成行は目前ニ有之、右様之形勢立至候上、無拠条約履行候而は、実ニ　御国体御威信共総而不相立、於職掌最不相済次第、殊ニ堅艦・利器、彼所長を取り、　皇国之富強を謀候は、今日之急務候間、何れニ茂開港可仕は至当之儀ニ有之、然ルニ今更彼是申断候は、是迄苦心仕候富強之術も一時尽果可申、且条約之儀は各国交際之基本ニ而、永久不易之規則無之候は、遂ニ強ハ弱を凌キ、弱は強ニ被制候様可相成、西洋諸国大小強弱は御座候得共、全く信義を重んし、条約致遵守候ニ付、凌奪并呑之患も無之、夫々立国罷在候事ニ而、条約之守否は国之存亡ニ相拘候儀ニ御座候得は、旁以一旦取結候条約は、是非遂行不申候而は難相叶奉存候、就而は、被為於朝廷候而も、右之事体篤と御勘考被為在候様仕度、自然利害得失如何と被思食候儀茂御座候は、参内之上巨細言上可仕奉存候、将又宇内形勢変遷之儀は、追々申上候通ニ御座候処、古今之情態尚篤と考究仕候得は、万国森列、

土地風俗之異同は有之候得共、均しく天地之化育を受、今日其生を遂其死を完ニ致候ニ於而は、素より彼此之別無之、既ニ民生同胞ニ候上は、従而信義を通候は天地之正理ニ候処、

皇国環海之御国柄を以而、坤輿中東西要衝之地ニ当り、即今海外諸州逐日相開万里比隣自在奔走之砌、独旧轍を墨守、万国普通之交接不致候而は、自然之大勢ニ相戻り不容易禍害頓ニ可相生奉存候、因而は形勢之変局、方今之機会ニ候間、四海兄弟一視同仁之古訓ニ御基被遊、天下と共ニ御更始被為在候様仕度、左候は是迄之陋習一洗、数年を不出富強充実

皇国之御武威弥増皇張、奉安　朝意候様尽力可仕奉存候、此段

奏聞仕候、以上、

三月五日　　慶喜

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六七七ノ一号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一五・七糎　横一三六糎

一六三　兵庫開港ニ付将軍徳川慶喜ノ奏聞書
将軍下坂ニ付幕府ヨリ朝廷ヘノ届書
兵庫開港ニ付将軍ヘノ朝命
兵庫開港ニ付将軍ヨリ再度ノ奏聞書
兵庫開港ニ付将軍ヘノ再度ノ朝命
右五通一冊綴

（表紙ウラニアリ、朱）「丁卯三月」

一六二ノ一

本文書ハ一六二一号文書ト同文ニ付省略ス

一六三ノ二

一御内々

大樹代替ニ付各国公使面会、先達而言上済ニ付、此節各国江相達候処、喫咭唎国兼々申立度事件有之由にて、摂海致渡来、無程各国公使参着ニ可相成候間、不日大樹下坂被在之、可被遂面会と奉存候、尤兵庫開港・条

約履行之儀ニ付而は、此程見込之趣被申上置候通ニ而、
今般下坂之趣意は、其筋之談判ニ被在之候為ニは無之、
全前件代替面会之廉ニ被在之候間、此段も御承知相成
候様被致度被存候、尤下坂時日之儀ハ、猶申立可有之
由ニ候事、

三月十八日

一六二二ノ三

一兵庫開港之儀、一昨年被止、御請之処、猶又今度申立
之次第、不容易重大之事件ニ付、被為対
先朝候而茂難被及
御沙汰筋ニ付、尚早々諸藩見込をも可被
聞食候間、於大樹茂篤と再考可有之事、

三月十九日

一六二二ノ四

一兵庫開港・条約履行之儀ニ付、過日見込之趣建言仕候
処、右は重大之事件、被対
先朝候而茂難被及
御沙汰筋ニ付、尚早々諸藩見込を茂被
聞食候間、篤と再考可仕旨
御沙汰之趣奉畏候、慶喜儀、年来闕下ニ罷在
先朝以来御趣意之程親敷相伺居、殊ニ一昨年之
御沙汰茂御座候上は、開港等輙ク建言可仕筋ニ無之候
処、
皇国之御為、利害得失勘考相尽候得共、何れニ茂過日
建言仕候通之儀ニ無御座候而は、永久御国体難相立、
軽重大小再三斟酌仕申上候次第ニ而、此上外ニ勘弁可
仕様無御座候、且一旦取結候条約変更之儀は、所詮難
相叶事勢ニ御座候間、各国より申立候儀有之節は、過
日建言之趣意を以、夫々申達置候事ニ御座候、尤打続
国事多端之折とは乍申、重大之事件ニ付、聊茂打捨何
と欤取計不申候而は不相済儀ニ御座候処、是迄遷延仕
居、今更彼是申上候段、対

朝廷深ク恐縮之至奉存候、就而は前件之次第、国家御安危之界ニ付、幾重ニも一身ニ引受、御断可申上奉存候、右之情実篤と御承知被為　在、尚今一応被尽朝議候様仕度、御尋ニ付、重而

奏　聞　仕候、以上、

三月廿二日　　慶喜

一六二二ノ五

一過日再考建言文中、且一旦取結候条約変更之儀は、所詮難相叶事勢ニ御座候間、各国より申上候儀有之節は、過日建言之趣意を以、夫々申達置候事ニ御座候云々之文面如何ニ候、何分

御沙汰有之候迄、必々開港差許候儀有之間敷、其段心得可有之旨、摂政殿被　命候事、

尤請書差出可有之事、

右三月廿九日所司代被達候、早々可達大樹武伝より申渡候事、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六七七号文書ト同文ナリ）

冊子原寸　縦二九糎　横二〇・八糎　一二枚

一六三三　仏国巴里岩下佐次右衛門ヨリ小松帯刀ヘ博覧会其他ノ件

（封筒）「小松帯刀殿　岩下佐次右衛門」

（封筒ウラ）（貼紙）「封　仏蘭西都府より」

弥御壮剛被成御座珍重奉存候、爰許皆々無異罷在申候、展観所も色々議論も為有之由候得共、琉球王と申名目ニ而、幕府を放れ出事ニ相成申候、モンフラン働ニ而展観所掛役々等頼入、漸々右之次第ニ相成候由ニ被察申候、仏政府ニ而ハ無二之助幕ニ而、御国之事を悪ミ居候様子ニ被察申候、近比ハ国民ニ漸々御国を信し候者も出来候而仕合ニ御座候、折角親ミを結事ニ御座候、最初ハ是非

仏政府を説得し、幕を放し可被申と存候処、全通弁不相分、白川ハ議論ニハ十分ニハ難用、両人之諸生も日用丈之通弁可也出来候位ニ而、議論等ハ出来不申、甚以心外之至御座候、夫ニ過日民部大輔様（稲葉正邦）着相成、直様丁寧之取扱之由、尤五六年ヶ程ナポレヨンヘ任し候間、目を開様之事ハ万端差図を頼との事之由ニ候、是等ニ而一段勢を取られ申候、江戸へ仏人陸軍師六人参居、此度海軍師五人参筈之由、雑説ニハ三ヶ年之内ニハ、大名を今通ニハ不置、西洋之通ニ名計ニ而、権威を無するなとゝ申ト申触候、乍然国民ニハ開眼之者も有之、幕をそしり、御国を信し候者も見得申候、尤仏国政府をそしる者ハ多候、議政所等ハ近比盛ニ政府を誹難する由ニ候、尤プロイスを強大ならしむるハ、仏ノ尚武無か如き者故、是非可討と云国論頻ニ起り、政府ニも不得止、展観所済次第、可取掛との事ニ而、兵器等用意する由ニ候、兵卒も大勢重ミ、大炮隊も相増候由、古狸之ナポレヨン故、実事ハ何か不分候得共、見分丈ニ而も軍之用意ハ致ニ相違無御座候、プロイスニもミニストルニビスマルクと申者有而、余程之智者之由故、めつたニ軍ニハなし申間敷候、ナホレヨンも先比より之病気全快ニ至り兼、当分も他行等ハ押而出ると申事ニ而候、病気ニ而引込候得は、弥議論相生る由ニ候、仏之勢ひも幕府を助けて日本ニ軍を出す程之事ハ有之間敷欤とも被存申候、油断ハなり不申候間、心之丈ハ手段を求候得共、ねを下け過て見下されては致方も無御座候間黙し居、商人等へ便を求め先親ミを結事ニ御座候、金主等致度と申者、一両人ハ見付申候、〇京摂之模様いかゝニ候哉、是のミ案居申候、京都之悪評有之、甚心痛仕居申候、大坂・兵庫等之所置いかゝ相成可申哉、橋も終ニ

宣下ニ相成候由、向後何様之事候哉、諸君定而御心配ニ候半、一刻も早罷帰見聞仕度候得共不任心候、適致渡海候事故、寸分之功を立度、海岳存候得共、何分も一言も通弁出来不申、心腑を腐し候事のミニ御座候、御推察可被下候、〇春ニ相成梅桜等も咲出候得共、日本之如く快

然たる気分ニ成不申候、昼夜鬱々と罷在申候、外人数ニも承候得は同断之由、英諸生も左様ニ申居候、左候得は　皇国程能所ハ無之候半、金銀有余て物毎壮大なるのミ、国ハ下国ニ候半欤と被思申候、嵐山・宇治辺之御漫遊毎々存出事ニ候、過し夜花洛之夢を見てうめき出申候、

初花のたよりいかにと恋しきに　夢より外の音信もなし、

なつかしき都のたより聞物は、さめてはかなき夢はかりなり、御一笑可被下候、終ニ歌心ニもなり不申候、〇御国益之機械等折角見かけ候得共、何分広大之仕掛ニ而直様御利益可相成とも被存不申候、馬車等ハ追々開け立可宜欤、本年も差而不入事ニ候半、軍艦も余計之者ニハ候得共、万一敵ニ被備候節ハ致方無之候間、当時流行之突船頼度と存申候、先度頼相成候船可宜存申候、断り候賦ニ候得共、左様ニも参りかね可申欤、左候ハヽ頼候而も全不用ニ而ハ無之と存申候、〇大炮等も新発明有之候得共、高料ニ而求かね申候、江戸よりも調文ニも相成居候間、彼方へ御聞合相成候ハヽ、直ニ相分り可申候、馬ニ引かせ候炮義ハ便利かと存申候、取繕之道具迄も揃居申候、〇西郷・大久保・吉井其外へ可然様御伝声奉希候、恐惶敬白、

三月十一日西洋四月十日認

岩下佐次右衛門

小松帯刀様
侍史

パリスより

文書原寸　縦二〇・七糎　横二六・五糎　二枚

封筒原寸　縦　一一糎　横七・二糎

二六四　仏人「チャルレ・デ・ラパルト」ヨリ幕府外国掛ヘノ書

仏国博覧会ニ於ケル薩摩ノ行動

（朱）「丁卯年」

一六二四ノ一

卯六月十三日閣老稲葉正邦農州御渡

大目付
御目付江

御留守中老中・若年寄壱人ツヽ泊相勤候処、今晩より

泊相止候間、其段相達、可然向々江可被達候、

六月

一六二四ノ二

一　閣老井河州（井上正直）より届

別紙之通於京都表板倉伊賀守（勝静）様へ御届申上候由、此段御聞置迄ニ申上置候、以上、

松平備前守内

六月十四日　岩田七郎兵衛

別紙

此度御達相成候水戸様（徳川慶篤）御家来、別紙名前之者、去ル六日迄ニ国元到着仕候、来意之趣は追而申上候様可仕旨、国元より申越候間、此段不取敢御届申上候、以上、

松平備前守内

五月　沢井宇兵衛

別紙

小徒人目付加藤英男、中奥番鳥居幾之助・国分尚之進・吉田伊之介・津田平助・江幡虎吉・小泉善太郎・鶴峯丑三郎・仮部金太郎、床机廻中村順介・富田彦三・坂場量一郎・村田鉄蔵・小山健蔵・小池徳次郎・森本誠之允・宇佐美兵三郎・本山総次郎・白石甚太郎・片岡五郎介・加藤鉄之助、寄合組雨宮新介・岡本栄三郎・藤田大三郎・中川竹蔵・宮田転之介・菅谷正次郎・山口正次郎・前木徳三・津村応助・川瀬助三郎、遊撃隊永井彦四郎・安井金次郎・西宮金六郎・村田鉄三郎・植原藤太郎、小寄合茅根八之助・掛札勇之介・鳥部勇太郎・小島鉄之介・野上健男・西野昇三・千種春次郎・諏訪一太郎・海後留次郎・樫村亥之介・錦引富蔵・小室左門・西野六郎、与力小山新吉・倉田幸吉・勝野保之介・金子伴之介、目付方坂島壮次郎・田辺仙蔵・安原章・野沢平十・清水藤兵衛・錦引東蔵、先手方矢頭欽之介・和智総次郎・宮丈次郎・植田金五郎・中川松次郎・田沢勝太郎・河原井三司・菅谷市太郎、矢倉方沼野井孝三郎、次勤方西野清斉、備組三原専

蔵・河原井転次郎・土岐孝次郎外ニ家来十人、

別紙

水戸様御家来岡本栄三郎・藤田大三郎・鳥居幾之助・菅谷八次郎・皆川由之介・村田鉄蔵・加治徳蔵外家来一人、

今度国元江罷越候内、右之面々歎願之趣有之、因州表へ罷越度旨申出候ニ付、家来之者差添、去ル七日出立為仕候、此段御届申上候様、国元より申付越候、以上、

五月　　松平備前守内　名

一六二四ノ三

一私儀御暇順年ニは候得共、御上洛御留守中、御人少之事ニ付、此節御暇は不被成下、御留守中御警衛筋相心得、大儀ニ被思召、猶此上勉励厚相心得候様被仰出難有奉存得其意候、然は昨年国許非常之違作之趣は兼而申上置候通ニ而、当春より領民救助手当筋之義ニ付、帰国之御暇疾より申上度罷在候処、去秋より之不収ニ而、何分旅行等無覚束、自然其儀及兼罷在候、此節速ニ本復ニは無之候得共、出勤も仕候間、帰国之願申上置度存候処、御人少之折柄頗恐入候間、当節之義は御請申上候得共、右違作ニ付当秋作迄之間、領民救助取続方甚難渋之趣、随而人気も不宣候段追々申越、心配至極御座候、就而は帰国之上取締向を始救助之差配方直々申付度候間、七月下旬より八月中旬迄之内、何卒一ト先御暇被成下置候様奉願、尤同姓次郎義は、年齢ニも相成出仕罷在候間、重臣之者差添御警衛向之義は幾重ニも相心得候様為仕可申候間、私儀は願之通被仰付被成下度、此節奉願候、以上、

六月十日　　佐竹右京大夫（義堯）

一六二四ノ四

一　卯五月十八日届

昨年以来私父子之内上京仕候様、御沙汰被為在候ニ付、

私義上京可仕筈之処、病気御座候ニ付、同姓紀伊守義上京為仕可申処、且又病気御座候間、出足延引仕候、其後追々病気快方御座候間、押而今日国許出船上京為仕候、此段御届仕候、以上、

五月廿八日　　松平安芸守（浅野茂長）

一此度私義上京仕候段、同姓安芸守より御届仕候通御座候間、先月廿八日国許出舟、今日京着、南禅寺江止宿仕候、此段御届仕候、以上、

松平紀伊守（浅野長勲）

一六二四ノ五

一　卯六月十一日於京師

御黒書院替席　出御、御上段

細川澄之助

右元服依被仰付於御縁頰御目見御慶被下、可任叙従四位下侍従之由、上意之趣、伊賀守演達之、

細川右京大夫

御刀伯耆国正綱代金十五枚

右拝領之、

一六二四ノ六

一　於京地尾張殿より

上様当時御滞京被為在候ニ付、家老共初役々此御地江被為相詰候、就夫江戸表御留守中之儀は、当分市ヶ谷屋形表門・瑜石門・表玄関は〆切被致度、尾張殿（徳川義宜）被存候、尤〆切御日限之義は、於彼地被相達候而可有御座候、此段申達候様被申越候、

四月

喜延（ヨシノブカ）

御付札

表門・瑜石門・表玄関〆切之義は御見合被成候様可申越候、

一六二四ノ七

一仙台侯若殿、六月初旬脚気之症ニ而御病死被遊候由、

尤未御内分ニ相成居候由、

但江戸表ニおゐて、

一六二四ノ八

一　卯年三月仏人より告書翰秘写

仏蘭西国人外国局ニ贈来ル書

普漏生之政府、飽く事なきの慾を逞して戦争を起せしニ依りて、政体の平穏を害せしハ、痛歎す可き事なるへし、若し此戦争なくハ、宇内第一之博覧会も一時欧羅巴の盛昌を開くとも、其勝盛秀美なるを以て、世人の望を失ふ事なかるへし、日本の博覧会も次第ニ輸送して、此事を助成在しかハ、人皆其巧ある事を称せり、又日本の交易及ひ工作の事ニ於てハ、大ニ有益ある所ニして、実ニ亜細亜洲中ニ卓越すと云ふ可し、然ルニ此事ト反して国内政務の事ニ就てハ、　大君政府統御の権を失ふ恐れあり、欧羅巴ニ而未タ曾て聞かさる大名の政事、将ニ与りて其威を振ハんとす、是れ向後の憂なきにしもあらす、此六ケ月以来より、薩摩侯・琉球王国の名、世界の政体ニ関ル事トなれり、其以前ハ我等素より之を知らす、況哉宇内政務の上ニ其名を称すへけん哉、然ルニ今日ニ至りてハ、皆之を称せり、既ニ博覧会の名籍ニも松平修理大夫源茂久琉球統轄の公殿下と記せり、然ルニ帝国日本の名、其産物の事を記するを見ス、予之を知ル、大君殿下の使節と薩摩侯の使者と会合あり、此会合の事ハ親睦を旨として、巴里ニて日本の事務ニ係るレスセプと云へる人の家ニ而催せり、其時双方より決定有りしハ、琉球ハ其侭ニ置きて、薩摩侯ハ博覧会の事を別ニして、其旗章を用ひ、大君の博覧会と共ニ之を行ハすと、此会合の故を以て、予今日薩摩の博覧物の飾を見るに、仏郎察語を以て日本薩摩の政府と書せり、右の事件ニ就而、今巴里ニある大君殿下の使節ニ予カ意見を述へ、其形勢を説しハ、予ニ於て大事と思ふ事あれハ、篤ト熟考あるを信する故ニ、既ニ外国局ニも此事の告知ありしと見ゆ、予又

巴里ニある大君の使節ニ、其望ニ応して、薩摩の製せし褒賞金の図を写して出せり、是ハ博覧会の初日ニ、薩摩の使者の頸より我国帝の眼前ニ呈せるものと云ふ、此書ニ添へる其図を製して之を贈るなり、右巨細の事ニ就而ハ、其政府の使節より告知ある可し、今日飛脚船の出帆ヲ望むを以て、委曲を尽くするに遑あらず、

千八百六十七年第四月二十四日　我卯三月廿日

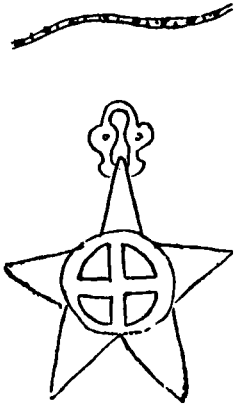
チャルレ・デ・ラパルト　記

羅尼（ローニ）　閲

日本外国局江呈

薩摩・琉球国主之褒賞金

紐　　鋳金



（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第四八七号文書ト同文ナリ）

冊子原寸　縦二四・五糎　横一六・三糎　九枚

一六三五　徳川慶喜卿之奏聞書　　別紙二葉入

本文書ハ一六二二ノ四号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸　縦一五・七糎　横一一・五糎

別紙①

（端裏朱書）「一丁卯四月朔日」

過日再考……

其段心得可有之候趣承知仕候、右は追々申上候通り、条約変更之見据無之候間、各国より趣意相尋候節ハ、其段相答候迄ニ而、御差許無之内、布告等仕候儀ニハ曽而無御座候、此段御請申上候、

別紙②

御書取之趣、大樹公江入覧候処、別紙之通り被申聞候間、
此段貴答候、以上、

四月朔日　　小笠原（長行）
　　稲葉（正邦）
　　板倉（勝静）

飛鳥井（雅典）
野宮（定功）

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六八二号文書ト同文ナリ）

文書原寸　①縦一七・八糎　横一三・五糎
　　②縦一七・八糎　横一三・八糎

一六六　内田仲之助ヨリ関山紀へ

開港ニ関スル久光公ノ意見呈出ノ朝命

（端裏朱書）「丁卯三月廿四日　内田」

一御書取　一通

但今度開港之儀、別紙之通、従
大樹公建言有之、不容易重大之儀ニ付、早々
中将様御上京
御見込之趣可被
仰上旨之儀ニ付、
一右江相添建言書弐通

伝奏
飛鳥井中納言（雅典）様
雑掌
本多左京

右より御達被成候儀有之候間、只今罷出候様雑掌中より之切紙到来、罷出候処
御書取等右雑掌を以被成
御渡候間、早速
御国元江可申上越筈御座候得共、既ニ近々
御上京之筈候間、中途行違ニ相成候而は、太切之御用
日延ニ罷成恐入候儀ニ付、如何致し可然哉と申述候処、
近々
御上京之御儀ニ候得は、四月中迄ニ
御答可被

仰上と之事候ニ付、御間ニ
御合可被成候間、
御着迄御扣置御宜く可有之哉ニ被存候旨申聞候間、宜
く御聞置給度旨申述置候、
御書取写三通差上申候、
右之通、私差支御留守居付役寄東条慶二相勤申候間、
此段申上候、以上、
卯三月廿四日　　内田仲之助（政風）
糺様
（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第三九二号
文書ト同文ナリ）
文書原寸　縦一四糎　横一四八・三糎

一六三七　桂右衛門ヨリ小松帯刀ヘ
事業緊縮、定府帰国等ノ件
尚々、町田家・関山家之外宜敷様ニ御取合被下度、
乍憚御願申上候、

不順之候御座候処、益御壮剛御奉職奉珍重候、於爰許
御両殿様其外様被為揃御機嫌好、無此上御同慶奉存候、
中将様之義既ニ今日御発船被成折から、不可得之御儀
御到来ニ而、夫故無御拠も少々御日延ニ被成、当月中
土州御出揃之御堅約、少々御期限延ニ被成、如何之御
都合欤と甚以恐懼之至ニ御座候、就而ハ此上は則より
彼是御尽力之事共申迄も無之候得共、宜敷御願申上候、
不容易御時節之事候得は、一入案労仕候儀ニハ御座候
得共、兎角　皇国　朝廷之御為不被為尽候而ハ不相済
訳故、自然天気之御良策も相立、　皇国挽回之時機ニ
至り候半と奉存候、於当方而も格別相変儀も無御座、
折角万端苦慮ニ渉候事ニハ御座候得共、何分彼是切迫
之時機ニ趣き、短才難及、尚因循ニ相過候事而已、甚
汗顔至極ニ御座候、宜御推計可被下候、将又平運丸便
よりハ只取込ニまかせ、一札之御尋も不申上、甚不埒
之至ニ御座候、関太郎ニも去ル廿二日致着、御鳳声之
趣逐一致拝承候、中濱萬次郎一条ハい細いちゝ壮も申（伊地知貞馨）

遣、風帆船御注文之弐艘ハ、甚以不本意至極ニ御座候得共、長崎ガラバ御払前追々延ニ被成候処、近来稠敷催促ニ逢候故、相乱而ハ弥増々御払前相重候故、帆前船之儀ハ得易き事ニも御座候間、先不相乱、ガラバ方勝手ニいたし候様ニ申入置候処、此度中濱取起之一条ニ付而ハ、別而不都合罷成、中濱ニハ長崎江相滞、関迄罷帰候次第ニ而、いちゝ壮書状之内ニも、当人罷下ル迄之間ハ、萬次郎ニハ御当地江留置候様との事御座候へは、長崎ニ而足を留候得は致方なく、乍併いちゝニも不遠廻崎之筈と存候付、同断罷帰候半と存申候、松岡・いちゝニも殊之外長旅ニ被成、折角相待居申候、若哉

御着船迄も罷在候時宜御座候ハヽ、何分ニも早目ニ罷下候様、御指揮被下度御願申上候、彼是何事も見合置候事而已ニ御座候、

一当方之次第ハ、罷登候面々より御聞届被下候半と存候間、致省略不申上候、

一先度被仰越候江戸定府引取儀、いつれ当方ニ而も住居之御長屋やうのもの出来不申候而ハ、数多之株数故、中村御茶屋組江向賦方為致候処、相応之御入費ニ而、とても涯々出来候処も甚以金繰六ケ敷、いつれ大坂表御金繰次第、双方御続不被成候而ハ、御請出来兼候段申出、磯紡織機械方等も差見得、相応之御入費ニ被成事候得は、押而難出来、見合置申候間、左様御心得可被下候、

一兵庫北風地面進上仕候由、何か御挨拶仰付度段、吉井（友実）より申出候付、蓑田江（伝兵衛）御合、御掛物御用意被成候間、御吟味之上可然御取計被下度、将又年々年貢取究候儀もいつれ御書付を以不被仰渡置候而ハ不相済段、吉井より承候付、是以宜敷御吟味被下度御願申上候、

先は時季御尋旁申上度、何も大略如斯御座候、恐々敬白、

三月廿五日　　桂　右衛門

小松帯刀様
参人々御中

文書原寸　縦一六糎　横一四八糎

一六二八　久光公自記上京日録（文久三年元治元年慶応三年）　三冊

但文久三年元治元年ノ分写既済
慶応三年ノ分今回写済

一六二八ノ一、二八「鹿児島県史料　玉里島津家史料」第二巻ニ掲載ニ付省略ス

冊子原寸　縦九・三糎　横一三・八糎　①三三枚　②四四枚

一六二八ノ三

上京日録御自記

慶応三年丁卯小三月廿五己卯陰東南風

四ツ半時分発三邦丸乗船、九ツ過出船、七ツ時分指宿湊前へ碇泊、晩景ヨリ雨降、

三月廿六日雨東風

朝五ツ前出船、山川湊へ碇泊、雨ニ依テナリ、

廿七日晴西北風

六ツ時分山川出船、終日航海、七ツ時分暫時外之浦へ滞船、類船待揃、日入前出船、終夜航海、

三月廿八日陰晴

今朝五ツ半時分佐賀関江着船、類船待揃碇泊、

廿九日雨東北風

暁八ツ時分佐賀関出船、夕七ツ半時分多度津へ碇泊、

大四月朔甲申雨

朝四ツ前多度津出船、九ツ半時分小豆島碇泊、七ツ半過平運丸来ル、夜入過出船、

二日晴北風

暁八ツ時分小豆島出船、朝四ツ時分大坂安治川口着船、川船乗替、昼八ツ時分屋敷着、

英仏亜蘭ノ軍艦当港ニ碇泊、兵庫開港之義申立候由、将軍ニモ当城ヘ滞留之由、

右ニ付先月廿四日、伝奏飛鳥井中納言（雅典）より上京致候様トノ御書取、留守居へ御渡相成候由、大久保一蔵ヨリ申出ル、

来ル十日頃迄滞坂ノ筋ニ決ス、

四月三日雨立夏朝四時

今朝永井主水正（尚志）大目付来ル、小松（帯刀）出会ス、将軍ヨリ御見舞ノ使ノ由、将軍ニハ今暁乗切ニテ上京ノ由ナリ、

山階宮初公卿二十二人、旧冬十月幽閉之人数、去ル廿九日御赦免有之段、京ヨリ申来ル、

四日晴

銀主目通ニ出ル、例ノ如シ、

五日晴

高崎左京（正風）山階宮御書并御品等ヲ捧シテ来ル、

公任卿筆和歌掛物、

六日陰巳刻頃より雨午后晴北風

英之進（島津忠欽）豊瑞丸へ乗船、帰国之事去正月末より天気伺名代トシテ上京

町田内膳モ同ク帰国、

七日晴天午後陰夜雨

差タルコトナシ、

八日晴申刻頃暫時夜雨冷

同前、

四月九日晴冷

同前、

四月十日晴

同、

十一日陰微雨冷

朝六ツ時乗船、淀川上り七ツ時分伏見着、

十二日陰晴申刻頃暫時雨

朝六ツ過伏見立、四ツ過京都二本松邸着、

十三日晴冷

無事、

四月十四日晴冷

同前、

十五日晴

伊達（宗城）氏今日京着之事、

英人伏見へ来ル、明日大津通行之由、

十六日晴

越前京着之事、(松平慶永)

十七日晴

右退職有之由、

広橋(胤保)・六条(有容)・久世(通熙)議奏、野宮(定功)伝奏

英人伏見より大津通行之事ニ依而也、

十八日晴

九ツ時分より将軍二条摂政邸エ来駕、終夜論判ノ由、議伝四卿之事ニ付テ憤怒候由也、可歎々々、

四月十九日朝

四ツ時出門、泉涌寺山陵拝礼候事、

但宿坊汰(法カ)安寺より衣冠着用

帰掛寺町大雲院宇和島旅宿、岡崎越前邸へ見廻、日入過帰邸、

今朝四ツ時分、将軍被帰候由、実ニ歎息ノ極也、

廿日晴

幕府ヨリ登営申来候得共、天気伺不相済ニ付断申出ル、

滋野井(実在)・正親町(公董)・鷲尾(隆聚)三卿幽閉、近衛(忠熙)・九条(道孝)・一条(実良)国事掛御免、議奏柳原(光愛)被免候由、歎息々々、

廿一日陰夜雨

八ツ後ヨリ越前・宇和島入来、夜五ツ半時分被帰候事、

廿二日雨

四月廿三日晴天

近衛・一条・九条国事掛元之通、柳原議奏復職之由変化無極、

廿四日陰

近衛家御花畑江遊歩として差越候事、尤小松旅宿也、

廿五日陰朝雨

廿六日雨

廿七日晴

四月廿八日晴天

四時出門、伝奏飛鳥井中納言宅へ見廻、　天気伺申述、夫より伝奏日野大納言(資宗)、二条摂政邸へ見舞直ニ帰ル、

廿九日陰

晦日晴

小五月朔日甲寅陰晩ヨリ雨
幕府ヨリ登営申来候得共、所労ニ付御断申出候事、土州（山内豊信）
今日京着之事、
二日晴冷
九ツ半時出門、土州屋敷へ見舞、夫より桜木御殿・山階宮御殿・近衛家御本殿へ参殿、夜五ツ過帰邸、
五月三日陰冷
四日晴
未半刻出門、越前邸へ会合土予、夜九ツ時帰ル、
五日陰晴不定昼後暫時雨
六日晴午後微雷風雨晩晴
午後出門、二条家へ参集土越予、議奏被命候様献言、七ツ半時分帰ル、
五月七日晴
昨日言上之次第、尚又四藩申談家臣ヲ以、二条・九条・一条等へ申込候事、
近衛家・柳原家へモ同断、
但二条家ハ御面会無之、
八日陰
二条家昨日御面会ナキ故、今日又々四藩家臣参殿言上候事、
九日陰入梅
十日雨
午時二条摂政家へ参殿、越与先日献言御採用御因循故、尚又御催促ノ為也、
土ハ所労ニテ不参、
夫より越与両君此邸へ集会、夜五ツ過被帰候事、
十一日陰晴
正三卿（実愛）・徳大寺卿（実則）御用召議奏被命候処、徳大寺所労ニテ不参、正三・長谷（信篤）ハ辞退之由、
但幕府ヨリ陰ニ計策虚喝ヲ唱ヘ候由、可憎、
十二日陰晩雨
未刻出門、土佐邸へ集会、越与同断、夜五ツ過帰ル、
一明日登営ノ義申来候得共、足痛故断申出候事、

十三日雨

十四日陰

午半刻登営、越与土同断、大樹君へ拝謁、兵庫開港、防長御所置之次等(第カ)御論判、夜入時分帰ル、

但酒食等賜ル事、

長谷ハ今日御請ニ相成候由、

十五日陰時々雨

十六日雨

十七日陰晴

未刻出門、土邸へ集会、越与同断、夜五ツ過帰ル、

十八日雨

十九日陰

午後出門、登営越与同断、土ハ所労、夜入前帰ル、談判先日ノ如シ、

五月廿日雨

未刻過伊達入来、明日登営之談合、暫時ニテ被帰事、

廿一日晴陰

午刻登営、越与同断、閣老板倉伊賀守(勝静)・稲葉美濃守(正邦)出会談判、申刻過帰ル、

廿二日晴天

廿三日雨

午刻ヨリ将軍参内、長州御所置・兵庫開港御伺ニテ也、越与同断、参内可致旨承知いたし候得共、足痛故御断申出ル、

夜五ツ時分、幕府御使番松平篤三郎入来、蓑田伝兵衛出会、押而参内可致旨摂政殿命之由、乍併迚モ難相成段申出御断之事、

但今夜ハ終夜御引取無之由也、

五月廿四日陰晩雨

巳刻帯刀御用ニテ御所へ出候処、是非参内可致旨越与より被申聞候得共、迚モ不相整ニ付御断申出、帯刀ヲ差出置、夜四ツ時分帯刀帰ル、

惣御引取ノ由也、

廿五日陰

長州寛大
兵庫開港
右被　仰出候事、
廿六日雨陰
四藩申合、建言ノ趣意通無之ニ依、　朝廷ニ伺書出ス、
五月廿七日陰雨
土州病気ニ付御暇ニテ今日発足帰国、舎弟兵之助残ル、
廿八日雨陰
昨夜、今日午刻後登営可致旨板老ヨリ申来ル、足痛故御断越迄申出候由、
廿九日雨陰
与州未刻後入来、夜五時被帰事、
越ハ故障ニテ不被来候、
六月朔雨
六月二日陰
三日晴
申半刻より近衛家ェ参殿、夜四ツ過帰ル、
与州同断
柳原・綾小路（有長）来会、音楽アリ、
四日晴
五日晴午後陰
仁孝天皇
二月六日
新朔平門院
十月十三日
孝明天皇
十二月廿九日
右御忌日
九月廿二日
右
今上御誕辰　御璽睦（ムツ）仁
（原本ハ判読不能ノタメ東京大学史料編纂所所蔵「久光公上京日記」ニヨル）

手帳原寸　縦六糎　横九糎

一六二九　内田仲之助ヨリ大坂大久保一蔵ヘ

山階宮以下廿二卿幽閉赦免ノ件

（端裏朱書）「丁卯三月廿九日」

山階宮并正親町三条卿其外二十二卿御一同、今日八ツ後御幽閉被免候由、尤何等之御書付等茂無之、只被免候との御事之由、大原卿御内立花右近入来、態々しらせ申候間、此旨も申上越候、御披露可被下候、

三月廿九日　　内田仲之助

大久保一蔵様

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第三九四号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦　一六糎　包紙原寸　縦二八糎　横三八・五糎　横四〇糎

一六三〇　内田仲之助ヨリ大坂大久保一蔵ヘ

土佐藩ノ因循、開鎖ノ朝議

（端裏朱書）「丁卯三月廿九日　内田」

猶々、相替儀ハ亦々可申上候、以上、

一翰拝呈仕候、弥以御安泰被成御座奉恐賀候、然は今朝土佐御留守居森多司馬と申者参、別紙之通申述候ニ付、形行細々承込差上候、いかな事土佐ハ因循説之儀ニ而ハ有之ましくハ存候得共、四五日跡ニ遠武承候ニハ、正義家起り居候処、因循家亦大沸騰ニ而、義論二ツニ分れ候との説も為承由も咄御座候、御見留之程御伺申上候、其通之事共ニ而、御堅約を御破相成候位之御人物ニ候得は尤奨ニ不足事ニ而、却而足手障りニ而、迚も必死之尽力ニハ到り兼可申哉、まさか左様之義ニ而も有之ましく候得共、陰湿位いか様相誇候而も丈々知れたる事、尤俗ニいふ陰金田虫ニ而も可有之哉、夫々諸侯より態々御使者を以御相談相成候末ニ、御日延もとふか御不都合ニ奉存候、其御許土御屋敷も御聞合相成候ハヽ、また御見合之端ニ可被成哉と奉存候、

一昨日公卿方御参　内之旨承候間、柳原（光愛）卿江今朝出懸申

候処、廿二日之進言、中山卿（忠能）一昨日御出柳原卿江御義論有之、夫より御考付ニ而、昨日御評義ニ相成候処、いつれも彼文意御頓着無之、大キニ御後悔、直様御評決ニ相成、今朝所司代、伝　奏宅江御呼出、御書取之趣ハ

先朝ニ被為対候而も不相済、尤諸侯見込も被聞食、其上開鎖之儀ハ宜敷ニ御随可有之儀ニ付、堅右之趣可存、依而御請印形いたし、早々可差出旨、大坂表江可達越旨之よし被仰聞候、且亦御書取早拝借被仰付度、内願仕候処、後程村山・井上両人間ニ可遣旨被仰聞候間、到来次第差上候様可仕候、此節　摂政公、不肖我等江重任被　仰付候間、此儀ハきく迄も条理判然不相立候而ハ　御免相成候儀ハ無之と、余程御踏こたへ之儀ニ付、万々苦心仕ましく旨被仰聞候、

一今日山階宮并二十二卿幽閉御解被　仰出候筈御決定、昼より参　内いたし候旨被仰聞候、案外之御運、恐悦此事ニ御座候、外ニ相変儀無御座候、旁帯刀殿江御披露可被下候、乱筆御免可被成下候、已上、

三月廿九日　　内田仲之助

大久保一蔵様

（付箋）「昨夕板倉ト石井応対ハ同人より相話様申置候、最早処置方も無之候也」

文書原寸　縦　一六糎　横一三四・七糎　付箋原寸　縦一六糎　横　三糎

一六三　山階宮以下堂上等朝譴赦免人名

（端裏朱書）「丁卯三月廿九日　四月　朔　日」

山　階（晃）宮　様
正親町三（実愛）条　様
中　御（経之）門　様
大　原（重徳・重朝）御父子　様
北小路（随光）左京権介（保美・保建）様
高　野　御父子　様

穂波（経度）様　久我入（建通）道様
高倉（永祐）様　千種入（有文）道様
櫛笥（隆韶）様　岩倉入（具視）道様
愛宕中（通致）将様　富小路入（敬直）道様
植松少（雅言）将様
園池少（公静）将様
高辻少（修長）将様
千種侍（有任）従様
長谷美濃権（信成）介様
岩倉侍（具綱）従様
四条大（隆平）夫様
西洞院大（信愛）夫様
愛宕大（通旭）夫様
沢主水（宣種）正様
岩倉大（具定）夫様

右去年十月廿七日御咎人々、各被
免候事、

右被　免入洛候事、
尤隠居洛外、且月々一ヶ度計帰宅不苦、一宿之外不
相成候事、

豊岡大（隨資）蔵卿様
正親町（公董）少将様
橋本（実梁）少将様
石山右兵衛（基正）権佐様
万里小（博房）路前弁様
勧修寺（経理）前弁様

右被加御近習候事、

橋本中（実麗）納言様

右被加御近習、被　免小番候事、

右　摂政様被命候事、

三月廿九日

開港之儀ニ付、御上京不申入候分も、又御上京有之候方ニ相成申候事、津軽越中守（承昭）様過日外様江御達之通、御上京可被成旨、御達相成候事、

四月朔日

文書原寸　縦一四糎　横一三五糎

一六三二　板倉稲葉両閣老ト英公使「パークス」トノ往復文書

江戸大坂兵庫外一港開港布告ノ件

一六三二ノ一

以書翰申入候、然は両都・両港相開候義ニ付、本月十二日付之来書ニ被申越し日限よりして早々布告被致候趣、政府江相談致せし処、未　大君より何之沙汰も無之旨、昨日面会之砌、板倉伊賀守（勝静）より承り候、然る処当方より申談せし通、早速布告するニ不及との御上意なり共、当方当方（衍カ）都合次第、貴国人民江右開港之一件を布告致すも子細無之旨、右閣下之口上ニ而、明白相咄可申、布告之案書伊賀守之頼ニ随ひ、本状ニ相添差上候間、其政府之布告書、当方之布告書と同日ニ被成候や、但当方先立而布告書出候事、其許等之所望ニ候哉、其段伺申度候、早速回答差越候様頼入候、拝具謹言、

ハルリース・パルクス

板倉伊賀守殿

一六三二ノ二

布告

下名之者、条約ニ取極めし如ク、貌利大泥亜臣民之為、来ル第一月一日、江戸并大坂之町・兵庫港并日本西海岸ニ而一港を開くニ十分用意セる旨之適当なる報告を、日本政府より得たる事を、女王マセスチ之臣民ニ告知セしむ、○右ニ付、フリタニア臣民前段之町并港ニ於テ、居留并交易之ため用ふへき場所ヲ取極る之所置ニ及へり、尚前条之町并港ニ付、右条約之趣意施行之為、彼是要用

所置整ひたらハ速ニ布告有へし、

於大坂

千八百六十七年第四月

一六三二ノ三

卯三月於大坂表板倉閣下より英国公使江可被差遣御返翰写

大貌利太泥亜特派公使全権ミニストル兼コンシュルセネラール・エキセルレンシー

ハルリース・パルクス

我本月廿日付書翰并両都・両港可相開儀ニ付、貴国人民江之触書案共落手披閲致し被申越趣領承セり、右は当方布告日限ニ無差構、貴国人民江被触示候義は、余等於テ異存無之候、此段回答如斯御座候、

謹言、

慶応三卯年三月日

板倉――

稲葉――

文書原寸　縦一五・七糎　横一二四・五糎

一六三三　朝廷ヨリ島津大隅守ヘ

兵庫開港可否ノ件

（端裏付箋）「島津大隅守殿」

今度開港之儀、別紙之趣従　大樹建言候、然処一昨年十月、三港

勅許之節、於彼地は被止候

御沙汰之次第も有之、不容易重大之儀ニ付、猶早々上京、見込之趣無腹臓言上可有之事、

但所労等ニ而彼是隙取候ハヽ、見込之趣先以書取、来四月中可有言上事、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第三九三号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一七・八糎　横四八・五糎

一六三四　京都内田仲之助ヨリ大坂大久保一蔵ヘ

土佐容堂上京延引其他ノ件

（端裏朱書）
「丁卯四月二日　内田」

猶々、今明日中ニは
御着船可被為　在と御左右奉待上候、小印（小笠原唯八）御取会御
争被為在候由、爰元到而淋敷、折角不都合無之様、
心之及丈ハ奔走仕事ニ御座候、何卒早目御帰京可被
成下候、別紙之末御召之処ハ、御文意段々不同ニ而
一同御上京被成候様、亦候出替之由ニ御座候、御揃
之上なとゝ申様ニ而ハ、甚手後れ之御事、此節
御召等之諸侯弐拾四ヶ藩之よし、悉くその通ニ候哉、
夫等ハ能相分り不申、何分神世ニ御座候、その通出
没、心安く出来候ものニ候得ハ、心安キものニ候得
共、茶漬飯給候様ニハ到リ兼可申笑止之仕合御座候、
朔日付之尊翰相届難有拝見仕候処、弥以御安祥被成御
滞坂奉恐賀候、異人五ヶ国とも登　城、大坂江商館取
建之内決ニ而、地面等も見分為有之哉之風評も御座候
由、　大樹登京も相分不申由申上置候、
朝廷より之御達如何
勅答可仕哉、いつれニも　大樹か閣老か登　京、形行
言上可仕と奉存候、扨土州方御届書、則差遣置候間、
自ら御返答可申上と奉存候、右ニ付小笠原より遠武ニ
面会之儀申越、昨夜脇方ニ而取会之処、御病気ハ決而
さして之儀ニ而ハ不被為在、全内場之儀ニ而、決而因
循より事起り候儀ニは無之、余り熾ん過たる程ニ而、
百姓迄茂此節ハ薩と被仰談、
天日之光御周旋被為在様（ママ）候との事ニ而、勢ひも宜敷、
乍併少々ロニも申されさる儀候而、遷延可仕候へ共、
十四五日方ニハ運立候儀無相違事ニ御座候、適々御結
合申上、今更因循仕候様ニ而ハ、実ニ天下之ロを塞キ
候儀ニハ到り兼候儀は眼前ニ而、夫等ハ御察可被下候、
勿論重役間部栄三郎と申者、廿八日方ニ土江罷帰申候
間、猶亦細々談合もいたし置候、同人儀到而正義家ニ
而、聊掛念之儀も無之、乍併少々ニ而も相延候儀ハ甚
汗顔ニ絶兼候得共、返す〳〵御変約ニ罷成候儀ニハ無
之候ニ付、右等之事情も申上度との趣之由御座候間、

真ニ其通ニも可有之と存儀ニ御座候、ロニ難述との事、金策一条共ニ而ハ有之まし く哉、大疲弊之趣もちら〳〵承事ニ御座候、昨日申上候十津川深瀬仲麿を差下候儀ハ小笠原か咄ニ一切無之、是ハ仲麿見立之様ニ御座候、余り拙策之儀と疑居候処、果して其通之事ニ而、油断なり兼申候、御先ニ御帰京被成下候との儀故、其上細々御咄可申上候、猶亦於其御許、土屋敷之説御聞糺可被下候、頭御使は御差立、御結之末之遷延ニ付、御延引之飛脚着候ハヽ、弁別いたしたる人を遣し申入候得ハ、能々相分儀候へ共、新留守居を遣候而ハ、間違も生し候訳ニ御座候、昨日之御状、小笠原江達候ハヽ、同人参る欤、亦返翰遣スか之二ツニ無御座候間、否早々申上候様可仕候、乍併所謂因循留守居と見限、応答いたし而も間ニ逢兼候と存候哉、御一笑、実ニその通ニ而御座候、

一島正作一件、委細承知仕候、乍併遠武よりハ何も承不申、只堅く引合置候ハ、薩ノ名を仮り候処ヲ止候様と迄之儀ニ御座候、何分御帰り之上、御咄承知可仕候、

一大原卿より参候様との事ニ而、今朝参上仕候、此節之御免、全薩初登京相成候ハヽ、直ニ右等之儀申立候儀ハ相違無之との処より、速ニ御運ニ相成候由承候旨被仰聞候、御尤之御不審と存居申候、外ニ相変儀無御座候、

一弥被仰渡候通、中三日之御滞坂ニ候ハヽ、御決定次第早々被仰渡候様仕度、何辺手当ニ差響儀ニ付、訳而御願申上置候、

一幽閉御免御書付壱通差上申候、

右之通乍毎乱筆を以、早々申上候、以上、

四月二日　　内田仲之助

大久保一蔵様

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六七八号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一六糎　横一八五糎

二六三五　長岡良之助より島津久光公へ

集会之件

（封筒）「島大隅守様　用事　長良之助」

（封筒ウラ）「乱筆海涵」

「

華翰拝誦仕候、清和之候愈御勇健奉抃賀候、昨烏は相互ニ愉快之論議万々奉謝候、乍去失敬之次第海涵所希候、陳は貴約之通、高調被贈下奉感佩候、扨拙も巴調差出候間御一笑可被下候、何れ明後日は集会可仕、万事期拝語候、頓首、

初夏第三　（細川護美）良之助

（島津久光）大隅守様　机下

二伸、御自愛奉専祈候、且明後日之処、愈相極候はゝ、又々一封可給候、

不尽、

文書原寸　縦一七・五糎　横　八五糎　封筒原寸　縦一八糎　横　五糎

二六三六　外国公使等大坂城登城ノ件

大坂表探索極蜜

一廿六日より四夷追々登城、謁見、本月朔日ニ而相終ル、

一或藩話

大君より兵庫開港履行之儀は、定約通無間違候、其内表立布告は、期限前六ヶ月ニ乃五月可申入旨ニ付、乃閣老江右之次第此度横浜江帰り次第、新聞紙ニ書述候而も不苦義ニ候哉と相伺候処、不苦旨閣老より返答有之、

一江戸・大坂両所江中略、已ニ大坂木津川口与力・同心居住之地立退被命、四ヶ国居住之地ニ被下置候、

一各国追々引払、英ミニストルハ兵庫出地見分之上、一先大坂江引取候よし故、少し延引相成候事、

右荒増写呈上、決而御他見は御用捨可被成下事、

四月四日

文書原寸　縦一六・七糎　横六六・八糎

一六三七　長岡良之助より島津久光公へ

尹宮二条内府御訪問之件

（封筒）「島大隅守様　用事　長良之助」

（封筒ウラ）「封」

寸楮謹呈、御清安奉賀候、今日

尹宮、二条内府（斉敬）公へ罷出申上候処、御承知之趣ニ候間、

為御安心申上候、御返詞ニは及不申候、早々頓首、

初夏第五　良之助（細川護美）

大隅守様

机下

文書原寸　縦一七・三糎　封筒原寸　縦七・七糎

横三八・三糎　横　五糎

一六三八　長岡良之助殿ヨリ島津大隅守殿へ

久光公ノ来邸ヲ求ム

（封筒）「島大隅守様　玉案下　長良之助」

（封筒ウラ）「海涵」

清和之候愈御堅剛奉大賀候、頃日は登楼愉快之至御座候、

陳は今日只今より尹宮初へ拝語仕候、付而昨日対翠（伊達宗城）公より御書中之趣謹承仕候、扨明日午時過より拙館江御入来被下候様御話も申上度候間、御差支無之候はゝ御入奉願度候、草々頓首、

初夏第五　良之助

双松賢盟

机下

二伸、昨日は一蔵（大久保）より今日之都合御知せ被下、万々奉謝候、不尽、

文書原寸　縦一七・四糎　横六〇糎

封筒原寸　縦一八・三糎　横五糎

二六九　毛受鹿之介青山小三郎ヨリ大久保一蔵へ

春嶽公着京期日ノ予報

（封紙ウワ書）「大久保一蔵様　毛受鹿之介　青山小三郎」

一書拝呈仕候、一両日は漸時節之気候ニ相運候処、愈御安泰被成御専務、鴻賀之至ニ奉存候、陳は過刻国便着ニ而大蔵大輔（松平春嶽）様ニも来ル十日御国許御発駕ニ而、十五日御京着之段申参候、兼而御沙汰も御座候ニ付、不取敢以書中為御知申上候、余事拝鳳之上江譲、草々如此ニ御座候、

頓首拝、

四月八日

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第四〇七号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一五・五糎　横五三糎

二七〇　大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ

幕府ノ態度ニ就キテ

（端裏銘）「大一蔵」

中将様益御機嫌克被為遊御滞坂恐悦御同慶奉存候、於爰元従

朝廷再度就

御沙汰、幕府御請相成候后、別段相変候義無御座候、別紙御請書写等差上申候、右之趣ニ而ハ御達之御趣意とハ相反シ、表通布告之義ヲ御請申上候筋ニ相見得、弥愚弄を極候次第御座候、当分之処ニ而ハ黙として、各藩登京之上ノ動静ヲ顧視いたし候賦ニ可有御座候、越江引合候処、別紙之通返書ニ而未相分不申候、両日之内ニハ御日限等御模様相知可申候付、早々申上候様可仕候、此段一先形行申上置候、已上、

四月八日　大久保一蔵

西郷吉之助様（鍋須賀斉裕）

追而、阿州ハ隠居、家督之御礼も有之、十二三日比

上坂相成候由ニ御座候、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第四〇六号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一六糎　横八五・二糎

一六四一　英国公使大坂ヨリ敦賀ヘ旅行許可ノ所司代通牒

大久保一蔵手写

（端裏朱書）「丁卯四月十五日」

此程滞坂之英吉利人最早用済ニ付可出帆之処、公使始敦賀表江用向有之罷越度申立、右は無余儀情実も有之、且阿蘭陀人伏見通行之先蹤も有之候間、其段差許、今十五日坂地発足之都合ニ有之、尤途中警衛之儀は厳重被申付候、此段為御心得御両卿ヘ可申入旨、年寄共申聞候、此段申進候事、

四月十五日

別紙ハ従所司代今日言上為御心得被為見候由、久世（通熙）前宰相中将被示候、仍申入候也、

文書原寸　縦一六糎　横四五糎

一六四二　結城筑後守ヨリ小松帯刀ヘ朝廷ヘノ建白要目書添　二通

（包紙ウワ書）「小松帯刀様　御直披　結城筑後守　□」

（朱「被」）□

（朱）『丁卯四月十六日』」

一六四二ノ一

（封紙ウワ書）「帯刀様　御親展　筑後守　拝」

（朱「被」）□　〆　□」

尓来は久敷不拝鳳眉候、時下清和之節益御雄健奉拝喜候、

此度は

中将様御上洛被遊誠ニ恐悦奉存候、先年茂不存寄拝

謁被仰付候故、何卒此度も　御機嫌窺参　殿仕度と、過日高崎氏江申出候処、尊公様へ向相願候而も不苦之旨、且又存付之事件ハ内々建言仕候様ニと御申聞ニ付、素より愚意言上仕候抔は深恐懼仕候、方今御一大事之御時節、夫是之御事柄御緊要と奉察上候得共、私輩ハ恐入寸言不奉申上候、乍併

朝廷之御規律も御時勢ニ御随被為在、断然と御良謨を被定候ハヽ、私輩も誠ニ難有キ御事と奉存候ニ付、議奏所綱目等之事、先年奉言上候儀有之、此度も其辺之御事柄少々ケ条ニ認、内々差上置申候、甚恐多義ニ御座候得共、自然

中将様御一覧ニ相成、其内ニ而も参　殿被仰付、右ケ条之儀共、一応愚論　御聴取被為下候ハヽ、冥加至極之至、先年も蒙　御懇命候故、斯る御時節不憚卑賤右様之儀奉申上候段ハ、幾重ニ茂

御寛恕被遊被下候様、其内御機嫌伺参　殿仕度、何分ニ茂尊公様宜御取成被為下候様、伏而奉願上候、恐惶頓首、

四月十六日

猶以今日別紙持参、委細拝顔ニ可申上心得ニ御座候へ共、御留守も難計、此書面相認封中差上置申候、

御直披御一覧被下、不苦儀と思召候ハヽ、

中将様江御内々御差出し被下度、左候ハヽ、誠ニ難有仕合奉存候、尤大久保君（利通）・大島君（西郷隆盛）へハ御内話被下候而宜候得とも、其他へハ何卒御秘シ被下候様ニ呉々奉希上候、

此愚書御一読後、御投火可被下候、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六八一号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一五・八糎　横七三・三糎

一六四二ノ二

一御国政主簡易事

諸社神祭之事

一賢才御挙用之事

一朝議奉行評定衆之事
参議唐名宰相之事
一議奏所国史館之事
綱目之事
一三公七卿之事
知事親王之事
一称公儀事
静寛院宮輪王寺宮之事
山城近江武家領之事
一官版施行之事
以上件々愚考一応奉達
高聞度、不顧恐内々言上仕候、
結城筑後守(秀康)
拝

(本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六八一号文書ト同文ナリ)

文書原寸　縦一六・三糎　横四五・五糎　包紙原寸　縦三六糎　横四八糎

一六四三　松平容保守護職ノ功労ニ依リ参議ニ推任ノ件

(端裏朱書)「丁卯四月十七日」

会津(松平容保)様

先帝叡慮遵奉長々守護之職掌相勤、其功不少叡感候、依参議被御推任、

議奏
広橋(胤保)様
六条(有容)様
久世(通熙)様

伝奏
野宮(定功)様

右各依御所労、御願之通御役被免候、今十七日より飛鳥井(雅典)家月番之事、

四月十七日

(本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六八〇ノ三号文書ト同文ナリ)

文書原寸　縦一六・八糎　横四一・五糎

一六四四　久光公ノ随手録

同三月五日兵庫開港ニ関スル慶喜ノ奏聞書
同三月十八日将軍下坂ニ付朝廷ヘノ届書
同三月十九日兵庫開港ニ付慶喜ヘノ朝命
同三月廿二日兵庫開港ニ付慶喜ノ勅答書
同三月廿四日兵庫開港ニ付諸藩ヘノ朝命
同三月廿九日公卿ニ対スル朝譴赦免ノ件
同三月廿九日兵庫開港不許可ノ朝命
同四月朔日右ニ付将軍ノ請書
同四月松平肥後守賜暇帰国願
同四月十五日英国公使敦賀行ノ件
同四月十七日議伝四人免職ノ件
同四月十七日英人大津通行ノ件

（表紙）「慶応三年丁卯四月朔　於浪華邸造之　随手録　大簡記」

一六四四ノ一

一昨丑十月中、条約
勅許之節、兵庫は被止候旨
御沙汰之趣、早速外国人江可申渡之処、左候而は忽瓦解ニ及ひ、折角平穏之御趣意も水泡ニ可相帰、且一旦取結ひ候条約相変候而は、只々信を万国ニ失候而已ニ而、所詮可被行儀ニ無之、其段深心配仕候得共、一時切迫之情態御評諒察之上、条約
勅許被為在候義、尚又彼是申上候も斟酌可仕筋ニ付、先其侭御請申上置、篤と熟考可仕奉存候折柄、長防之事件差起り、引続故大樹之大故ニ及ひ、遂ニ開港期限差迫り、各国よりハ毎々申上候条件も有之、就右猶又再応熟慮勘弁相尽候処、条約変更之義、強而施行仕候は必定義理曲直之論ニ及ひ、大ニ不都合相生し、詰り百万生霊徒ニ塗

炭ニ苦しみ、
皇国之御浮沈ニも相拘り候様可成行は目前ニ有之、右様之形勢ニ立到候上、無拠条約履行候而は、実ニ
御国体御威信共総而不相立、於職掌最不相済次第、殊ニ堅艦利器、彼所長を取り
皇国富強を謀候は今日之急務ニ候間、何れニも開港可仕は至当之義ニ有之候、然ルニ今更彼是申断候は是迄苦心仕候富強之術も一時尽果可申、且条約之義は各国交際之基本ニて、永久不易之規則無之候者、遂ニ強ハ弱を凌き、弱は強ニ被制候様可相成、西洋諸国大小強弱は御座候得共、全く信義ヲ重シ条約致遵守候ニ付、凌奪併呑之患も無之、夫々立国罷在候事ニ而、条約之守否は国之存亡ニ相拘候義ニ御座候得は、旁以一旦取結候条約は、是非遂行不申候而は難相叶奉存候、就而は被為於
朝廷候而も、右之事体篤と御勘考被為在候様仕度、自然利害得失如何と被
思食候義も御座候ハヽ、参
内之上巨細言上可仕奉存候、将又宇内形勢変遷之義ハ、追々申上候通ニ御座候処、古今之情態尚篤と考究仕候得は、万国森列土地風習之異同は有之候得共、均しく天地之化育を受、今日其生を遂、其死を完ニ致候ニ於而は、素より彼此之別無之、既ニ民生同胞ニ候上は従而信義を通候は天地之正理ニ候処、
皇国環海之御国柄を以、坤輿中東西要衝之地ニ当り、即今海外諸州逐日相開、万里比隣自在奔走之砌、独旧轍を墨守、万国普通之交接不致候而は自然之大勢ニ相戻り、不容易禍害頓ニ可相生奉存候、因而は形勢之変局、方今之機会ニ候間、四海兄弟一視同仁之古訓ニ御基被遊、天下と共ニ御更始被為在候様仕度、左候は是迄之陋習一洗、数年を不出富強充実、
皇国之御武威弥増皇張、奉安
朝意候様尽力可仕奉存候、此段奏聞仕候、以上、

三月五日　　慶喜

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六七七ノ

一号文書ト同文ナリ）

一六四四ノ二

一御内々

大樹代替ニ付、各国公使面会、先達而言上済ニ付、此節各国江相達候処、暎咭唎国兼々申立度事件有之由ニ而摂海致渡来、無程各国公使参着ニ可相成候間、不日大樹下坂被在之、可被遂面会と奉存候、尤兵庫開港・条約履行之儀ニ付而は、此程見込之趣被申上置候通ニ而、今般下坂之趣意は、其筋之談判ニ被在之候為ニは無之、全前件代替面会之廉ニ被在之候間、此段も御承知相成候様被致度被存候、尤下坂時日之義ハ、猶申立可有之由ニ候事、

三月十八日

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六七七ノ二号文書ト同文ナリ）

一六四四ノ三

一兵庫開港之義、一昨年被止御請之処、猶又今度申立之次第、不容易重大之事件ニ付、被為対

先朝候而も難被及

御沙汰筋ニ付、尚早々諸藩見込をも可被聞食候間、於大樹も篤と再考可有之事、

三月十九日

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六七七ノ三号文書ト同文ナリ）

一六四四ノ四

一兵庫開港・条約履行之義ニ付、過日見込之趣建言仕候処、右は重大之事件、被対

先朝候而茂難被及

御沙汰筋ニ付、尚早々諸藩見込をも被聞食候間、篤と再考可仕旨、

御沙汰之趣奉畏候、慶喜義、年来闕下ニ罷在、

先朝以来御趣意之程親敷相伺居、殊ニ一昨年之
御沙汰も御座候上は開港等輒く建言可仕筋ニ無之候処、
皇国之御為、利害得失勘考相尽候得は何れニも過日建
言仕候通之義ニ無御座候而は、永久御国体難相立、軽
重大小再三斟酌仕申上候次第ニ而、此上外ニ勘弁可仕
様無御座候、且一旦取結候条約変更之義は所詮難相叶
時勢ニ御座候間、各国より申立候義有之節は過日建言
之趣意ヲ以夫々申達置候事ニ御座候、尤打続国事多端
之折とは乍申、重大之事件ニ付、聊も打捨何と欤取計
不申候而は不相済義ニ御座候処、是迄遷延仕居、今更
彼是申上候段、対
朝廷深恐縮之至奉存候、就而は前件之次第国家御安危
之界ニ付、幾重ニも一身ニ引受、御断可申上奉存候、
右之情実篤と御承知被為在、尚今一応被尽
朝議候様仕度御尋ニ付、重而奏聞仕候、以上、

三月廿二日　　慶喜

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六七七ノ四号文書ト同文ナリ）

一六四四ノ五

一過日再考建言文中、且一旦取結候条約変更之儀は所詮
難相叶事勢ニ御座候間、各国より申立候儀有之候節は
過日建言之趣意を以夫々申達置候事ニ御座候云々之文
面如何ニ候、何分
御沙汰有之候迄、必々開港差許候儀有之間敷、其段心
得可有之旨、摂政殿被命候事、

尤請書差出可有之事、
（但右御請有之申、京より申来ル）
右三月廿九日所司代江達し、早々可達大樹、武伝よ
り申渡候事、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第四一九・六七七ノ五号文書ト同文ナリ）

一六四四ノ六

三月廿四日

一今度開港之儀別紙之趣従大樹建言候、然処一昨年十月、

三港

勅許之節、於彼地は被止候

御沙汰之次第も有之、不容易重大之儀ニ付、猶早々上京見込之趣無腹蔵言上可有之事、

但所労等ニ而彼是隙取候ハヽ、見込之趣先以書取、来四月中可有言上事、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第三九三号文書ト同文ナリ）

一六四四ノ七

三月廿九日

一山階宮（晃親王）　正親町三条（実愛）　中御門（経之）

大原父子（重徳・重朝）　北小路左京権大夫（随光）　高野父子（保美・保建）

穂波（経度）　高倉（永祐）　櫛笥（隆韶）

愛宕中将（通致）　植松少将（雅言）　園池少将（公静）

高辻少将（修長）　千種侍従（有任）　長谷美濃権介（信成）

岩倉侍従（具綱）　四条大夫（隆平）　西洞院大夫（信愛）

愛宕大夫（通旭）　沢主水正（宣穂）　岩倉大夫（具定）

右去年十月廿七日御咎人々、各被免候事、

久我入道（建通）　千種入道（有文）　岩倉入道（具視）

富小路入道（敬直）

右被免入洛候事、

尤住居洛外、且月々一ヶ度計帰宅不苦、一宿之外不相成候事、

豊岡大蔵卿（随資）　正親町少将（公董）

橋本少将（実愛）　石山右兵衛権佐（基正）

万里小路前弁（博房）　勧修寺前弁（経理）

右被加御近習候事、

橋本中納言（実麗）

右被加御近習、被免小番候事、

右摂政殿被命候事、

一六四四ノ八

一御召之諸藩　次第不同

尾張前大納言（徳川慶勝）　紀伊（徳川茂承）　加賀（前田慶寧）

（伊達慶邦）仙台　（黒田斉溥）筑前　（高猷）藤堂
（池田茂政）備前　（蜂須賀斉裕）阿波　（松平定安）雲州
（有馬慶頼）久留米　（上杉斉憲）米沢　（佐竹義堯）秋田　（宗重正）対州
（利剛）南部　（丹羽長国）二本松　（松平）越前春嶽
（細川慶順）肥後　（浅野長訓）芸州　（鍋島）肥前閑叟
（池田慶徳）因幡　（山内）土佐容堂　（伊達宗城）宇和島伊与守
（承昭）津軽　（立花鑑寛）柳川

一六四四ノ九

過日再考……

其段心得可有之趣承知仕候、右は追々申上候通、条約変更之見裾（据）無之候間、各国より趣意相尋候節は、其段答候迄ニ而、御差許無之内布告等仕候義ニは曽而無御座候、此段御請申上候、

御書取之趣大樹江入覧候処、別紙之通被申聞候間、此段及貴答候、以上、

四月朔日　　小笠原――
　　稲葉――
　　板倉――

飛鳥井――
野宮――

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六八二号文書ト同文ナリ）

一六四四ノ一〇

拙者儀、不肖之身を以戊年中当職被仰付候以来、都合六ケ年ニ罷成候処、右ニ付而は莫太之御下ケ金米も被成下候義ニ候得共、兼而内証逼迫致し候、又タ（本ノマヽ）昨年八月国許大火ニ而、城下過半焼失、加之非常之違作ニ而、当卯出穀迄之飯米ニも差支候振合ニ有之、四民飢餓離散之程千万心配仕候仕合ニ而、自然人気不居合、且永々之在京ニ付而は家中風儀も相弛ミ、此節改革向ニ付而も、頑固之習風家来共計ニ而は

不行届之事件も有之、旁以罷下取締向手近ニ申付度、依而は暫之間御暇被下置度、此節柄右様奉願候義、至極恐縮之儀ニ御座候得共、内実不得止仕合御憐察之上、御許容被成下候様此段宜御取成相願候、以上、

四月　　松平肥後守（容保）

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六七九号文書ト大略同文ナリ）

一六四四ノ一一

此程滞坂之英吉利人、最早用済ニ付可出帆之処、公使始敦賀表江用向有之罷越度申立、右は無余義情実も有之、且阿蘭陀人伏見通行之先蹤も有之候間、其段差許、今十五日坂地発足之都合ニ有之、尤途中警衛之義は厳重可申付候、此段為御心得御両卿江可申入旨、年寄共申聞、此段申進候事、

四月十五日

右従所司代今日言上、為御心得被為見候旨、久世（通熙）前宰相中将被示候、仍申入候也、

右大原氏より来ル、

一六四四ノ一二

伝奏（定功）野宮　議奏（嵐保）広橋　〃（有容）六条　〃（通熙）久世

右今日被免候、四月十七日

（実在・公寿）滋野井卿父子　鷲尾（隆聚）卿　正親町（公董）卿

外ニ柳原（光愛）卿　五条（為栄）卿

右人数摂政家江参集、議伝四人幕府随従ニ付、是非被免候様申立、徹夜論判有之、終ニ御免相成候事、

近衛（忠房）公　一条（実良）卿　九条（道孝）卿ニも御会合之由、

一六四四ノ一三

昨日伏見海道より大津駅英夷通行之儀、不伺定臨期通行為致候儀、殊六七人之旨ニ候之処、十七人余も有之候旨風聞候、其上兵庫開港伺中、無　御返答砌、尤無

余義情実も可有之欤ニ候得共、自今右様之事、堅固不相成候事、

右被

仰出候旨、摂政殿被命候事、

別紙之通幕府江被

仰出候、就而は一昨日伏見より大津江臨期英夷通行、不容易折柄潜伏夷人も難計候付、両駅は不及申京師等一際厳重可警衛被

仰出候旨、摂政殿被命候事、

右四月十七日伝奏飛鳥井(雅典)家より達、

横帳原寸　縦一四・八糎　横二一・五糎　一〇枚

一六四五　英人伏見大津通行ニ付京師警衛ノ朝命

本文書ハ一六四四ノ一三号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸　縦　一八糎　縦　一八糎

横四三・七糎　横三五・七糎

一六四六　有栖川宮付城多図書ヨリ久光公ヘノ建白

万世ノ国基確立ノ議

(表紙)「『有栖川王府賤臣(付箋)　城多図書』

謹　上

有栖川王府小臣　城多図書昧死頓首百拝」

有栖川王府小臣城多董稽顙頓首謹上書

羽林中将相公閣下董以寡聞孤陋之見、猥ニ天下之御大事ヲ奉妄議候儀、其罪当万死恐縮之至ニ奉存候得共、近年以来国勢陵夷人心離散、其上物価騰貴餓莩塡溝壑、天下之勢殆迫旦夕候、伝云、婺不恤其緯而憂宗周之隕寡婦スラ尚如此、然況、堂々

神州ニ生レ　列聖無疆之恩沢ニ涵泳仕ナカラ、鍼(緘)黙座視仕候ヲハ彼寡婦ニモ劣リ候儀ト深慚愧仕候、董窃聞　閣下天縦英毅忠義純悴、而謀臣猛将如雲ニ含シ如霧ニ集リ、

各以其技能期報効者不知其幾千万、加之提封百万沃野千里此故王公貴族之所倚頼草野巌穴之士之所瞻仰ニシテ、望

閣下之大施不異大旱之雲霓、其沛然之沢ヲ被ラン事ヲ奉竢候、今般奉

聖詔御入　朝被為在候ニ付テハ、為天下以光明正大之議論建万世不祓之基本令此民躋仁寿之域可給事ハ不言シテ可知ト奉存候故、敢不弄喋々饒舌候処、御入京以来既経数日候得共、寂然トシテ無所聞候ニ付テハ董之滋惑而所不解ニ御座候処、殊ニ洋夷摂海ニ碇舶仕候トハ乍申、庫港ノ開市サエ於

朝廷テハ許允不被為在ニ、傲然トシテ　闕下咫尺

山陵密邇之要地ヲ恣ニ来往仕候儀

列聖在天之神霊定メテ　震怒可被為ト恐懼戦栗仕候、往昔諸蕃之来貢ハ実ニ　聖徳威武之所光被ニテ、方今ハ則所侮弄軽蔑其　皇威衰弱国体陵弛　開闢以来未嘗有之候、目今形勢譬隣家失火延及我屋簷、而拯火之人徒環視其家遷延移時焚燬無所残、而猶説人曰、吾能尽拯火之力ト誇示候トモ三尺之童子ニテモ笑テ白痴ト仕候、今天下之勢殆将焚滅、而拯火之人非

閣下而誰欤、若遷延移時則必三千年来継承連綿之天下一朝烏有ト相成可申ハ必然ナリ、然ルヲ

閣下環視シテ不拯乎董以愚測之凡海内有邦之君、概近三百而賢明英邁威望勲績董未聞有出

閣下之右者也、又兵馬之驍鋭国用之殷富冠絶於天下、以是為天下建光明正大之議論、為万世開一定不抜之基本易於以利刃穿魯縞ト奉存候、徒ニ大有為之機会ヲ遷延被為遊候儀万有之間敷、必不可窺則之神算秘策可被為在トハ奉恐察候共、憂慮堪兼敢陳言仕候、其本乱未治者否矣、本立而道生之聖語モ有之、

閣下以不世出之材翊賛

天朝、為万世基本ヲ御建被為遊候ハ易於反掌、所謂為長者折枝之類ニテ、挾泰山踰北海之類ニハ無之、而其功烈偉勲足与日月争光

閣下之事業於是可謂成也、伏願
閣下以海嶽之量不棄芻蕘之言賜覧観採聴、独非董之幸天
下万民之大幸也、董区々一書生無所知識候得共、慷慨悲
歎之余不覚言激切以是抵罪雖湯鑊(鑊)之誅敢所不避ニ御座候、
瀆冒、
厳威恐惶恐懼戦栗屏営之至無任、
城多董薫沐頓首百拝、

冊子原寸　縦三一・七糎　横二三糎　五枚

一六四七　守護職松平肥後守賜暇帰国願
(端裏朱書)
「丁卯四月」

本文書ハ一六四四ノ九号文書ト同文ニ付省略ス

右之通、飛鳥井様書記役塚本図書より為知来候、日付
なし、

(本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六七九号
文書ト同文ナリ)

文書原寸　縦一六糎　横七一・五糎

一六四八　京都見廻組雇杉浦直三郎左衛門ノ歎訴
大赦御施行ノ件
(包紙ウワ書)
「歎訴　杉浦直三郎左衛門」

天下御大赦之義、七ヶ年前より乍恐
先帝之
叡慮、今以遅延仕候処、何卒以
御遺勅　御大赦　御施行有之、
日本国中之罪人、遠島・構・追放之者不残　御赦免有
之様、恐多候得共奉歎願上候、右歎誓之趣、
公武之御内聴江奉悲願歎訴度候、宜様御取扱被成下置
度奉恐願上候、恐懼々々、以上、
卯四月　京都見廻組御雇
杉浦直三郎左衛門

文書原寸　縦二九糎　横四〇・六糎　包紙原寸　縦四〇糎　横二九糎　二枚

一六四九　伊達宗城卿より島津久光公へ

二本松邸へ訪問ノ件

（封紙ウワ書）「島津老大兄　宗城　」

封

昨夕は貴答書拝見、参堂之義云々敬承候、明夕ハ故障御座候条、朝十字頃より拝趨、午後退去可仕、此段申上度如此御座候、頓首、

五月十日

文書原寸　縦一七・三糎　横三五糎

一六五〇　大迫？政清ヨリ伊地知壮之丞へ

（封紙ウワ書）「伊地知大兄　拝詞　政清拝上　」

国家之紀綱、即今諸侯会盟之時ニ有之、此節之機会大兄相洩候而は基より結ばるゝにあらす、実ニ苦心千万、諸侯も其通、併不可捨之大業、尤国本之土台作り立之為メ、御出崎いたし方なくとは申なから、速ニ談判御治定之上、寸歩も神速御帰国被成下度、幾重ニも海山奉待申候、

頓首、

五月十二日

返々諸事結局之時御座候間、返々も奉御祈候、以上、

文書原寸　縦一七・四糎　横六六糎

一六五一　中川宮家諸太夫？美濃守ヨリ大久保一蔵へ

山内容堂帰国願ノ件

梅雨打続候得共、愈御多祥被成御奉務奉大喜候、然は今日土藩神山左多衛参殿拝謁之上、容堂侯依所労明廿一日帰国願書指出候間、被聞食候様御取計之義同人願出候、右は定而御承知之儀と被存候得共、御心得迄可申入旨被申付候条、仍如斯御座候、匆々、以上、

五月二十日

大久保一蔵様　　美濃守

文書原寸　縦一七・七糎　横四七・四糎

一六三　越薩宇土四藩ヨリ幕府ヘノ建言

再出

（端裏朱書）「丁卯五月廿三日」

天下之大政は公明正大之至理を尽し、時世的当内外緩急之弁を明にし、御施行無御座候而は、難被相行儀勿論ニ御座候、全体不可救之今日ニ至候根由を推窮仕候得は、乍憚、

幕府年来之御失体より醸出候内、殊ニ防長再討之御一挙より物議沸騰、天下離叛之姿ニ相及候次第御座候、依之明白至当之筋を以、防長御処置可為急務、自ラ兵庫開港・防長事件は大ニ緩急先後之順序有之段、談合之上屢建言仕候儀ニ而、篤と退考仕候処、右区別を以、曲直当否之分相立、御反正之御実跡顕ると不被顕とニ相拘事候付、虚心を以

御反察被為　在候様奉願候、二件

朝廷江可被合

奏旨拝承仕候得共、

皇国之御安危ニも関係仕候付、是非至公至大之道を以私権を被為抜、治久之大策被為立候様有御座度、重大之事柄難黙止、再考之趣言上仕候、

五月廿三日　　四藩御連名

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第四二四号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一六糎　横九七糎

一六四　長州寛大処分兵庫開港ノ朝命

（端裏朱書）「丁卯五月廿四日」

長防之儀、昨年上京之諸藩、当年上京之四藩等、各寛大之所置可有

御沙汰言上、於大樹も寛大之所置言上有之、

朝廷同様被
思召候間、早々寛大之所置可取計事、
兵庫開港之事、元来不容易、殊ニ
先帝被為止置候得共、
大樹無余儀時勢言上、諸藩建白之趣も有之、当節上京之
四藩も同様申上候間、誠ニ不被為得止御差許ニ相成候、
就而は諸屹と取締相立可申事、先刻被申渡候儀も有之候
得共、無余儀子細も有之候間、別紙之通被
仰出候、此旨番々可申伝之旨、加勢堀川（親賀）三位被申渡候、
仍申入候也、

五月廿四日　　加番参仕　長熙
　　清岡式部権大夫

文書原寸　縦一五・八糎　横一二七・八糎

一六四　宰府大山格之助ヨリ桂右衛門ヘ
五卿帰洛ノ件等

乍恐拝啓仕候、追々夏気相募候処、先以　貴公様滋御
機嫌克被為遊御毎勤恐悦御儀奉存候、然は於当地　三
条殿御事も爾来愈以御平快ニ而、最早近日は平常之御
容体ニ被為向、実ニ天下之結構と可申上御儀と奉存候、
外四卿様方何も無御別条被成御座候間、乍恐御安慮被
遊可被下候、
一先度当地より吉田清右衛門上国仕居候所、去月末帰宰
仕候而、京師表より御迎船御都合等細々被仰含越趣承
知仕、尤此節は御趣意も被為貫、御基本も被為立は勿
論之御事ニ而、此上別段　朝廷より断然御帰洛御復職
等之御運ニ相成たる乎、　朝命相下り候は無疑奉遙察
候、何卒暫時も速ニ廻船等之御都合相成度、明昏れ東
方ヲ望候外無御座候、然は梅雨ニ差臨ミ連日之霖雨故
欤、彼是時節等ニは都合も不宜敷奉存候得共、夫等之
所ハ枝葉之事ニ而、如何様長延キ共、更々相厭候儀無
御座候得共、何分共各藩より日毎ニ船都合向等訊問ニ
逢候事、実ニ凌兼候次第ニ御座候、

一昨日京師より沢殿御内之者一人当地江相見得、上国之模様も承り、尤別冊雑説而已、不足採事件御座候得共、五月五日出立迄之風説ニ而、追々其御地江は相洩れ候御筈奉存候得共、指上申候間、御推覧被遊可被下候、

一爰許御続金之儀、最初三月ヲ限り御引払之見込ニ御座候処、存外延引ニ罷成候間、既ニ払底ニ相及申候ニ付、差掛　御国元迄申上候而も間ニ逢兼可申と奉存候ニ付、当藩勘定方江示談仕、於大坂為替等之相談仕候ハヽ、随分可相調儀と奉存候ニ付、自然は其通仕向仕候而御用弁可仕奉存、左様被聞召置被下度奉存候、

一九州辺何方も至極之静謐ニ御座候、肥後澄之助世子（細川護久）、去ル十八日国元出立、佐賀関より乗船之由御座候、其外此度御召之諸侯、未　上京等之儀何共分明無御座候、

一大村藩国難は、実ニ小藩ニ而は大概成次第、両三日跡渡辺昇等条公江御使者として当地江参り、細々承り驚愕之次第ニ御座候、去月十五日始大身之者両人割腹ニ而、当月十日廿人斬罪、十九日八人割腹、壱人大張本長井兵庫於牢中自殺、其外枝葉之処ニ而は名数不相分由、此跡所置容易ニ折合も付兼候哉ニ細々承り、夥敷次第ニ御座候、外ニ九路相変候儀承り及不申候、

右は今日崎陽迄便宜ニ付、当地之形行荒々奉申上度、甚疎忽之書中奉恐入候得共、宜敷御推覧被遊可被下候、恐々頓首謹言、

五月廿五日　　大山格之助

右衛門様

文書原寸　縦一七・三糎　横一五二糎

一六五　久光公等連署朝廷ヘノ伺書扣

長州処分兵庫開港ノ件

（端裏朱書）「丁卯五月廿六日」

兵庫開港・防長御処置之二件は当時不容易内外之御大事と奉存候、全体幕府防長再討之妄挙、無名之師（帥）を動、兵威を以圧倒可致心積候処、全

奏功ニ不至、天下之騒乱を引出候次第故、各藩人心離叛、

物議相起候時宜御座候、就而は即今被為立国基候急務は公明正大之御処置を以、天下ニ不被為臨候而は一円治り不相付候付、防長之儀は大膳父子官位復旧、平常之御沙汰相成、幕府反正之実跡相立候儀、第一と相心得申候間、判然明白実跡相顕候上、天下人心始而安堵可仕候得は、第二兵庫開港時務相当之御処置被為在、順序を得可申、兼而勘考仕候、先般蒙御下問候得共、未一同勅問対答不仕内、前文二件順序区別を以、幕府江屢申出置候、然処一昨廿四日防長之儀は寛大之所置可取計、兵庫開港之儀は当節上京之四藩も同様申上候間、誠ニ不被為得止、御差許ニ相成候云々、

御沙汰之御書付拝見仕、実以意外之次第、不堪驚愕仕合御座候、従朝廷御沙汰之儀、容易可奉申上筋ニ無之、甚恐懼之至奉存候得共、皇国重大之事件、事実相違之儀黙止罷在候場合ニ無御座候間、不得止一応奉伺候、以上、

五月廿六日

越前宰相（松平慶永）
島津中将（久光）
宇和島少将（伊達宗城）
土佐少将（山内容堂）

文書原寸　縦一八・七糎　横一五五糎

二六五六　西郷吉之助ノ意見書

二条摂政ノ施政方針尋問并議奏伝奏補佐推薦ノ件

（端裏朱書）「丁卯五月」

先帝崩御

新帝御幼年、無此上朝廷之御大難ニ御座候処、是迄深々御鴻恩を茂被為蒙候上之御事ニ而、尚更黙止被為居候義難被為忍御情合、

前後を不被為顧御登京被為在候義、全
朝廷之御為一筋ニ被思食候而之御事、時態ハ早乱階を
生し、後来如何之御危殆ニ被為臨候茂難計、
朝威ハ日々衰弱之姿ニ押移、昼夜寝食を不被為安御勢
ひと成行、御歎息之次第ニ候、就而ハ摂政之御大任ニ
被為居候上ハ、御持定之御策も相立居候筈ニ御座候間、
御開運之御定算をも拝聴被為成、従来之御積悶も相排、
御安心被為成度段、縷々至誠を以、初ハ御訊問被為在
度義と奉存候、屹と御大策相備居候へハ、無此上御大
幸之御義ニ御座候間、速ニ御施行相成候様、得と御責
被為在度、若哉御策も相立居不申、只高位ニ御安着共
ニ而全忠誠之御志も不相見得、一向僥倖を被欲候位之
御事ニ候得は、突然と御策を御聞取相成候而ハ、御驚
怖弥増候計ニ而、可被施手段も御失脚被為成候程も不
被測義ニ御座候間、一先御訊問之上、小事之管見欤又
ハ御無策之訳ニ候ハヽ、大小寛急之弁、能々御心ニし
ミ入、大切之義と被思食込、御醒悟被為在候様次第
〳〵ニ叩上ケさせられ候方可宜義と奉存候、

一議奏、伝奏之御進退

一議奏衆ニハ忠実之御方と智略有之御方壱人ッヽ、御
抜擢有御座度義と奉存候、
一伝奏衆之義、義気有之、決而節を不変御方両人程
も御登用相成度義と奉存候、

（付紙）
「議奏
正親町三条様（実愛）
阿野様（公誠）
醍醐様（忠順）
万里小路様（博房）
伝奏
烏丸様（光徳）
中御門様（経之）」

一御補佐

三条様（実美）

右三条様ニハ御禁錮中ニ而、決而御登用難被為成、夫々御格も有之もの故、一己之御見込を以御計出来兼候と欤、又ハ　先帝之御機嫌ニ相触候処も有之、御孝道之上御差障被為在候と欤、いつれ御拒被成候御言葉被為在候半欤、其節ハ委敷御弁明被為在度、此時勢ニ被為臨、人材と被思食候ハヽ、御旧格ニ御拘被為在候義ニ無之、御政事挙り、御一新被為在候処、第一之御格、只習弊を以公論を御破り被成候義ニ而ハ、決而不相済訳ニ御座候間、私論を捨てゝ公平至当之御所置被為施候処、得と御理解有御座度義と奉存候、

右両条ハ

朝廷之御急務、興廃之機此時ニ御座候間、先ツ大事之ケ条を以御立貫被為在候へハ、是より万機を生し可申義と奉存候、大事件之間ニ小事相雑候而ハ、必大事ハ軽ク相成候付、今日之御尽力ハ一向根元迄を以御至誠貫徹仕候処、偏奉渇望候、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六八五ノ一号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦　一六・三糎　横二五四・五糎　付紙原寸　縦一五・七糎　横一六・五糎

一六七　大原重徳卿ヨリ島津大隅守殿へ

兵庫開港ヲ歎ス

（包紙ウワ書）「島津大隅守殿　重徳

（朱）『丁卯五月』」

（包紙ウラニアリ）

口述

訪人にあふよしハなしはつかしや
　赤き心も何にゝかはセむ
つくす力たらされはこそ訪人に
　答ふ辞もなミたなり鳧
かくなりて思ひすてゝもすてやらぬ

港いましめ都まもりを　兵庫港帝都等の御警衛をわり二句申候（ママ）御推察可被下候、

扨も〳〵無念なる事ニ候、

文書原寸　縦三二糎　横四六糎

書添

御上京之御歓御土産之御礼等別ニ不相認御免被下候、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六八六号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一六糎　横三・五糎

一六六　松平伊賀守内赤松小三郎建言

天幕合体諸藩一和ノ国是ニ就テ

（包紙ウワ書）「御国事御改正之一二件奉申上候口上書

松平伊賀守内

赤松小三郎

（朱）『丁卯五月』」

数件御改正之儀奉申上候口上書

一天幕御合体、諸藩一和御国体相立候根本ハ、先天朝之権を増し徳を奉備、并ニ公平ニ国事を議し、国中ニ実ニ可被行命令を下して、少も背く事能ハさるの権有る局を御開立相成候事、

蓋権之帰すると申ハ、道理ニ叶候公平之命を下し候へハ、国中之人民承服仕候ハ必然之理ニ候、第一天朝ニ徳と権とを備へ候ニハ

天子ニ侍する宰相ハ　大君・堂上方・諸侯方・御旗本之内、道理ニ明ニして方今之事務ニ通し、万国之事情を知り候人を撰て六人を侍せしめ、一人ハ大閣老ニ而国政を司り、一人ハ銭貨出納を司り、一人ハ外国交際を司り、一人ハ海陸軍事を司り、一人ハ刑法を司り、一人ハ租税を司る宰相とし、其以下之諸官吏も皆門閥を論せす人撰して

天子を補佐し奉り、是を国中之政事を司り且命令を出す朝廷と定め、亦別ニ議政局を立て、上下二局ニ

分ち、其下局ハ国之大小ニ応して諸国より数人ツヽ、道理ニ明なる人を自国及隣国之入札ニ而撰抽し、凡百三十人を命し、常ニ其三分之一ハ都府ニ在らしめ、年限を定めて勤めしむへし、其上局ハ堂上方・諸侯・御旗本之内ニ而入札を以て人撰し、凡三十人を命せられ、交代在都して勤むへし、此両局ニて総而国事を議し、決議之上

天朝へ建白し、御許容之上、

天朝より国中ニ命し、若し御許容無きヶ条ハ、議政両局ニ而再議し、弥公平之説ニ帰すれハ、此令ハ是非共下さゝるを得さる事を

天朝へ建白して、直ニ議政局より国中ニ布告すへし、其両局人撰之法ハ、門閥貴賤ニ拘らす、道理を明弁し、私無く且人望之帰する人を公平ニ撰むへし、其局之主務ハ旧例之失を改め、万国普通之法律を立、并ニ諸官之人撰を司り、万国交際、財貨出入、富国強兵、人才教育、人気一和之法律を立候を司り候儀、御開成相成候儀、御国是之基本かと奉存候、

一人才御教育之儀、御国是相立候基本ニ御座候事、

国中人才を育候法ハ、江戸・京・大坂・長崎・箱館・新潟等之首府江ハ大小学校を営ミ、各之大学校ニハ、用立候西洋人数人ツヽを雇ひ、国中有志之者を教導せしめ、大坂ニ兵学校を建、各学科毎ニ洋人数人ツヽを雇ひ、国中兵事ニ志有る者を御教育相成、且国中ニ法律学、度量学を盛ニし、其上漸々諸学校を増し、国中之人民を文明ニ育候儀、治国之基礎ニ可有之候、

一国中之人民平等ニ御撫育相成、人々其性ニ準て充分を尽させ候事、

蓋是迄人々性ニ応して力を尽し候儀不同有之、遊民多くして農而已多く労し、他之諸民ハ運上少く候へハ、第一百姓之年貢掛り米を減し、士・商・工・僧・山伏・社人之類迄、諸民諸物ニ運上を賦し、遊楽不要ニ関り候諸業諸品ハ運上之割合を強くし、諸

民平等ニ職務ニ尽力し、士ハ殊ニ務を繁くし、国中之遊民・僧・山伏・社人・風流人・遊芸之師匠之類ニハ夫々有用之職業を授け候御所置、治国之本源ニ可有之候、

一是迄之通用金銀総而御改、万国普通之銭貨御通用相成、国中之人口と物品と銭貨と平均を得候様御算定之事、

銭貨ハ天地之形像ニ準して、万国一般円形ニ造り、且万国大凡普通之相場有之候ヘハ、是ニ準し銀貨・金貨・銅貨之割合大凡西洋各国と同様ニ御吹替、其大小品位も同等に造らす候てハ、往々万国之交際ニ不斉を生し、且交易通商之上ニ損害可有之かと奉存候、亦国中人口ニ比すれは銭貨不足セり、器財物品之不足なること甚し、故ニ銭貨を増し物品製造之術を大ニ盛ニするに非れハ、平均ニ至ること難かるへし、

一海陸軍御兵備之儀ハ、治世と乱世との法を別ち、国の貧富ニ応して御算定之事、

蓋兵ハ数寡くして、利器を備へ熟練せるを上とす、方今之形勢ニ準し候ハ、、陸軍治平常備之兵数ハ都而凡二万八千許、内歩兵二万千許・砲兵四千許・騎兵二千許、他ハ築造兵・運輸兵等とすへし、右ハ幕臣及諸藩より直ニ用立候熟兵を出し置、四年毎ニ交代せしめ、其隊長其他之官吏ハ業と人望ニ応して天朝より命せられ、望ニ応して長く勤めしむ、其兵ハ三都其外要地ニ在て警衛を職とし、此常備兵之外、士ハ勿論諸民共其土地へ教師を命し遣して平常操練せしめ、且有志之者ハ長官学校ニ入て学ハしめ、亦士ニ而も望ニ応して職業・商売勝手次第行ハしめて、往々士を減すへし、海軍は速ニ開け難し、先海軍局へ洋人を数人御雇ひ、国中望之者其外合而三千人に命して長官より水卒迄之業を学ハしめ、業之成立ニ準て新に艦を造り、亦ハ外国より買て備ふへし、即今常備之海軍は、是迄御有合之御艦ニ人を撰て乗組を命し、用立候程ニ修覆し砲を増て備ふへし、尚国

力之増すニ従て兵制を改め、兵備も充分ニ相増し、
殊ニ乱世ニハ国中之男子尽く兵ニ用立候程ニ御備之
御所置有之候儀、御兵制之大本ニ御座候、
一船艦并ニ大小銃其外兵器、或ハ常用之諸器械、衣食等
製造之機関、初ハ外国より御取寄セ、国中是ニ依而物
品に不足無き様御所置之事、
諸物製造之局ハ、運輸便利之地を撰て諸所ニ造営し、
各局ニ西洋人を雇て伝習せしめ、国中ニ職人を増し、
盛ニ諸物を製し候へハ、海陸兵用之利器海内ニ満足
し、日用之諸品廉価ニして良品を得へし、其洋人を
雇ふの費ハ、職人一人一ヶ月之雇価・食料合而凡二
百より二百五十両許なるへし、此金ハ日本在留中大
凡費すへけれは外国に持帰る貨ハ些少なるへし、故
に洋人を雇ふを少も厭ふへきにあらす、諸品製造局
ハ往々是非開かさるを得さる事なれハ、此節速ニ御
開相成候儀、当然と奉存候、
一良質之人馬及鳥獣之類御殖種之事、
蓋欧羅巴人種ハ亜細亜人種ニ勝ること現然ニ候へハ、
国中ニ良種之人を殖育し候へハ、自然人才相増し、
往々良国と相成候理ニ候、亦軍馬ハ外国之良種ニ無
之候てハ実用ニハ不便ニ御座候、又牛・羊・鶏・豕
之類、衣食ニ用て有益之種類を殖育し、往々国民皆
牛・豕・鶏等之美食を常とし、羊毛ニ而織候美服を
着候様改め候へハ、器量も従て相増し、身体も健強
に相成、富国強兵之基ニ可有之候、
此他御改正相成候而も国風人性ニ逆ハさる事件、何程
も可有之候へハ、方今無障事件丈ハ速ニ御改正相成、
其他即今難被行事ハ、人智之開け候ニ応して、漸々御
改正相成候儀、天理自然ニ可有之奉存候、斯く御国政
ニも関り候儀を奉申上候ハ甚奉恐入候得共、心付候儀
を黙止仕候も却而不本意と奉存候間、乍恐浅見之一二
端奉申上候、何卒右件々被遊御尽力、方今適当万国普
通公平之御国律相立、
天幕御合体、諸藩一和相成候様奉懇願候、昧死稽首、

慶応三年丁卯五月　　松平伊賀守内　赤松小三郎（友裕）

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第四二六号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一七・二糎　横三三・六糎　包紙原寸　縦三〇糎　横四三・五糎

○一六五九　嵯峨根良吉ヨリ久光公ニ上ル書

公武合体、国事改革建白

一六六〇　西郷吉之助ヨリ久光公ヘノ建言書

将軍慶喜トノ談判要項

（端裏朱書）「丁卯五月　西郷　大久保之大趣意」

御登営被遊候時機相成候ハヽ、一大事之御場合と奉存候付、公道を以御説破被為在、感服被致候様御議論被為在度義と奉存候間、外御方々様と得と御打合相成、御論一徹ニ相立候様有御座度、大樹公ニハ譎詐権謀之御方故、御正論ヲ御凌被成候義明乎ニ御座候間、御論を引迦し、裏ニ被相廻候欤、又ハ御改心之姿を以被欺候欤と奉存候、弥改心悔悟之場ニ立至、天下之公論を被為用候処、万々無覚束事と奉存候間、長州御所置之義、且兵庫開港之策必御尋相成候半、其節は決而御取合不被為在、第一朝廷御遵奉之筋相立不申候而は、悉ク齟齬仕候付、如何様之良策あり共行れ不申候付、屹と遵奉之道被為尽度御申立相成候ハヽ、其義ハ固より之素志ニ候間、論もなき事と御返答相成候半、然共頓と御実跡相見得不申、勿論近日

（斉敬）二条殿下江御迫相成候事件、全公平之御論共被相伺不申、其上

新帝御幼年之御義ニ御座候へハ、尚更懇々と御建言可相成処、却而威勢を以御押へ被成候次第、全御軽蔑之姿ニ相当り、御忠実相顕不申、尤志と業とハ、今日之処ハ勿論、千載ニ渉り決而不被欺ものニ御座候故、口舌を以ハ如何様共御弁解出来させられ可申候得共、中々人心之落

着ハ難相成義候、能々御明之上とは奉存候得共、全左様之御振合相見得不申候故、事々物々御難題之所置と相成候次第ニ御座候、長州之御所置といへ共、兵を労せらるゝニ不及、真実遵奉之筋被為相立候へハ、必悦服可仕義ニ御座候、夫而已ならす、外夷之義もかく迄朝廷之御憂慮被為在候義を親敷御汲受被為在候ハヽ、転倒之御所置も有御座間敷、始終朝廷ハ度外ニ置て之御扱ニ相成候故、開鎖之煩ひニ立至候事ニ御座候間、いつれ私権を離れ公平之議を以遵奉之筋相立候得は、時勢之変遷相分り、開鎖之得失貫徹可仕義ハ勿論之事ニ御座候段、一遵奉を以十事を相貫候御義論御立込相成度義と奉存候、其上は御正論ニ困窮被致候欤、又は論を詰付候而、御底意之処被相探度賦を以今日実行ヲ挙候処、如何可致哉と御尋掛相成候半、其節ハ少しも御構不被為在候而、天下之公論を以申上候義ニ而、全幕府之御威光を殺抔と申訳ニハ更ニ無之、世勢的当之論却而幕府之御為と奉存候間、虚心ニして御聞取被為在度段、御申断之上、いつれ天下之政柄ハ天朝江奉帰、幕府ハ一大諸侯ニ下り、諸侯と共ニ朝廷を補佐し、天下之公議を以所置を立、外国之定約ニおひても朝廷之御所置ニ相成候而、万国普通之定約を以御扱相成候ハヽ、忽御実行相挙、万民初而愁眉を開、皇国之為ニ力を尽んことを冀ひ人気振起り、挽回之期ニ至り一新可致事と、大道を以御諭解被為在度義と奉存候、

文書原寸　縦一六糎　横二八六糎

一六六　西郷吉之助ヨリ久光公ヘノ建言書

長州処分、五卿帰洛、兵庫開港ノ件

（端裏朱書）
「丁卯夏　西郷」
（端裏付箋）
「西郷ノ書翰」

此度御建言相成候堂上方御人物、両御役江御備相成候得は、当時

朝廷之御危篤真実御合点相成、十分御はまり相付候処、御見留被為在候上ハ、三ヶ条之御難題と申御所置ニ付而ハ、いつれ理と勢ひを明ニ被察、順序不相立候而ハ、悉瓦解可仕義と奉存候付、第一長州之御所置ハ
朝廷より幕府江一先御尋被為在度義ニ御座候、諸侯之義も追々上京可致候得共、其内幕府之見込被
聞食、猶得と諸侯之義も被　聞食、天下之公論を以
御沙汰可被為　在候間、早速建言仕候様御達相成度義ニ御座候、其節ハ三伐を申立候欤、寛典を以言上ニ及候欤、両条之義ニ御座候間、委曲御質問被為在公平至当ニ出候ハヽ、大幸之義ニ御座候ニ付、速ニ御施行相成、長州侯も御礼参　内之運ニ相成度、若猛ニ出候ハヽ、可戦之条理御糺問ニ相成度、可戦之筋有之候ハヽ、勝利なしとて可及休戦訳更ニ無之候間、如何共戦之本志可相立置之処、只今之姿ニ而ハ休戦之名を借、悔悟之語を吐、全不条理之戦ニ陥候訳ニ候得は、三伐ニ付而ハ、今一層之罪を増、全之私闘ニ立至り候故、長州ニおひても
闕下ニ哀訴と申ものニ而、軍勢ヲ押出し、謹而歎願書を
朝廷ニ奉捧、御沙汰相待候ハヽ、必幕府遮り候半、其時こそ力を合、内外より一時ニ責打候而、打挫候より外無他策事と奉存候、
一五卿方之義ハ、長州寛典之御所置相成候而、御礼参内と申場合相成候へハ、其時御帰洛相成候而可宜義と奉存候、若猛を以長州江接候賦ニ候へハ、必五卿ハ擒と被相成候義ハ案中之義と奉存候付、御帰洛被差急候而ハ宜間敷、五卿之進退ハ長州之所置ニ依而御決相成可然事と奉存候、
一兵庫開港之義ハいまた期限も不差迫、既ニ幕府ニおひてハ約定いたし居候末之事候へハ、いつれなり
朝廷之御根軸相立
朝威輝き、幕府も道を相立候様成行不申候而ハ、本道之義出来兼候付、御急務中結尾之御所置と奉存候、若

哉幕府ニおひて無道之振舞ニ立至候共、
朝廷之御居相付候上ハ
賢侯方合従之御勢力相備候ヘハ、理を尽して御進ミ相
成候而、事行れ可申、其節ハ幕府ハ御離相成候而
朝廷之開港条約ニ御振替可被為成義と奉存候、自然長
州も一体ニ相成、御策を助可申候得は、御勢ハ弥増、
十分之御策相行れ、万国普通之公法を以、外国人江被
接候ハヽ、決而天下ニ異論有御座間敷、いつれとも天
下挽回之御時節候ヘハ、
朝威振起候処、肝要之義ニ御座候、尤長州之御所置次
第、兵庫之御策も相変訳ニ御座候間、只今御申建相成
候共、御明策都而無益ニ属可申候付、先御見合相成候
方可宜義と奉存候、
右暴虎氷河（馮）之論ニ渉候得共、挽回之道更ニ相立不申、
愚考之侭相認候付、得と御熟評奉仰候、頓首、

文書原寸　縦一六糎　横三三三・五糎

一六三　議奏伝奏補欠ニ付小松帯刀ノ意見

（端裏朱書）「丁卯五月小松見込」

伝奏
万里小路右中弁（博房）卿
烏丸侍従（光徳）朝臣

議奏
中山前大納言（忠能）卿
正親町三条前大納言（実愛）卿
中御門左大弁宰相（経之）卿
徳大寺中納言（実則）卿
大原前左衛門督（重徳）卿

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六八五ノ二号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一六糎　横三四糎

一六四　長州処分ニ付幕府ノ方針ヲ論ス　伊達宗城

幕府ノ四策

（端裏朱書）
「丁卯ノ夏　伊達氏ノ論」

長防御処置於幕府四等之差可有之話

上

幕府ニ而誰も不及建言前ニ悔悟反正、寛大之処置
朝廷江被仰出候末、施為相成候ハヽ、長防は勿論挙天下
人心感戴悦服不啻候、

中

四藩より直ニ着眼之趣
大樹公及建言候時、実ハ兵庫燃眉急務、長防は跡ニ而可
然との御考候処、申上候儀如何ニも順序条理的当也トテ
頓ニ御反省、迅速被仰立云々相成候ハヽ及建白候面々ニ
も速ニ御采用難有可奉存候、且表通りは誰も不致承知候
故、従
幕府発表ト悦服可仕、

下

天朝より御書付被相下、四藩ニ而粉骨尽力及建言候而も、
兎角　幕府真に反正悔悟ニ至兼処、必死力を以再三数四
論弁論説、よふ〳〵御悔悟、改而不及歎願相済候ハヽ、
反正悔悟御座候処難有可奉存候、

下々

幕府へ竭必死力申出候而も無采用候処、元根従
天朝御書付被相下候義ニ付、
幕府之情態詳悉及
奏聞候ハヽ、殿下・鷹公・尹宮等は如何可有御座哉、其
他は満
朝同意ニ而、従
朝廷寛典被
仰出様可相成、至此時候而は
幕府は度外ニ相成、顧望する人も有之間敷候、

但揺動（煽）説

天朝より云々御施為相成に取必候なら不及建言、以前
四藩云々を以御暇相願候ハヽ、可然欤、

文書原寸　縦一八糎　横一一七・三糎

一六六四　松平越中守定敬ヨリ日野大納言飛鳥井中納言ヘ

長州処分ニ付将軍ヨリノ言上伝達

弥御安全珍重奉存候、然は昨夜被仰越候儀、早速大樹公江も申達候処、右は此程御沙汰之趣、最早遍く布告仕り、此上早々所置可取計之所、過日於禁中言上仕候通、順序も御座候儀ゆへ、即今夫々手筈取掛居候間、右相運ひ次第神速寛大之処置ニ可及被存候、尤防長処置之儀は兼而御委任之事ニ付、前件之都合相運ひ居候内、此後外々之建白等ニ寄り、御沙汰等被仰出候儀は無之儀と奉存候、此段摂政殿江御申入被置候様致度旨大樹公被申候、右御答旁如此御座候、以上、

「丁卯」（朱）　六月三日　「松平越中守」（朱）　定敬

日野大納言（資宗）殿

飛鳥井中納言（雅典）殿

文書原寸　縦三〇・五糎　横四二・三糎

一六六五　伊達伊予守ヨリ島津久光公ヘ

暑中見舞及研究生ヲ薩摩ヘ派遣ノ件

「島大隅守様（包紙ウワ書）　伊予守

密侍史

縅　『返書済』（朱）　」

毒熱難堪候処、先々愈御卓勝可被成御揃奉恭賀候、尓後は為差要事も無之候故、大ニ無音経過申候、兎角多雨少晴、秋収如何と民間心痛之時御座候、扨亦終ニ五月十六日

大樹公江戸御発途、前月念二御着京、御参内相済置、其後大阪へ御移住候得共、為何御処置も伝聞不仕候、結末如何可相成哉、弄鏃（伊達宗城）も閣下同様、例之幕疑故傍観、却而得休暇愉快而已申候、近日為何御消光候哉伺度候、先ハ暑中御動静御見舞迄如此御座候、恐々頓首、

六月十三日　伊与守

大隅守様
侍史

二伸、時下御自愛専念仕候、将亦先頃蒸艦修業ニ差出候人数之義、強而奉希ニ付、早速出足可仕処、於弊藩人数揃置可申旨、幕達故少々見合居候、尤別紙三人之者、尚又中原猶介方へ従学仕せ度、前述之者ト一同追而出立可為仕候間、可然御指揮希置候也、

文書原寸　縦一六・八糎　包紙原寸　縦三一・五糎
横　六〇糎　横四三・五糎

一六六　高松三位ヨリ小松帯刀へ

一以内翰令啓達候、逐日向暑候、倍中将公御安泰恭賀候、於足下茂弥御勇健珍賀候、誠過比已来御登京之御様子は乍承居、何分御時勢ヲ考差扣、別段御歓等も不申上、甚及御疎遠居候段、深背本意候形御用捨願入度候、尤此比辺ハ至テ無寸暇、公私多用ニ罷在旁ニ有之、漸得閑刻、乍内密御歓、且時候御安否御登滞中御見舞旁呈愚書候条、可然御披露願入候、

一寸御太刀・馬為御歓不相変令進上度、乍去態と折紙計御目六(録)ニテ及御入魂置候、宜願入候、且例之蜂腰不相替乍拙吟御慰迄及進呈候、

一扨亦御時勢益混乱、嘸々御心配御厚苦之程恐察候、先長防は寛大之御沙汰ニ相成、制札等も取払ニ相成、誠御同慶至極ニ候、乍去於毛利侯、嘸何欤御心中御察申候、此上之御配慮ヲ以一応勅使ニ而も被差向候様御周旋は不相叶哉、乍不及保実遂勤仕候手覚非無之、種々勘配之次第茂有之候、

一兵庫開港一件は御差許、誠ニ歎入候次第ニ有之、実ニ昼夜是而已ヲ歎居候、何と欤御工風(夫)ヲ以破談へ相成方ニ致し度ものニ有之候、筆談ニ而も難相述次第而已ニ存候、其内良期ヲ得候ハヽ、御談合申願度候間、従夷人兵庫ハ恐レ候而及断候風聞候、如何候哉、

一毎々御建言感心候、乍此上天下之大儀、弥宜願入候、

一保実不調法者誠以恐入候得共、先達茂内願候、何卒役席ニ御引加へ願度候へ共、中々左様之御様子ハ無之候、

乍去

貴侯之御周旋ヲ以立身役付仕度候、乍此上御良策も候ハヽ、御取持申願度候、乍内密々、此比之議奏之加勢之人体六人迄御撰人ニ而被仰付有之候、乍去壱人として御用ニ立候器ハ実ニ無之候、此辺は乍恐陽明公被為知被為居候とハ存知候得共、余り如何成器計江役席之加勢被仰付候次第ニ有之候、但シ此儀ハ保実申上候とハ決而御沙汰ハ御用捨願入候、唯々御含置ニ願入候、却而悪ミ立可申哉候間、御秘し置願入候、一扨又別段至テ火急ニ御内々御手人ヲ以御内糺シ願上度候儀有之候、別儀ニも無之候、天下ノ人民長々諸式高直、殊米価神代已来無例程之高価ニ付、万民皆及難渋居候、乍去制札取払ニ相成候ヘハ、米価も余程下落と心得、心楽ミニ申て凌来居候由ノ所、既制札ハ過日取払候得共、於米価は矢張買〆人有之候ヘハ、下落致候段ヲ困入候辺より釣上ケノ手段ニ相組シ同徒之輩、名前候ハヽ、取糺シ出来候事ニ候、右は実ニ為万民相妨候重罪人ニ可有之候、下落可致米価ヲ手段ヲ以買〆買上ケ釣上ケ居候ハ実ニ不相済候、既勢多橋辺或ハ伏見豊後橋ニテ、水中江難渋人皆々身ヲ投死シ候輩、日々何拾人共難数位ノ時節ニ付、実ニ前書買〆人釣上人等ハ、其侭助ケ置可申人物ニハ無之候、別紙ニ所書名前等記シ置候、別て天下ノ万民ヲ被助候御憐志も有之候ハヽ、至テ火急ニ御内糺シ御制度被下度候、尤大津・大坂等ヲ一番へ手厳敷御制度被下度候、町人共ノ儀ニ付、只利欲ニ迷居候而、万民ノ苦ミハ少しも頓着ハ不致候様ニ所考候、夫々買〆釣上ケ居候分ヲ不残即刻売払候様ニ御内々御制度願上度候、尤段々去月廿九日比より諸方へ洩聞え、制度日々可有之筈之所、何分ニも京・大坂共町奉行組ノ与力・同心皆々、買〆人より手ヲ入何欤扱物ニ而吟味ハ無之、夫故貴藩江願入候ハねハ、外ニ制度ノ筋ハ更ニ無之候、其上此比何時別紙名前之人物身ヲ隠シ、或ハ遠方江旅立等致し候も難計由候、雖自由今明日ノ所ニ而大坂堂島表江即刻之御内糺シ有之、

急度手厳事御工風御頼申入度、もはや一両日も罷過候後ニ而ハ間ニ合不申由ニ付、今夕明朝ノ内御乗出しニ相成候様成義ハ不相叶哉、極内々ニ而先々貴下迄御談合申越候、御見送り被成候時は、日々難渋人之助ケ場無之候故、深御勘弁、急々御制度御頼申度候、前条名前ノものヲ御引張被下候位ハ願上度候、買〆買上ケ釣上候同志ノ輩不残厳敷御申付被下、即刻売払改心致候様御所置振願上度、此段誠乍極密相願申候也、

六月十八日朝　　保実

島津中将公御国老
小松帯刀殿
極内々密々

文書原寸　縦一五・三糎　横一七七糎

一六七　松平紀伊守ヨリ幕府への建言

長防処分ノ件

長防御処置之義は、人心向背之機、天下治乱之所分ニ候得は、忌諱も不顧、毎々鄙見之趣建言仕候事ニ御座候処、今般従
御所可被処寛典旨被
仰出、為天下感喜之至奉存候、然上は速ニ御奉
勅之御沙汰可被為在筈と奉存候折柄、彼方より歎願云々之御内諭有之、就而は以書取申上置候次第も御座候得ハ、当然之御措置も可被為在と日夕企望罷在候得共、今以何之　御沙汰も無御座、此姿ニ而御遷延ニ相成候而は、折角
朝廷江御寛典被
仰立候詮無之而已ならす、重き
朝命御等閑被成置ル態ニ相当り何共奉恐入候、元来斯ル紛擾之時態ニ立至候も、畢竟於大義名分上人心不服之処有之より醸成仕候義哉と推考仕候処、尚又前条之御次第ニ而は、弥以輿論沸騰、疑惑之所積、結局如何之御不都合を生し候茂難量と深く案煩仕候、将又大膳父子士民共只管寛宥之　御沙汰渇望仕居候場合、前件
朝廷之御沙汰既ニ一統江御布告ニ迄相成候上ハ定而伝承

窃ニ
朝旨貫徹仕候様繰々不堪至願候、彼此之次第、登
営之上委悉申上度心得に御座候得共、生憎所労ニ而只様
及遅引危急之時態寸時も不忍傍観義ニ付、大略楮上を以
申上候、恐惶敬白、

六月十九日　　松平紀伊守（浅野茂勲）

文書原寸　縦一八・五糎　横一六九糎

一六六　堤三位より島津大隅守殿へ

暑中見舞

（包紙ウワ書）「島津大隅守様　　堤三位」

縅

（封紙ウワ書）「島津大隅守様　　堤三位」

大暑之候愈以御安福欣喜不斜候、御惣容様御同様珍重存
候、然は為暑中御見舞麁品一種入進覧之候、於御叱留は
千万大幸存候、仍如斯候也、敬白、

六月廿二日

文書原寸（折紙）縦一六・五糎　横　四六糎　包紙原寸　縦二八糎　横四〇糎

一六九　近衛家老女大すけ長橋より島津家老女おいま殿へ

久光公ヨリ近衛忠房卿へ御進物ノ件

（包紙ウワ書）「慶応三年丁卯六月廿八日」

（封紙ウワ書）「おいま様え　御返事まいらせ候　大すけ　長はし　より」

御文具もいふハ涼しき御しな、此比御もちゐニ成
まいらせ候御事、国焼の御品もかわゆら敷御しな
〳〵御前に置れ、御慰様ニ成まいらせ候御事、よ
ろしく御満足の御事、先方江伝えまいらせ候様、
よろしく申せとの御事にあらせまいらせ候、さて
〳〵きひしきあつさ御用心ありてまいらせ候様、

思しめしまいらせ候、めて度かしく、

御ふミのやう申入まいらせ候、仰之通り日々暑さにおハしまし候所、御機嫌よくならせまいらせ候、御世辞にも、いつもの御返りに御手付まいらせ候、何の〳〵御申分様もあらせまいらせ候、御心安して思しめし候様よろしく御申入まいらせ候、いよ〳〵内府様にも折かくの御障も有らせ給す、めて度覚しめし候、左様ニ候へハ、此御三しな三箱、島津大隅守（久光）より御慰様ニけん上致度よしにて、御伝献あらせまいらせ候、此よし早々御さた申入、ひろう申まいらせ候へハ、先々御覧しまいらせ候、さて〳〵いろ〳〵うるわしき御品々にて、早速御机ハ御もちゐに成まいらせ候御事、御満足ニ思しめし申候、かしく、

文書原寸（折紙）縦　一六糎　包紙原寸　縦　二七糎
横四五・五糎　横一八・五糎

一六七〇　大久保一蔵ヨリ在藩ノ重役ヘ

茂久公出兵上京ノ件

（端裏朱書）
「丁卯六月　大久保」

一四藩御談合之上、屢
御登営被為　在、兵庫開港・防長事件、順序区別を以
御処置相成、第一幕府御反正之実跡相顕、和同一致之
道相立、
皇国挽回治久之大策被為立候様、精々
御尽力被為遊候得共、先月廿三日大樹公参
内、言上之趣を以二件
御沙汰ニも相成、全
御趣意ニも齟齬いたし候次第ニ而、四藩　御連名ニ而
朝廷江御伺書も被差出候、畢竟
幕府之意底、四藩之
御公論を採用悔悟反正、
勅命奉戴、正大公平之道を以
皇国之御為ニ尽力可致と之趣意毛頭不相顕、是非私権
を張暴威を以、正義之藩といへとも圧倒畏伏セしむる
之所為顕然明白ニ而、実ニ不可助之次第ニ御座候、今
般

御上京之儀、
皇国未聞之
御大節ニ被為臨、
御進退を名義之上ニ被決候
御英断を以
御上京、
詔命ニ被為　応候上は、前条時宜合を以
御帰国被為　在候様ニ而は、是迄天下ニ大義を被為唱
候無二之
御忠誠、全水泡ト相成而已ならす、
皇国之大事去、終幕府
朝廷を掌握し、邪を以正を討、逆を以順を伐之場合ニ
至り候ハ案中之勢故、今一層非常之
御尽力被為　遊度、此上は兵力を備、声援を張、
御決策之色を被顕、
朝廷ニ　御尽し無御座候而は、中々動キ相付兼候故、
為御引合長州江も御使被差立御賦ニ而、就而は兼而依
御模様
太守様御出馬被　仰出置候得は、此度は自ら
御上京可被為　在事候得共、一先軍艦三艘を以一大隊
之兵士被差出、右帰帆之上、直ニ
御乗船
御上京之御用意ニ被為　遊度、決而神速
御上京ならてハ不為済段、衆論も相起可申候得共、篤
と
御熟考ニ被為及候上、兎角一大隊人数、往復之后なら
てハ
御秘籌ニも相違し、事之成否ニも関係いたし候故、分
而被仰進候間、呉々
御趣意無
御汲取違、十分
御統御被為　在、往復次第堂々
御出馬被為　在候様有御座度奉願候、
一右一大隊兵士出帆期限之義、長州之模様ニ依、寛急も

可有之候間、西郷吉之助被差越、同人より何分御国元江報知可仕候間、其内御待合如何様流説等有之候而も一歩も動キ不申候様ニ有御座度、

但同人義、近々三邦丸より被差越、同船を以報知仕候、

一　右一大隊兵士惣督被　仰付度、　島津備後殿（忠義）

一　右之参謀　右人柄御家老方より問合可仕候事、　桂右衛門殿（久武）

一　島津求馬（山内作次郎繰替（久容））　い十院左中（伊集院）　伊東彦介　右

太守様御供被　仰付度

右木藤角太夫為御使被差立候付、本文之大意同人江被　仰含

御直書を以詳細被　仰進候様奉願候、御大事之儀ニ付、必異議も相生可申候得は、乍恐第一

太守様大成之

御趣意を以、

御動揺不被為　在候様、

御確定之処専要ニ奉存候、

但

太守様御供兵隊等別紙ニ申上候、

文書原寸　縦一六糎　横三一六・五糎

一六七一　近藤勇ヨリ二条摂政及鷹司卿ヘノ建言

長防寛大ノ処置云々

一六七一ノ一

卯六月近藤勇より摂政殿下江建白

一草廬布衣之臣昌宜敬而　摂政殿下江奉言上、天下之大

政を論議仕候条、僭越之至深奉恐入候得共、数百年大平之鴻沢ニ浴し罷在、眼前　皇国累卵之危キ、実ニ難黙止候間、不憚忌諱申上候義ニ御座候、先般時勢之義ニ付、四藩より建白、長防所置之義申立候ニ付、此程公卿方御参集、御決義可相成哉之趣致伝承、実ニ驚愕仕候、元来長州征伐之儀は、去寅年五月中不受　幕府之裁許、更ニ被及　奏聞之処、速ニ奏追討之功、奉安　宸襟候様御沙汰被　仰出、　朝幕御一至之御所置ニ有之、加之当大樹公御進発之節、節刀をも賜り候義ニ而、　宸慮之所在青天白日之如し、然ニ今日ニ至り妄挙無名之師と申義ハ、勿体なくも　先帝を軽蔑致し、先将軍を踏付候始末ニ於而ハ、一円難相心得奉存候、且官位復旧と申立候義、是亦天下之紀綱典刑相立申間敷候、四藩申上候通之所置ニも立至り候ハヽ、乍恐天幕之御不都合ハ勿論、出兵之諸藩理非返而致顛倒、有罪と相成可申、向後万々一如何様之変乱差起、其節何様　詔命御下し被遊候共、卒然応命候者有之申間敷、夫而已ならす、天下之諸侯彼か如キ強暴を恣ニし、非理募り候而も、法外之御取扱を蒙候心得ニ罷有候ハヽ、弥以騒擾を醸し、如何成事出来仕間敷も難計奉存候、乍恐　天幕御権威日々変頽、侯伯駕馭之道御取失ひ、天下民心離叛致し、各国四分五裂之勢と成、終ニ縦横割拠之略を抱キ、乍恐其時ニ至り候ハヽ、天幕共ニ鎮撫統御被遊候様ハ有之間敷、愚考仕候、私ニ親睦を通し候様相成候ハヽ、　皇国未曽有之御失体、万歳遺憾ニ御座候、既ニ其機微相顕候哉ニ伝承仕候事ニ而、乗危謀乱之族無之とも難申上候、依之愚考仕候、尓後　朝威幕権之盛衰、天下之治乱、四藩之建白御採用被遊候と不被遊とニ相決候間、右一書早々幕府より御廻通之上、京詰之諸藩江御潜詢（諮カ）ニ相成候ハヽ、是非曲直明瞭可仕候、左も無之候ハヽ、御差戻し被遊度、返々も右之趣意御採用不被遊、都而其実（真か）御委任相成候ハヽ、誠ニ公武御体（落字か）ニ相成、速ニ百事御奏功ニ至り可申奉存候、恐惶謹言、

卯六月　　近藤昌宜謹上

一六七一ノ二

卯六月廿九日鷹司殿江投書写

抑天下今日之形勢ニ立至り候根本ハ申上候迄も無御座候得共、元来幕府苛政相続、脅　朝廷、毎事万民驚惑之嫌疑ニ相触候者ハ、曲直を不論シテ残忍之所置を施し、引続新将軍頗其跡を継而、先将軍ニ勝り候様之暴政を行ハセ給ふ、又

天朝ニハ公卿誠忠之方ハ讒ニ退セられ、当今執職之公卿方、公道ヲ践ミ給ふ御積ニハ候得共、文学無識暗弱ニ而、忽チ賄賂ニ泥惑して、依怙偏頗ニ陥り給ひ、　天幕共ニ俗吏権を執て跋扈し、其為ニ正義忠臣ハ苦慮不堪、非命ニして斃候者又不少、依而　神州之正気廃耗して約り　朝廷之御失体と相成候間、　朝議被為在候得共、下万民感戴仕候程之　勅命ハ不被　仰出、実ニ長歎息之至情ニ不堪候、且四藩上京、格別国家之為ニ誠忠尽力シテ　朝廷御恢復ノ御基本順序速ニ相立可申様時勢至当之大英断建立追々可仕旨、不容易申立之折柄四朝臣方憤ニ不被堪、身命ヲ抛チ四卿之大奸を除却成功、全ク　朝廷御時運之至りと、我微輩内々に愉快を催し感佩罷在候処、大樹公頓ニ摂政殿江被為迫、大暴議論を張り、御自己之意を云貫キ、　朝議を圧倒して、四奸卿を回復之事迄も暴戻ニ取計候由之処、其儀不被行と之義、至当之義と有志輩感佩仕候、扨又外夷之事件御勝算不被為在候共、大義之所在ニ而頗ル　聖断被為在度、幕府より何と奉申上候共、国家之栄辱は勝敗ニあらす、御国体之立と不立とニ可有之、立不立は只浩然タル正気之一而已なり、近時諸蛮之拓国、広地或ハ旧地を恢復し、独立不羈之国と相成も、皆剣槊練磨、銃炮弾丸雨注之間を凌き、致脱刀成功ニも、只正気之一而已也、幕府　皇国之剣馬を握り、大正気を維持して彼ニ応スルコト能ハス、彼か猛気虚喝ニ震立、難題ニ墜シ、是迄ニ及候は何れの罪ナルゾ、外夷は狡黠ニして

(二条斉敬)

神州之事情を能ク暁り知り、此上何等之　皇国之大患を醸し候哉、実ニ油断難相成、切迫之時勢ニは非スヤ、依而四藩応召上京、如前顕其尽力不容易、万一彼江軽挙之義被　仰出、愛訴を竭し致帰国候得は、勤　王之為ニ再上京は無覚束、実ニ御大事件之御場合なり、四藩之申立之如くニ而は、幕より外夷江信ヲ失ひ候而は、折角平穏之御主意も忽チ水泡ニ可相帰、左候時ハ永久御国体難相立様頻ニ姑息論を申立、四藩之周旋を被妨候哉ニ被存、尚又大樹公御参内ニ而御議論多端、長防寛大之事件を御申立、其実は兵庫開港　勅許強願、　朝議を安し奉り候蔑如之申立、然ル義を幕吏原市ナル者、（市之進）前殿下江拝謁して御同意遊し候や、其真実ハ人不知とも何ニも致セ、　朝廷を顧ミ給ハザル御麁暴之義は、尹宮（鷹司輔煕）と御同腹ハ衆人探索し知る処、全く　幕府江御阿諛之御所置欤、四奸卿之再役迄御周旋被遊候之風聞、慷慨之至りニ御座候、癸亥年御奮発之公明正大至当之　皇基ハ廃セられ候や、天下之有志ニおゐては、輔煕公（朝彦親王）ニは今日モ正義確乎トシテ聊も不被為撓屈、依而内覧之御沙汰も被為在、容易ニ御請は不被為在候共、何レニ御請無之而は難相通、左候節は専　闕下之奸を掃ハセ給ひて、忽　朝憲ハ一変して、日々ニ新にして又日々新ならんこと奉祈望候折柄、今般之御事件御周旋振り伝伺仕候処、内々有志之存込と御所置方、実ニ雲泥之齟齬、真ニ切歯之至りニ不堪奉存候、就而ハ、午年於関東決談所小林民部拷問白状之節、右府殿（徳大寺公純）ニハ反覆之御性質ニ而、御油断難相成御人体と相心得候旨申立候義は世間に顕然タリ、民部全ク己之非を隠さん為ニ妄言を吐露致候義と、一般ニ存込居候処、今度之御国事御関係之御儀におゐて、民部妄言を吐露ニは無之、驚愕至極奉存候、且御世子大納言殿（徳大寺実則、中納言カ）ニハ御若年ニ而、国家事情世態、乍憚強而御弁辞も被為在間敷哉ニ奉伺候処、御末座より無用之御弁を仰セ給ふ様専ら伝伺仕、笑嘆致サヾル者ナシ、輔佐之臣下所業之目違より斯御失体之件を被為招、皆重臣因循姑息固陋之甚敷より之事ニ而、其余推て可知、向後屹度御改心ニ而、正大之　皇基御主張、

国家江頗ル御誠忠を被為尽、聊之賄賂ニ不被為迷、奸家と御同意不被為遊御志気、御純忠ニ被為移候様、尤　朝廷ニ御人物も不被為在候間、我等真ニ千禱万祈渇望仕候得共、御諫諍之申上様も無之候間、重臣方我等之有志輩ニ代り、只管御諫言被申候へハ、急度御改心ニ而、天下至当之正論ニ癸亥前之如く被為成候処、疑ひ無之候、万一已後御改心之御体も不被為在候得は、重臣方従来之不行届ニ而、国家之罪人ニ付、其侭無事ニ而は難差置候間、其節先非後悔被成間敷候、篤と御諫言呉々も被申上、正道ニ被為入候様、飽迄懇祈罷在候、草莽之微臣、大事件筋彼是言上可仕筋は無御座候得共、実ニ多年之志願、只今水泡と相帰し候而は、天下之有志残懐之至ニ不堪、依而不顧死罪、各官方迄申述候処如斯御座候、敬白々々、

卯六月廿九日　天下草莽微臣　有志輩中

此書御玄関え投し有之候とも、又ハ牧宅え投し候とも御内之者えハ秘して更ニ不申、頓と相分り兼候よし、

一六七一ノ三

七月九日富印より廻ル新聞紙

薩脱藩田中幸助（中井弘）当時宇和島食客、去丙寅十月十五日崎陽を発シ、外国江罷越候而、仏・英ニ参り候よしニ而、丁卯五月中致帰朝、当時京師致滞在居候、同人左之通（外国江は土藩と唱し、参り候よし）

○去三月中、大樹公各国使節江初而御応接之節、仏国ミニストル而已壱人別段御達ニ而、御密談在之候ニ付、各国ミニストル不平を唱して曰、此節ハ初而之御直対ニ候得は、一同公平ニ御逢ニ相成候社至当と可申ニ、独仏而已別段ニ御逢ニ而、御密談有之段、甚不公平と不快ニ存居候よし、且仏之ミニストルは奸人之由ニ而、兼而各国之ミニストルより悪ミ居候由ニ付、長久致間敷との由、風評有之候事、

幕より仏え軍艦八拾艘計注文相成居候よし、彼も幕府

代金調達不致段ハ、疾く熟知致居候得共、矢張出来之分ハ追々送り候由、彼か意遂ニ約り迚も代料不致調達候ニ付、其節は地を割取候含之由、各国ニハ当時呑(併)并之意顕れ不申、交易様見受候得共、仏ハ隠然呑并之意を含居候よし、

○当春仏国展観会ニ

皇国よりハ幕府織物を持出し候処、各国よりハ軍艦之堅便之新工夫雛形、夫を制造之器機、或銃砲之新工夫等、巧を尽し候要器而已持出候ニ付、　皇国大失望之由、

○各国は公平之政事も行れ、他国を并呑致候程之駸々然タル勢ニ候段ハ、追々　皇国之人見分致し候事ニ候得は、於

皇国も、最早少々目も醒め、励精図治之域ニ相進ミ、以前とは変革致し居可申と存し、帰　朝致し候処、兵庫開港等之議論ニ而、根本肝要之処ニハ手届居不申候得は、ケ様之振合ニ而は不経数年外夷ニ并呑被致可申致嘆息候事、

○当時英国ヱ英学ニ罷越候者ハ

幕府　加州　芸州　肥前　長州　土州

○松平民部大輔(徳川昭武)殿ニハ、帰途仏ニ而御出合申上候との事、

○兵庫表二里四方縄張有之、追々御取建可有之との事、

楠公石碑も地方之墳墓(墳)等も掘崩しニ可相成やニも候処、其義ハ是迄之通り被成置候よし、

「丁卯(朱)六月」

冊子原寸　縦二四・五糎　横一六・五糎　七枚

一六七三　柳川藩曽我準造ヨリ薩藩ヘノ願書

薩ノ軍艦ニ乗組練習ノ件

「(包紙ウワ書)　柳河　曽我準造」

柳川　曽我準造

当秋比御尊藩ニ御軍艦御求ニ相成候由承及申候、自然相

叶候義ニ御座候ハヽ、為稽古右御軍艦ニ滞在仕度奉存候、
此段奉伏希候、以上、

六月

文書原寸　縦　一六糎　包紙原寸　縦二四・五糎
横四三・七糎　横　三三糎

一六七三　薩土盟約　二通

王政復古ノ件

（端裏朱書）
「丁卯六月　大久保」

一六七三ノ一

方今
皇国ノ務国体制度ヲ糺正シ、万国ニ臨テ不恥、是第一
義トス、其要王制復古、宇内ノ形勢ヲ参酌シ、天下後
世ニ至テ猶其遺憾ナキノ大条理ヲ以テ処セン、
国ニ二王ナシ、家ニ二主ナシ、政権一君ニ帰ス、是其
大条理、我
皇家綿々一系、万古不易、然ニ古郡県ノ政変シテ今封
建ノ体ト成ル、大政遂ニ幕府ニ帰ス、上
皇帝在ヲ不知、是ヲ地球上ニ考スルニ、其国体制度如
茲者アラン欤、然則制度一新、政権
朝ニ帰シ、諸侯会議、人民共和、然後庶幾以テ万国ニ
臨テ不恥、是ヲ以テ初テ我
皇国ノ国体特立スル者ト云ヘシ、若二三ノ事件ヲ執リ、
喋々曲直ヲ抗論シ、
朝・幕・諸侯倶ニ相弁難、枝葉ニ馳セ小条理ニ止ル、
却テ
皇国ノ大基本ヲ失ス、豈本志ナランヤ、爾後執心公平、
所見万国ニ存ス、此大条理ヲ以テ、此大基本ヲ立ツ、
今日堂々諸侯ノ責ノミ、成否顧ル所ニアラス、斃而後
已ン、
今般更始一新、我
皇国之興復ヲ謀リ、奸邪ヲ除キ、明良ヲ挙ケ、治平ヲ
求メ、天下万民之為ニ寛仁明恕ノ政ヲ為ントテ、此法
則ヲ定コト左ノ如シ、
一天下ノ大政ヲ議定スル全権ハ

朝廷ニ在リ、我
皇国之制度・法則、一切之万機、
京師之議事堂ヨリ出ヲ要ス、
一議事院ヲ建立スルハ、宜ク諸藩ヨリ其入費ヲ貢献スヘシ、
一議事院上下ヲ分チ、議事官ハ上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至マテ、正義純粋ノ者ヲ撰挙シ、尚且諸侯モ自ラ其職掌ニ因テ上院ノ任ニ充ツ、
一将軍職ヲ以テ天下ノ万機ヲ掌握スルノ理ナシ、自今宜其職ヲ辞シテ、諸侯ノ列ニ帰順シ、政権ヲ朝廷ニ帰ス可キハ勿論ナリ、
一各港外国ノ条約ハ兵庫港ニ於テ新ニ朝廷ノ大臣・諸侯ノ士夫ト衆合シ、道理明白ニ新約定ヲ立テ、誠実ノ商法ヲ行フベシ、
一朝廷ノ制度・法則ハ、往昔ヨリ之律例アリト雖モ、当今ノ時勢ニ参シ、或ハ当ラサル者アリ、宜ク其弊風ヲ一新改革シテ、地球上ニ愧サルノ国本ヲ建ン、
一此
皇国興復ノ議事ニ関係スル士大夫ハ、私意ヲ去リ公平ニ基キ、術策ヲ設ケス正実ヲ貴ヒ、既往是非曲直ヲ不問、人心一和ヲ主トシテ此議論ヲ定ムヘシ、
右議定セル盟約ハ方今ノ急務、天下ノ大事之ニ如ク者ナシ、故ニ一旦盟約決議ノ上ハ、何ソ其事ノ成敗利鈍ヲ視ンヤ、唯一心協力、永ク貫徹セン事ヲ要ス、

慶応丁卯六月

文書原寸　縦一六・二糎　横一八四・五糎

一六七三ノ二

旨主

一国体ヲ協正シ、万世万国ニ亘テ不恥、是第一義、
一王制復古ハ論ナシ、宜ク宇内形勢ヲ察シ、参酌協正スヘシ、
一国ニ二
帝無シ、家ニ二主ナシ、政刑惟一君ニ帰スヘシ、

一将職ニ居テ政柄ヲ執ル、是天地間有ルヘカラサルノ理也、宜ク侯列ニ帰シ、翼載ヲ主トスヘシ、

右方今ノ急務ニシテ、天地間常有ノ大条理也、心カラ協一ニシ、斃テ後已ン、何ソ成敗利鈍ヲ顧ニ暇有ランヤ、

皇慶応丁卯六月

文書原寸　縦一六・二糎　横五〇糎

一六五四　前田杏斎ノ三条卿容体書

三条公御病気愈々御平快、頃日は二三里位之御歩行被為在、御飲食等茂御平常通り被為在候得共、元来御弱体、殊更御脚気症有之、既ニ当月二日速ニ御壮熱憎寒、御脈洪数殆御瘧疾之景況、御苦悩甚御座候間則発表、清解之薬剤調進仕候処、程能分別相立、今日迄も御熱発之模様無御座、聊御腹部之痙攣・御咳嗽、御腰脚之御攣急等有之可申候、此迄も御病勢之緩急増減は有之候得共、此節之様御熱発御煩悶被為在候義は初而之事ニ而、御大患後故、大ニ配慮仕候得共、先御快方ニ相赴仕合之至ニ御座候、併秋熱之時分柄、長々御淹留被為在候而は、御弱体、殊更御脚気症御素有ニて、是迄は凌来候得共、此末如何之変症醸出候も難計、又々時気御感ニ相成候得は、遂ニ御脚弱衝心等之悪症蜂起仕は案中ニ御座候、就而は涯々御上洛被為在、御加養ニ相成候得は、屹と御相応可仕見及申候、此段当時之御容体大略奉申上候、以上、

七月初四　　前田杏斎（元慶）

文書原寸　縦一八糎　横八三糎

一六五五　前田杏斎ノ三条実美診断報告書

急速帰洛必要意見

三条公元来賦性薄弱、事毎ニ感動スルコト甚シク、当春比ハ諸証嶮悪、殆ント虚労状ノ如ク寒熱往来、脈細数、時ニ盗汗出テ、滑便動モスレハ一日ニ二三行、腰脚攣急シ、心下刺痛、腹部之痙攣尤甚シク、小水モ多カラス、

熟診数回、是レ脚気症タルヲ決定ス、此レヨリ魚鼈ハ勿論、膏粱ノ食味ヲ禁シ、食量ヲ減損ス、腰脚攣急ノ各処ニ鎮痙ノ香油ヲ摩擦シ、疎気利尿ノ薬剤、健胃鎮痙之丸散等間服セシム、適宜ノ運動ヲ進ム、爾来日々軽快、頗ル平常ニ異ナラス、去月廿九日ノ夜、冷気ニ感触シ、翌朔日午時ニ至リ憎寒発熱、脈洪数殆ト瘧疾ノ景況ヲ顕ス、乃チ発表清解ノ薬剤ヲ用ヒテ、其暴熱ハ纔一日ニシテ解散スルコトヲ得タリ、然レトモ咳嗽心腹ノ痙攣尚甚シク、仍テ鎮痙ノ散薬等伍用シ、漸ク快軽ニ赴クヲ得タリ、夫太宰府ノ地タルヤ、東ニ米山、東南高尾山・天拝山蟠廻シ、西北ニ四尾寺山・竈門山・岩屋岳聳ヘ、瘴癘ノ気尤甚シ、秋冷ノ候ニ至リ、豈薄弱ノ体、其気ニ感触セサルヲ得ンヤ、故ニ今時ニ当リ帰洛スルヲ以テ、其病患ヲ救療スルノ良策トス、凡脚気ノ症其生産ノ地ニ帰レハ、十ニ八九全愈ヲ得ル、予カ弁ヲ待スシテ世人ノ遍ク知ル所ナリ、今又冷気ニ再感セハ、嶮悪ノ諸症蜂起スル、踵ヲ回ラサス、摂養・食禁・運動等日々忠告シテ其ノ宜ヲ失ナハシメサランコトヲ要ス、今予カ日々焦思苦心スル所以ヲ述ル如此、此ノ嶮悪土地ヲ離レ、水土適宜ノ処ニ到リ療用セハ、頓ニ軽快ニ至リ、予カ今時ノ苦思ノ半ヲ減センコト必セリ、偏ニ迎船ノ神速ナルヲ希望スト云、

前田杏斎（元凱）

卯七月九日

文書原寸　縦一八・二糎　横一二〇・五糎

一六七六　江戸篠崎彦十郎ヨリ京都御家老座ヘノ報告

幕役任命ノ件　外一通　合二通

（包紙ウワ書）「京都御家老座　篠崎彦十郎」

一六七六ノ一

京師より只今急飛脚着仕申候付、早速奉差上候、以上、

文書原寸　縦一六・五糎　横一一・七糎

一六七六ノ二

六月十八日

一川勝美作守事、備後守と改名之事、（広運）

六月廿一日

一若年寄　秋月右京亮（種樹）

右被　仰付候、

六月廿五日

一若年寄　寺社奉行（尚服）
会計奉行　永井肥前守

右被　仰付候、

七月五日

若年寄　寺社奉行（近説）
松平左衛門尉

右被　仰付候、

右之通御沙汰書ニ相見得申候間、此段申上越候、以上、

卯七月十日　篠崎彦十郎
京都
御家老座

文書原寸　縦一四・二糎　横　六四糎　包紙原寸　縦一九・五糎　横二八・三糎

一六七七　毛利広封敬親両公より島津中将公へ

礼詞

毛利大膳
毛利長門

（包紙ウワ書）「松平大隅守様

□（朱「緘」）『丁卯（朱）七月廿六日』」

一束拝啓仕候、秋暑之節先以御清寧御滞京可被為在と珍重奉存候、扨当春已来、皇威御回復朝政御基本凛然立させられん為、頗被為尽御誠力、不堪欽慕、しかのみならす敝国之事件迄も屢預御建言奉感佩候、近頃禁中之御様子、遙に謹聞仕候得は、恐こくも新帝御幼冲被為在候処、於幕府も更ニ反正之行無之趣、いかにも痛哭悲歎之至御座候、就而は不一形御苦心可被為成と奉想像候、はた防長之義、斯まて御周旋被成下候は、実以望外之仕合御座候、然とも千一も其辺よりして

神州之紛乱ニ立いたり候而は、奉対
天朝、人臣之職片時も不安候得は、生等一身之上いかに
相成候も素り(遺)憾無御座、只管政権帰
上、万民安悦仕候様有之度奉祈願候、是父子之宿意御座
候間、此所深御含置被下、弥御励精御尽忠あらまほしく
奉依頼候、又頃日
御所之御摸様、前途之御目的等不苦事件、詳悉被仰聞候
は、幸甚之至奉存候、書余賤价より御了承可被下候、先
は春来之謝礼旁如斯御座候、恐惶謹言、

文月廿六日　　広封
　　敬親

中将君
玉床下

二伸、為
邦家、別而御加養奉専念候、毎々御家臣被差寄、貴
地之形勢御報知被成下奉感銘候、此品乍非薄差出申
候、聊当節御尋訪之寸衷のミ御嘲留奉冀候、頓首、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六九〇号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦　一八糎　横二二一糎　包紙原寸　縦二七・五糎　横四〇・五糎

一六七八　桂右衛門ヨリ京都小松帯刀ヘ
英式採用ノ件其他

（端裏書）「小松兄」

猶々、毎々乍自由町田氏(久成)、関山氏(礼)江宜敷御鳳声奉願
候、其外西郷(隆盛)初　君側辺江も宜敷御願申上候、甚憚
を不顧奉願候、毎もなから麁紙乱筆失敬御容恕可被
下候、差掛相認候得は麁略ハ勿論申上後れ候儀而已
ニ而、不行届御高免奉仰候、
残暑去兼候之処、弥御壮剛被成御奉職奉珍重候、
中将様御機嫌能被遊御座奉至慶候、
御煩も日々御順快被為在候半、乍恐奉悦候、於爰許
御方々様御機嫌能御同慶奉存候、私ニも無異消光罷在
候間、乍憚是又御放意可被下候、

一爰許霖雨後旱ニ而、暑気殊外強御座候得共、両三日跡より折々潤等も御座候而、余程朝夕之肌持も宜敷罷成、最早暮し安く罷成申候、諸所洪水ニ而相応之痛損も不少、其上田地虫気強く甚心配いたし居候処、右も漸く相除、当分ニ而ハ相応之年柄ニも罷成候様ニ而、別而仕合ニ御座候、其外諸作共随分宜敷御座候由ニ而、仕合之至ニ御座候、

一諸郷私領出兵之人数も、都之城一隊之外ハ惣而新兵、俄練習ニ而如何と存居候処、一統此度ハ十分之はまりニ而、先可成ニ出来候而仕合ニ御座候、一昨日御城下六番隊并ニ新兵二隊、番兵二隊、諸郷・私領一大隊之調練有之、

上様ニも御出被成、随分出来上り申候、就而ハ当月九日諸郷私領共一統出揃ニ相成、毎日精々之調練ニ御座候処、最早随分出来候付、御地之御模様延曳ニも罷成候ハヽ、一応帰郷被仰付候而ハ如何御座候半哉、其郷々ニ而弥練習いたし候ハヽ、急速出兵被仰付候而も、船仕舞かた〳〵いたし候内ニハ、随分間ニ合候半欤とも存申候、何分ニも御模様次第之事ニ而、爰許ニ而ハ、難決御座候間、兼而御含置被下度御願申上候、

一海軍方之儀ハ兼而申上置候通、何も行届兼候儀而已ニ御座候処、此節徳間彦二罷下り精々致尽力、兵隊も振興申事ニ御座候、既昨日於調練空発調練致見分候処、撰残候人数ニハ御座候得共、陸軍方調練よりハ能く相調居申候、

一先便申上置候通、此節仏人モンフラン参着ニ付、海陸士官召列参候付、また〳〵心痛之事ニ御座候、陸軍之儀ハ仏式とハ申事御座候得共、去年英ミニストル被召呼、是迄英国江ハ無拠訳合も有之、其上惣而英人等より伝習等もいたし候末之事ニ而、仏式ニ被召替候義ハ下の人情も有之、尤英式と申処ニ御治定ニも相成居候得は、人心疑惑も不少、英国江対し少しく信義も不立、去とて適々遠海を遥々参候ものを追帰しも出来間敷、自岩下(方平)氏所存も有之筈とハ存居候得共、どふ差向ケ而

も難き一条ニ御座候、尤海軍と申、是は軍艦も無之、如何御所置相成可然哉、何分差向ヶ陸軍之儀ハ、甚難事ニ而未評決も不致候得共、英国江対し無拠訳筋、且是迄之形行を以相断候方可然哉とも存申候、いつれも右之内存と被相伺申候、しかし岩下家帰朝候迄、談合ハ自可致事候得共、其御地御内存之処も為御知置被下度、御願申上置候、実ニ一難事と存申候、蓑田（新平）・渋谷（彦助）より三十日後れ候賦ニ候ハヽ、両士支那江八日計余計ニ滞留隙取候由御座候得は、前之浜直乗ニ候ハヽ、来月十五日前後ニも候半欤、甚期限も近寄心配此事ニ御座候、差当り能き旅宿も無之、重留（富）浜屋敷江住居候賦ニ御座候、若右ニ而間配等不宜候ハヽ、種子屋敷仮屋も借入置申候間、当座之処ハ可相済候得共、若長滞留とも申儀ニ相成候得は、何方欤見立不申候而ハ難相済、是以如何いたし可然哉と相考申候、勿論英式と相成候上之事ニ候得は、是迄度々相変て漸く治定之様成ものニ候処、俄ニ振変とて大ニ人気も不宜哉ニ相承申候、かた〳〵御振考被下候上、御評義之趣も為御知被下度御願申上候、

一此度仏大小砲注文之代金御払前之処、甚六ヶ敷不得止事、伊地知壮（壮之丞、貞馨）長崎迄差越候後ハ、未為何模様も不相分、如何と心痛之事ニ御座候、何卒相調候得は、無此上大慶ニ御座候、就而ハ先便も申上置候通、当分御上京中とても大坂表是式之御繰合ハ、先度五万両之株も申越候上、相調丈ニハ無之候得共、精々御吟味之処ハ御願申上置候、長崎表相調候而も、外国江の引合ニ御座候得は、跡補ひ之道ハ早速より手を付不申候而ハ、後難差見得候付、上坂いたし、是非〳〵道ハ少々成共付置候様有之度申含置候付、自罷上ル筈御座候付、宜敷御含置被下度御願申上候、

一此節人吉より一門相良美作為御使者参、此内屋敷地御借渡被成候御礼として、其上御部屋住武之進様御遊学とて御当地江被差越度、遮而御願候付、御願之通御相応候付、此段以御都合御聴ニ御達し置被下度御願申上

候、

一此内堀直太郎江戸より召列罷下り候米良造酒倅益三と申者、此節右之美作召列罷帰候而、国元におゐて所置相付、再遊為致度承候間、其意ニ応し召列罷帰候賦ニ御座候間、左様御聞置可被下候、尤早速宛行共被成下被差出候様可致との事ニ御座候、何も掛念之訳更ニ無御座、其身之為ニも決而宜敷、却而仕合之訳と相察申候、親造酒ニも当分ハ品能被召仕候由ニ御座候、

一奥平壱岐儀ハ如何罷成可申哉、爰元ニ而承候処、散々之模様ニ被相聞申候、先日江戸大廻り船より荷物等到着仕候之由、堀直太郎より申出、如何御所置可被成哉之旨承候付、貴公御地ニ而御試之上、御差下候様致承知居候付、堀よりい細ハ伺越候様申付越候付、決而申上越候半と存付、宜敷御含取何分被仰渡度、承及候処ニ而ハ格別御用ニも御立間敷哉、其上堀方江申越候書状之趣共、一円難心得被差下候而も苦情ケ間敷者と相考申候間、何方江成共其侭差置候而ハ如何御座候半、何分ニも懸而之事故、何も難申上御座候付、可然御計有之度奉存候、

一安田轍蔵計ニ而大坂表迄参候、金物師江戸之卯之吉と申者、有川矢九郎問合を以、江戸御留守居方江問越、尚又探索いたし候様被仰付儀、当分御屋敷御構ニ而、少も御用立模様ニ無之段、田原与兵衛罷下り候上申出候由、三拾両位も被成下、御暇被下候而ハ如何候半と承候得共、何分ニも其御地ニ而被召仕候者ニ御座候間、一先御問合申上候上、形行も可有之旨申置候間、格別無詮事候ハヽ、申出通御取計相成候可然哉、御同意御座候ハヽ、御地より宜敷御取計被下度御願申上候、

一遊学諸生之儀、追々罷帰り、当分取調中ニ御座候、被仰越候面々も有之、実以因循相究候様ニ御座候得共、何分ニも麁忽之計いたし候而ハ、跡之処如何とも難致、看々被差出候賦之者も先見合置候事ニ御座候、大概ハ位も見不申候而ハ不相済、毎々被責大ニ心配いたし候へ共、能々吟味を尽し不申候而ハ難相済訳故、適々被

仰越候者共も不平も可有之候得共、先急き之様成訳ニ而、彼是御察可被下候、榊・前田還祝之願も有之、格別入費ニも不及筋相見得候得共、以前約束相成候面々も有之候得は、此両人御差免候而ハ相済間敷、当時ハ纔之事之様ニハ御座候得共、不容易御金繰ニも成立候へハ、可成可省ハ相省き不申候而ハ、小より終ニ大ニ至り可申ハ案中ニ御座候、尤当人共江も申聞候ハ、只一面会之者も斯迄親切ニ尽し候義ハ無覚束、出祝之上ハ政府之引合と可相成ハ案中之事候間、不容易訳ニハ有之間敷哉之旨も申聞候処、先夫ハ止候様ニ御座候、いつれも只一図ニ思込候得は甚難解得位ニ御座候、御推計可被下候、魯才四方之責ヲ請、甚心痛御推計被下度、此当年の暑気ニハ大ニ悩ミ、気脱生命を保候而已ニ而、頓と分別も無御座候、御一笑可被下候、尚可申上事も有之筈候得は、後便ニ申上残候、先ハ毎も乱毫不敬を不顧色々申上度、時下折角御厭、為国家常々御保護専要奉祈候、恐々敬白、

七月廿九日　　桂右衛門（久武）

小松帯刀様
参人々御中

文書原寸　縦一六・五糎　横三四一糎

一六七九　本岡藩山県小太郎ヨリ久光公ヘノ願書

長州侯ノ入洛周旋ノ件

（包紙ウワ書）「御内覧」

（朱）『丁卯七月』　」

（別紙）「本岡藩　山県小太郎（通政）」

当今急務之事件ハ、即長防并兵庫開鎖之御所置ニ候処、去月下旬殿下始新将其他御参代被為遊、恐多くも、幼帝を脅制奉り、兵庫開港弥勅許ニ御取極相成候条、下々迄追々詳知仕候処、先々事之先後ヲ以推究仕候得は、第一長防御所置こそ先務と奉存候処、左ハ無之、却而兵庫理不尽ニ御取開相成候始末、計るニ遠略可有御座次第ハ、近年逆政甚敷、人心戦慄、物議天を衝ニ至ル、依而幕意

甚不平之場合も可有御座候得共、少々差支之意味も候得は、其勢十分主張難相成ニ付、既ニ昨年来別而弗夷(仏)ニ深取結、緩急応援之手配、其を不待明白ニ御座候、然トモ当時大小侯伯之御中ニ而忌嫌甚敷ハ、唯　御尊藩而已ニ候得共、百方施ニ術なく殆苦心之模様洞察被致候、旁以今般開港取急、不日摂海へ異船呼回し、彼地へ根拠を構、西国・九州・海陸之咽喉を断切、　朝勤之通路閉塞之上、心安く　帝京を挾、四方へ令して天下を恣ニ制御可致之籌策、必疑(有脱カ)御座間敷候、扨先達而中より　御尊藩外三侯夫々御尽力被為遊候得共、乍恐于今御計取不被為行儀ハ全助幕之内奸、　天日を障蔽いたし、奸計死力を窮候故、大義通徹セす、　朝憲被為立かたく候様窃奉相窺候、迚も内々より御尽力被為遊候共、御成功遅滞仕可申哉ニ奉存候、乍去今日軽挙ハ猶更難成情状、右ニ付愚慮仕候処、差当り急務之第一策ハ、則追々之御尽力ヲ以、長防事件寛大之御沙汰ヲ以、三条制札も取除候事、奇(希)代之機会、此図ニ応し彼之侯速ニ御登京御尽力被為遊度、尤其術計ニ至而は、筆端ニ而は弁解仕かたく、御高断可被為下候、且兵庫　勅許之儀、其事情最早四方へ相達候ハ、、豪傑勤王之士ハ勿論、無知之凡民ニ至迄痛憤切歯、死力ヲ以邦家へ尽し可奉之秋、殊に芸州侯(浅野長訓)も御出京、彼是以大機会と奉存候間、何卒長州侯(毛利敬親)御登京之術施行被為在度奉存候、何分尋常之道ヲ以、順序ニ御尽力被為在候とも彼還而非常之政ヲ以、反詐窮かたき奸計ニ出、忠良を圧倒セんとの勢判然之事ニ御座候間、何卒非常之御大策ヲ以、奸凶掃除を遂、速ニ御成功被為在候様怖伏而奉懇願候、誠ニ蛇足之労を不顧、頑愚為国家と相心得奉冒厳威候儀、御仁恕偏奉仰候、恐々昧死敬白、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第四五七号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦　二七糎　横五〇・二糎　包紙原寸　縦　一五糎　横二四・五糎

一六〇　大久保一蔵ヨリ田尻務蓑田伝兵衛ヘ

薩長ノ出兵、軍艦購入ノ件

尚々、桂大夫（久武）江乍憚本文之形行被仰上被下、是非御決断被成下候様、御伝被下候様呉々奉願上候、

中将様（島津久光）御乗船后、益御機嫌克被為遊御座、

御容体何も　御障り不被為在候御事と奉恐察御同慶奉存上候、志戸か浦江ハ　御碇泊被為在候ハヽ、御伺奉申上含ニ而、見合航海仕候へとも、御通抜ヶ相成候故、兼而御談申上置候通中関を指やり抜申候、尚精々差急候様乗頭へも分而達置候間、少々相後れ可申候へとも、佐賀関御碇泊中ニハ、是非やり付可申と奉存候、

一於浪花御評議相成候条々、尚亦於船中黒田抔談合仕候処、小生長江差入談判之上、十分同意、京地切迫之事情汲受、此上ハ片時早目揚旗候処、急務ニ就、彼方速ニ人数出張ニ及候半と之都合ニ候ハヽ、御国人数待合之事ハ、強而不申入方可然、如何んとなれハ御解纜后、又模様一変いたし候も難図、一日を延し候得ハ、一日之害を増候時宜御座候故、片時も早目決挙ニ及候処ヲ主とする之趣意ニ御座候、乍去夫ハ先方模様次第之事ニ而、彼是当月中を限り候場合ニ可相成、左候得ハ御国人数之処も宜鋪時分ニ打合可申と被考申候、何分ニも早々御繰出被下候処肝要と被存候間、黒田・堀（直太郎）なと種々及談論候付、御聞取之上宜鋪御尽力奉頼候、三田尻江出懸ヶ候上之都合旁引合も可有之、若機ニ後れ候節ハ、与程之難事と被存、成程惣差引之任ハ御談ニも相成居事候へとも、大山格（巌）之助一応博多迄報知之上直様入長、三田尻江差越、御国人数待受候都合ニ談置申候、左候得ハ仮令長兵出張跡ニもせよ、都合よろしく候半ト相考申候、

一船中ニ而、尚亦伊東俊（伊藤博文）輔咄承申候処、崎陽江段々軍艦売船参居候由、一艘ハ英ニ而製造いたし候新艘ニ而二十万両余、一艘ハアメリカ之古船ニ而候由、直段は八

万両位と申事ニ御座候、格別痛損も無御座候而、大砲も相備数度戦争ニ相用程格好、日本ニハ似合候と之事ニ御座候、右新製ハ余大ニ過キ、固より直段格外ニ而、迚もいたし様も有御座ましく候へ共、古船之方八万両位ニ而候得ハ、是非御取入相成、

太守様御出馬之御用途ニ相備候様有御座度奉祈念候、

是迄之世体とハ格別致相違候事ニ而、爾后蒸艦ニ而は君侯をして危地を踏しめ奉り候事ハ、万々不奉堪恐懼次第、乍去

皇国之御為、中々

御傍観不被為出来御時宜合ニ就而は、是非臣子之任を以尽シ不申候而ハ不相叶次第と奉存候、通例之論ヲ以而ハ、当分之御国柄ニ而ハ迚もいたし様無御座、長大息するより外無御座事候得共、最早

皇国之御安危、御国家之御存亡ニ可相拘御大事之今日ニ至り候而は、今一層臣子死力を尽シ候地ニいたり度ものニ御座候、御危急々々とハ乍申、一同切刃鉗ニ而も迦スト申位ニハ未かと被存申候間、今般無御拠御次第柄ニ而、為

皇国　御国家不被為顧

御尽力被為　在候付而は、段々是迄

王事ニ御尽シ、且御軍務ニ付莫大之御費用ニ而、別而御疲弊之折柄ニ付、志有之ものハ金納仕候様、

御達様も可被為在ものニ無御座候由、未御宝蔵ハ二三万両ハ御在合可被為在、且ハ平運丸も三四万両位ハ随分いたし可申候間、当座如何様共活計ヲ以、当年中之限ヲ以、内金ヲ以御買入相成候様御談判可相調ものニ被相考申候、就而は両君京師之情実切迫之模様、御同苦仕候事ニ而、軍艦之事ハ追々御嘶合も申上候末之儀御座候間、此一条ハ御引受御尽力、崎陽之方へも、両君之内御一人御出張、是非御やり付被下

君公御出馬之節ハ、軍艦より堂々　御出張被為在候様有御座度奉祈候、実ニ斯る時節、右売船在合候事ハ偶然ならさる事ニ而、天幸とも可申、しかるニ其尽力不

調して、看々堅牢ならさる商売船ヲ以、危地を踏しめ奉り候儀、臣子之重罪ト可申候、仮令ハ父母之病ニ妙薬ありといへとも、高金なるを以、服せしむる事を得ざるか如し、豈遺憾ならざらんヤ、況今良器械彼ニ被得候ヘハ制を受、我ニ得候ヘハ我彼を制ス、得失ハ皇国安危存亡之所係、又大也トいふべし、何分御熟慮之上、可然御周旋之ほと奉合掌候、

右談合之趣且愚慮之次第御示談為可申上、如此種々不敬之失言如何ト不堪畏縮候得共、実ニ皇国之御大事且　御国家之御危急、臣子斃而可止之時ニ当リ、趣意包臓可致筋ニあらす、自ら両君飽迄御含も被為在候儀とハ奉存候ヘ共、尚奉願度如此御座候、御叱留可被下候、其余黒田・堀より委曲可申上候付御聞取可被下候、尚長之形行ハ申上候様ニ御座候、

頓首敬白、

九月十六日　大久保一蔵

船中認

田　尻　務様

蓑田伝兵衛様

御連名御免

文書原寸　縦一八・二糎　横三五八糎

一六一　山内容堂ヨリ朝廷ヘノ建言

政令一途朝廷ヨリ出ツルノ件

（前欠）

セン、上

朝廷、下

幕府・諸侯ニ於テモ、又皆此大基本ヲ建ルヲ以、注意専行無間断、則今日ノ急務時勢ノ相当ト奉存候、

当夏四藩

御召ニ依テ上京仕、一二献言ノ次第モ有之候ヘ共、容堂儀ハ病症ヲ□（虫損）給リ、帰国ノ上猶又篤ト熟考仕候ニ、実ニ以不容易御時態ニテ、興復ノ御機会モ、今日ヲ捨テ他ニ求ムヘキ時有之間敷ト奉存候、因テハ

是等ノ儀早速再上仕、乍不及深ク
建言仕度存念ニ御座候処、今以病症難渋仕候ニ付、不
得止臣等共ヲ以、愚見ノ趣乍恐言上為仕候、何分
皇国ノ御基本被為建候筋ニ於テ、万一ヲ奉補佐度志願
ニ御座候、
一天下ノ大政ヲ議定スルノ全権ハ
朝廷ニアリ、則我
皇国ノ制度・法則・一切ノ万機、必京師ノ議政所ヨリ
出ルヲ要ス（議政所ヲ建立スルハ、宜ク、諸藩ヨリ其費ヲ貢献スヘシ）
一議政所上下ヲ分チ、議事官ハ上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ
至ル迄、正義純粋ノ士ヲ撰挙シ、諸侯モ自ラ其職掌ニ
ヨリ上院ノ任ニ充ツヘシ、
一京摂其外都会ノ地ヲ撰ミ、大小ノ学校ヲ設ケ、長幼ノ
序ヲ分チ
皇国ノ学術及ヒ外国ノ学業モ其人々ノ旨趣・才能ニ従
フテ教導スヘシ、
一各港外国ノ条約ハ、兵庫港ニ於テ新タニ
朝廷ノ大臣・諸藩ト衆合シ、道理明白ニ新条約ヲ結ヒ、
誠実ノ商法ヲ行ヒ、信ヲ外国ニ失ハサルヲ以テ要トス、
一海陸ノ軍備ハ枝葉ト雖モ、今日ニ取リテハ一大至要ト
ス、則海陸軍局ヲ京摂ノ間ニ造築シ、
朝廷ヲ守護スルノ親兵ヲ蓄養シ、此両局中ニ永住シテ、
練兵ノ制ヲ厳ニシ、世界ニ比類ナキ兵隊トナランヲ要
ス（練兵教師ハ英仏ノ問ヨリ、純粋ノ者ヲ撰用シテ其任ニ充ツヘシ）
一中古以来
公武二ツニ分レ、武門ノ威権相続キ、洋船来航以後、
天下紛紜、国家多難、政権稍動ク、是自然ノ勢ナリ、
今日ニ至リ古来ノ旧弊ヲ改新シ枝葉ニ馳セス、小条理
ニ止マラス、大根基ヲ建ツルヲ以テ主トセン、
一朝廷ノ制度法則ト雖モ、古昔ノ律例アリテ、当今ノ時
勢ニ参合シ或ハ当然ナラサル者多カラン、宜ク其弊風
ヲ除キ、自然一新改革シテ、地球上ニ独立スルノ国本
ヲ建ン、
一皇国興復ノ議事ニ関係スル士大夫ハ、私心ヲ去リ公平

ニ基、術策ヲ設ケス、正直ヲ旨トシ、既往ノ是非曲直ヲ問ハス、一新更始、今後ノ事ヲ視ルヲ要ス、議論多ク成功少キノ通弊ヲ踏ムヘカラス、

右ニ議定セルケ条、恐ラクハ天下ノ大体ニ於テ当今ノ急務、内外各般ノ至要、是ヲ捨テ他ニ求ムヘキ良法モ有之間敷ト奉存候、然則此議ヲ以テ、

皇国ノ興復ヲ謀リ候者、其事ノ成敗利鈍ヲ不顧、唯一心協力、万世ニ亘テ貫徹致シ候様有之度、若或ハ従来ノ事件ヲ執リ、弁難抗論

朝幕諸侯互ニ相争ノ姿ト成ルハ、尤然ルヘカラストセン、

是則容堂ノ志願ニ御座候、就テハ乍恐是等建言ノ次第、空敷

御聴捨ニ相成候テハ、天下ノ為残懐不鮮、猶又此上寛仁大度ノ

御趣意ヲ以テ愚昧ノ臣等共ト雖モ　御親問被仰付度奉懇願候、

（山内豊範）松平土佐守内
寺村左膳（道成）
後藤象次郎（象二郎）
福岡藤次（孝弟）

慶応三丁卯九月

文書原寸　縦一八糎　横二四六糎

一六二　小笠原大膳大夫ヨリ茂久公ヘ使者差遣口上書

（包紙ウワ書）「口上書」

（島津茂久）修理大夫様江

（小笠原忠幹）大膳大夫より

秋暑之節愈御安泰被成御座珍重之御事御座候、然は当時勢ニ付使者差立候、委細口上申含置候間、御承知可被下候、

（別紙）「小笠原大膳大夫使者　佐々清右衛門」

（本文書ハ慶応三年トアルモ文久二・三年ノ誤リカ）

文書原寸　縦一九・五糎　横　二八糎　包紙原寸　縦　二七糎　横三九・二糎

一六三　松平春嶽公ヨリ島津久光公ヘ
久光公賜暇帰国の件

（包紙ウワ書）「島津大隅守様　松平大蔵大輔
玉几下
（朱「封」）□　十月三日夜
第十字封」

（封紙ウワ書）「島津大隅守様　平安
玉几下　松平大蔵大輔
（朱「封」）□　」

一翰啓上仕候、寒冷増加之処、先以
新帝益御万安被為渡奉恐悦候、随而老盟兄愈御清安被成
御起居、就中今般は御病気ニ付、御願之通リ、従
朝廷御暇被
仰出、其上
御狩衣一領・御脇息一御頂戴被為在候由承之奉欣賀候、
乍去御病気ハ如何被為在候哉、甚以関情罷在、尚御気分
御宜節、御一筆御垂教奉仰候、先は右御欽御見舞旁如此
ニ御座候、書外万縷之御楮は期重鴻候、　恐惶謹言、
十月三日
尚々、為天下御自愛奉懇念候、帯刀始へも宜御致意
奉憚候、已上、

文書原寸　縦一六・八糎　横　一三〇糎　包紙原寸　縦二七・五糎　横　三九糎

○一六四　西郷吉之助ヨリ大久保ヘ？
忠義公出兵上京ノ件

一六五　討幕ノ密勅
会津桑名誅伐ノ御沙汰書　二通

（包紙ウワ書）「幕府誅戮之　詔書　」

一六八五ノ一
大奉書竪
写

左近衛権中将源久光
左近衛権少将源茂久

詔　源慶喜、藉累世之威、恃闔族之強、妄賊害忠良、数棄絶王命、遂矯
先帝之詔而不懼、擠万民於溝壑而不顧、罪悪所至
神州将傾覆焉、　朕今為民（之脱カ）父母、是賊而不討、何以上謝
先帝之霊、下報万民之深讐哉、此　朕之憂憤所在、諒闇
而不顧者万不可已也、汝宜体　朕之心、殄戮賊臣慶喜、
以速　奏回天之偉勲、而措生霊于山嶽之安、此　朕之願、
無敢或懈、

奉

慶応三年十月十三日

正二位藤原（中山）忠能
正二位藤原（正親町三条）実愛
権中納言藤原（中御門）経之

右上包

詔書　左近衛権中将源久光
左近衛権少将源茂久　江

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六九三号文書ト同文ナリ）

一六八五ノ二
大奉書横折

会津宰相（松平容保）
桑名中将（松平定敬）

右二人久滞在　輦下助幕賊之暴其罪不軽候、依之速可加誅戮旨被
仰下候事、

十月十四日

忠能
実愛
経之

薩摩中将殿
同　少将殿

右ノ上包

中山前大納言　忠能卿
正親町三条前大納言実愛卿
中御門中納言　経之卿ヨリ

御沙汰書

薩摩中将殿
同　少将殿　江

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六九二号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一七・二糎　横　一三〇糎　包紙原寸　縦二七・五糎　横　三九糎

○一六六六　西郷吉之助ヨリ大久保へ
討幕密勅ノ件？

一六六七　討幕之密勅
御沙汰書

一六八七ノ一
（包紙ウワ書）「詔書　緘」

左近衛権中将源久光
左近衛権少将源茂久　江

左近衛権中将源久光
左近衛権少将源茂久

詔　源慶喜、藉累世之威、恃闔族之強、妄賊害忠良、数棄絶
王命、遂矯
先帝之詔而不懼、擠万民於溝壑而不顧、罪悪所至、
神州将傾覆焉、　朕今為民之父母、是賊而不討、何以上
謝
先帝之霊、下報万民之深讎哉、此　朕之憂憤所在、諒闇
而不顧者、万不可已也、汝宜体　朕之心、殄戮賊臣慶喜、
以速　奏回天之偉勲、而措生霊于山嶽之安、此　朕之願、
無敢或懈、

慶応三年十月十三日　　奉

正二位藤原忠能
正二位藤原実愛
権中納言藤原経之

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六九三号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦　三六糎　横四八・五糎　包紙原寸　縦四八・七糎　横七・五糎

一六八七ノ二

会津宰相
桑名中将

右二人久滞在　輦下助幕賊之暴其罪不軽候、依之速可加誅戮旨被
仰下候事、

十月十四日　　忠能
実愛
経之

薩摩中将殿

同　少将殿

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第六九二号文書ト同文ナリ）

文書原寸（折紙）縦二〇・三糎　横五六・二糎

一六八　慶喜ノ将軍職辞任ノ奏上書其他

一六八八ノ一

臣慶喜謹而
皇国時運之沿革を考候に、昔　王綱紐を解て相家権を執り、保平之乱政権武門ニ移てより、祖宗ニ至リ、更ニ寵眷を蒙リ、二百余年子孫相受、臣其職を奉すと雖モ、政刑当を失ふこと不少、今日之形勢ニ至リ候も畢竟薄徳之所致、不堪慙懼候、況乎当今外国之交際日に盛ナルより、愈
朝権一途ニ出不申候而は、綱紀難立候間、従来之旧習を改め、権を
朝廷に奉帰、広く天下之公議を尽シ、

聖断を仰き、同心協力、共ニ
皇国を保護仕候得は、必海外万国に可並立候、臣慶喜国家ニ所尽不過之と奉存候、乍去尚見込之儀共有之候得は、可申聞旨諸侯江相達置候、依之此段謹而奏聞仕候、以上、

十月十四日　　慶喜

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第五三八号文書ト同文ナリ）

一六八八ノ二

祖宗以来御委任厚御依頼被為　在候得とも、方今宇内之形勢を考察し、建白之旨趣尤ニ被
思召候間、被
聞食候、尚天下と共ニ同心尽力を致シ
皇国を維持し可奉安
宸襟　御沙汰候事、
右之通勅許相成候事、
大事件外夷一条ニ尽衆議、其外諸大名伺　被
仰出等は
朝廷於両役取扱、自余之義は、召之諸侯上京之上御決シ可有之、夫迄之処、徳川支配地市中取締等は先是迄之通ニ而、追而可及
御沙汰候事、
右十月十五日将軍参内之節御渡相成候事、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第四九三・五一七号文書ノ一部ト同文ナリ）

別紙之通、被
仰出候付而は、被為在
御用候間、早々上京可有之之旨
御沙汰候事、
但十万石以上

十月

右十月十五日深更飛鳥井様（雅典）より御留守居へ御渡相成候事、

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第四九三・

五二一号文書ノ一部ト同文ナリ）

文書原寸　縦一六・七糎　横一〇三・五糎

一六九　大久保一蔵ヨリ中山中左衛門等二人？ヘ

茂久公出軍ノ件

別啓

太守公断然御出馬御決定、下々一同奉畏伏候様　御確定之処肝要之事ニ而、御内評有之通之事ニ御座候間、尚御差含御尽力奉祈上候、是非明白之　御書取ニ而も被相下度奉恐存（ママ）候、其辺御談合可被下候、右　御治定ニ付而ハ、甚黒田なと込入候と申ハ、今般

二丸御出立ニ付而ハ、皆々御揃ニ而諸事省略之事も取調申上候通よりも返而断然御省キ相成候間、別而致安ク御座候得共、乍恐此節之処、左様ニ参兼候欤も難図と心配之様子ニ被察申候、しかし是ハ今度

中将公御出立通よりハ、尚軍事一篇之御出立ニ無之而ハ不相済御事ニ御座候間、其辺ハ万々懸念も有之ましくトハ申置候へとも、宜鋪御含居御尽力可被下候、今度　重（島津忠義）富公子さへ返而　御道具等多く有之たるヤニ被聞申候、甚つまらぬ次第、畢竟御付ニ宜鋪無之事ニ御座候、大ニ御失徳相成事ニ御座候、乍余事為御含申上置候、已上、

（九月）十六日　　大久保

（田尻務・養田伝兵衛）両君

（本文書ハ一六八〇号文書ノ別啓ナリ）

文書原寸　縦一八・三糎　横六五・五糎

一六九〇　徳川慶喜将軍職辞退ノ奏上

臣慶喜昨秋相続仕候節、将軍職之儀固ク御辞退申上、其後厚蒙

御沙汰候付、御請仕奉職罷在候処、今般

奏聞仕候次第も有之候間、将軍職御辞退奉申上度、此段奏聞仕候、以上、

十月廿四日

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第五〇四・

六九四号文書ノ一部ト同文ナリ）

文書原寸　縦一七・七糎　横四三糎

一六九　市来六左衛門ヨリ長崎伊地知壮之丞ヘ

軍艦及平運丸買入ノ件

於其表御軍艦御取入一条之儀、此内より御手相付居候処、此節大坂ニ而別段御産物料金之内より四万両、野村宗七江才領被仰付被差廻候由、右金子外ニ御船平運丸御宛行御払建代金等を以、早々御軍船御取入向之儀共、細々帯刀殿（小松）より被仰達越置候由、右次第御両殿様江被相伺候処、右平運丸之儀、軍艦代ニ被振向、弥御取入被仰付候段、被仰出候由ニ而、其段は委細刑部殿（新納中三）・佐次右衛門殿（岩下方平）江御問合可被成候ニ付、御方へも拙者より右之段達越候様、帯刀殿より致承知候間、

御上京御乗船間ニ逢候様精々都合向取計、廻船被成候様可取計儀致承知候間、此段申越候、以上、

卯十月廿八日　　市来六左衛門

伊地知壮之丞殿

長崎御付人

御役所

文書原寸　縦一四・九糎　横一三三糎

一六九　高崎五六ヨリ市来正左衛門等三人ヘ

将軍政権奉還ノ件

（端裏書）「高崎五六書状」

尚々、本文之説浮説ニ而は無御座、慥成人より書翰参申候、

唯今七ツ半時分当所江着候処、小松家・永吉家去ル廿六日御着

京師表ノ事情　将軍已を捨　王権を朝廷ニ奉帰、有名ノ諸侯と同心合力、国家を興隆せんとす、依而土佐・宇和島・我藩等其外三五侯御召ニ相成り、

太守公は本月十日過之御仕舞、中旬方御発途との趣ニ御座候、就而は多分巨細ハ有川氏より伝宣有之候半と、太

略奉得其意候、何分右之趣ニ候得は、鳥渡御帰り之外有御座間敷と奉存候事ニ御座候、漸々天下之大幸雀躍とハ此事ニ御座候、いつれ御帰藩之上彼是可申尽候、匆々不取敢如此ニ御座候、乱筆御海涵可被下候、恐々不宣、

廿九日　伏豚拝

寺師次右衛門様

相良八兵衛様

市来正右衛門様（四郎）

侍史

文書原寸　縦一六・五糎　横六七糎

一六九三　修史局編纂「明治史要」巻一

明治史要巻一　修史局編纂

丁卯　慶応三年

十月

十四日、（頭注ハ行間ニ記ス、以下同ジ）「大将軍慶喜政権ヲ奉還ス」征夷大将軍内大臣徳川慶喜、上表シテ政権ヲ奉還セント請フ、

十五日、徳川慶喜ノ請ヲ允ス、是ニ於テ、将ニ大ニ国是ヲ議定セントス、乃チ十万石以上ノ諸侯ヲ召集シ、特ニ松平慶永（大蔵大輔、春嶽ト号ス）○越前藩主茂昭ノ父、・鍋島斉正（前肥後守、閑叟ト号ス）○肥前藩主茂実ノ父、・山内豊信（前土佐守、容堂ト号ス）○土佐藩主豊範ノ父、・伊達宗城（伊予守）○宇和島藩主宗徳ノ父、・島津久光（大隅守）○薩摩藩主茂久ノ生父ヲ召ス、「諸侯ヲ召集ス」

二十一日、十万石以下ノ諸侯ヲ召ス、

二十二日、徳川慶喜、京都警衛、度支等八条ノ処分ヲ稟請ス、「慶喜八事ヲ稟請ス」一日、京都三箇月詰警衛、二日、度支及ヒ供御地ノ管轄、三日、大宮御所造営国役金、四日、駅逓法、五日、供御地及ヒ宮堂上等采地人民ノ訟獄、六日、刑法、七日、所司代以下ノ職務、八日、紙幣発行、是日、批シテ姑ク其旧ニ仍ラシム、

二十四日、徳川慶喜上表シテ、征夷大将軍ヲ辞ス○甘露寺勝長（左中弁）ノ義子万長（高丸）ヲ堂上ニ班シ、松崎氏ヲ称セシム（家禄三十石、俸三人口ヲ給ス）「慶喜将軍ヲ辞ス」

二十五日、諸侯ニ申命シ、十一月ヲ期シテ朝集セシム○初メ朝鮮、仏蘭西ト釁隙ヲ開ク、幕府、仏蘭西公使ニ説キ、将ニ使節（平山敬忠、古賀増）ヲ朝鮮ニ発遣シテ、両国ノ講和ヲ謀ラントス、是日、更ニ朝旨ヲ得テ之ヲ行ヒ、且

ツ宗義達対馬守○ニ命シ、使節ノ事ヲ幹セシメント請フ○是ヨリ先、兵庫開港ノ議決ス、其地官道ニ属スルヲ以テ、是日、幕府令シテ新道ヲ開キ、摂津住吉村ヨリ播磨明石ニ達ス○幕府、紙幣ヲ関東諸国ニ発行シ、己巳歳三月ヲ以テ限ト為スヲ令ス遂ニ果サス、

二十七日、徳川慶喜ノ辞表ニ批シ、姑ク其旧ニ依リ、諸侯朝会公議ノ決裁ヲ俟タシム、

二十九日、宣命使日野資宗ヲ後月輪東陵孝明天皇ニ発シ、造陵成功、及ヒ太政復古ヲ告ク、

十一月

四日、幕府使節ヲ朝鮮ニ遣ルノ請ヲ允シ、宗義達ヲシテ其事ヲ幹セシム後行ヲ果サス、

六日、幕府兵庫居留外国人游歩ノ区域ヲ定ム京師ヲ距ル十里以外、兵庫傍近十里以内、

十日、初メ薩芸長三藩謀ヲ通シ、将ニ共ニ東上シテ計画スル所アラントス、事稍漏ル、是日、幕府浅野茂長安芸守○ヲシテ、毛利敬親長門ニ伝諭シ、其支封主一人及ヒ老臣ヲ大坂ニ召スノ令本年七月ニアリヲ停メ、後命ヲ俟タシム、

十二日、国事掛近衛忠房左大臣忠熙ノ子○等、太政一途、綱紀確立ノ策問二道、及ヒ太政官八省以下再興ノ議ヲ上ル、「太政官八省再興ノ議」廷議其策問ヲ採納シ、翌日之ヲ徳川慶喜及ヒ在京諸侯ニ下ス、

十五日、紀伊藩士ノ江戸ニ在ル者、徳川氏ノ親戚譜第諸藩臣ヲ其邸ニ会シテ、徳川氏ヲ扶持センコトヲ謀ル、事聞ス、乃チ内旨ヲ幕府ニ下シテ、厳ニ之ヲ禁遏ス、

十九日、徳川慶喜策問ニ対ヘ、朝綱ノ基本ハ諸侯ノ上京ヲ待チ、公議ヲ尽シテ之ヲ立テント請フ○幕府、紙幣ヲ畿内及ヒ其旁近地方ニ発行シ、庚午歳十一月ヲ以テ限ト為スヲ令ス遂ニ果サス、又江戸開市、新潟開港ノ期限十二月七日ヲ延ヘ、戊辰三月九日ヲ以テ期ト為スヲ布告ス、

二十五日、幕府、「幕府樺太開拓ヲ許ス」東北諸藩ニ令シ、其士民ノ樺太島ヲ開拓スルヲ許ス、

二十八日、幕府、「江戸居留地ヲ定ム」江戸鉄砲洲ヲ以テ外国人居留地ト為シ居民ノ其家屋ヲ貸与スルヲ許ス、

二十九日、島津茂久（修理大夫○薩摩）・浅野茂勲（紀伊守○安芸藩主茂長ノ子）前後入京ス、長門藩ノ老臣等モ亦相踵テ其国ヲ発セントス、本月十日ノ令至ルニ会ス、其時機ヲ失ハンコトヲ恐レ、遂ニ進テ西宮ニ入ル、是日茂勲為ニ之ヲ奏陳ス、

晦日、左大臣近衛忠房、右大臣一条実良ノ請ヲ允シテ、其官ヲ罷メ、権大納言九条道孝ヲ以テ左大臣ト為シ、内大臣大炊御門家信ヲ右大臣ト為シ、権大納言広幡忠礼ヲ内大臣ト為ス、忠房・実良、国事掛故ノ如シ、

是月、幕府関東八国ニ令シ、酒醤等醸造ノ限制ヲ定ム、

十二月

二日、浅野茂勲、長門藩老臣ノ陳情書ヲ上ル、乃チ茂勲ニ令シ、老臣ヲシテ大坂ニ抵リ命ヲ俟タシム（故アリ大坂ニ抵ラス）

七日、兵庫港及ヒ大坂互市場ヲ開ク、（「兵庫港、大坂開市」）

八日、三条実美・三条西季知・東久世通禧・壬生基修・（「三条実美等ノ官位ヲ復シ入京ヲ許ス」）四条隆謌・錦小路頼徳（頼徳前ニ長門ニ客死ス）・沢宣嘉・毛利敬親・毛利元周（長門府中）・毛利元蕃（徳山）・毛利元純（清末）ノ官位ヲ復シテ入京ヲ許ス、久我建通（入道前内大臣）・岩倉具視（入道前中将○具慶ノ子）・千種有文（入道前少将）・富小路敬直（入道前中務大輔）ノ蟄居ヲ赦シ、九条尚忠（入道前関白）ト皆復飾セシメ、滋野井実在（中将）・其子公寿（侍従）・正親町公董（少将○実徳ノ子）・鷲尾隆聚（侍従）ノ差扣ヲ釈ス○是夜鷲尾隆聚密旨ヲ奉シテ潜カニ高野山ニ赴ク、

九日、特旨ヲ以テ摂政・関白・征夷大将軍以下ノ職ヲ廃シ、新ニ総裁・議定・参与ノ三職ヲ置ク、乃チ大将軍（「摂関将軍以下ヲ廃シ、総裁・議定・参与ヲ置ク」）徳川慶喜ヲ罷メ、摂政二条斉敬（前左大臣）国事掛朝彦親王（弾正尹○賀陽宮）・九条道孝（左大臣）・大炊御門家信（右大臣）・近衛忠熙（前関白左大臣）・近衛忠房・鷹司輔熙（前関白右大臣）・一条実良（前右大臣）・広幡忠礼（内大臣）・徳大寺公純（前右大臣）議奏国事掛柳原光愛（大納言）・葉室長順（大納言）・伝奏国事掛日野資宗（大納言）・飛鳥井雅典（大納言）ヲ免シテ、其朝参ヲ停メ、議奏加勢中院通富（中納言）・倉橋泰聡（治部卿）・池尻胤房（宮内卿）・錦織久隆（刑部卿）・交野時万（左京大夫）ヲ罷メ、広橋胤保（大納言）・六条有容（中納言）・野宮定功（中納言）・久世通熙（前宰相中将）ノ朝参ヲ停メ、豊岡随資（大蔵卿）・伏原宣諭（三位）・裏辻公愛（中将）ニ謹慎ヲ命シ、守護職松平容保（肥後守○会津）所司代松平定敬（越中守○桑名）ヲ免ス○熾仁親王（太宰帥○有栖

川宮ヲ以テ総裁ト為シ、入道純仁親王一品○御室宮・晃親王常陸太守○山階宮・中山忠能前大納言・正親町三条実愛前大納言・中御門経之中納言・島津茂久・徳川慶勝大納言○尾張藩主徳成ノ父・浅野茂勲・松平慶永・山内豊信ヲ議定ト為シ、大原重徳宰相・万里小路博房右大弁宰相・長谷信篤三位・岩倉具視・橋本実梁少将○実麗ノ子ヲ参与ト為ス、是日、純仁親王ヲシテ復飾セシム改テ二品ニ叙ス、十六日ニ至リ嘉彰ト復名、仁和寺宮ト改称ス○長門藩ノ支封主及ヒ老臣ノ西宮ニ在ル者ヲ召ス、

十日、太政復古ヲ宮・堂上ニ告諭ス○松平慶永二条城ニ抵リ、罷職ノ命ヲ徳川慶喜ニ伝ヘ、且ツ内旨ヲ授ケ、内大臣ヲ辞シ、封土ヲ納レシム、慶喜命ヲ奉シ、辞官納地ハ物情鎮定ノ後ヲ待タント請フ○長門藩ノ老臣毛利親信内匠兵ヲ率キテ相国寺薩摩藩陣営ニ入ル、

十二日、参与ヲシテ武家伝奏ノ事務ヲ掌ラシメ、一乗院里坊ヲ以テ衛門ト為ス○岩下方平佐次右衛門・西郷隆盛吉之助・大久保利通一蔵○並ニ薩摩藩士・丹羽賢淳太郎・田中輔国之輔○並ニ尾張藩士・辻維嶽将曹・桜井元憲与四郎・久保田秀雄平司○並ニ安芸藩士・中根師質雪江・酒井忠温十之丞・毛受洪鹿之助○並ニ越前藩士・後藤元燁象次郎・神山君風左太衛・福岡孝弟藤次○並ニ土佐藩士ヲ以テ参与ト為ス○是夜徳川慶喜二条城ヲ去テ大坂ニ赴ク、松平容保・松平定敬・板倉勝静伊賀守、旧幕府老中○備中松山等之ニ従フ、「慶喜大坂ニ赴ク」

十三日、篠山・膳所・亀山丹波三藩ニ京都市中取締ヲ命ス、

十四日、太政復古ヲ列藩ニ布告シ、且ツ其賢才ヲ徴ス○「列藩賢才ヲ徴スー」戸田忠至大和守○宇都宮支封藩名未タ定マラス及ヒ溝口貞直孤雲・津田信弘山三郎○並ニ肥後藩士ヲ以テ参与ト為ス、忠至之ヲ辞ス○平戸・大洲・津和野・園部・水口・高取六藩ニ京都市中見廻ヲ命ス、

十五日、参与ヲ分テ上下ト為シ、堂上ヲ上参与ト称シ、「参与上下ヲ分ツー」藩士ヲ下参与ト称ス○参与大原重徳ヲ罷ム○参与後藤元燁・福岡孝弟、上下議事所及ヒ諸制度ノ条議ヲ上ル、

十六日、田宮篤輝如雲張藩士○尾ヲ以テ参与ト為ス、

十八日、大ニ諸侯ヲ会シテ太政ヲ諮詢セントス、乃チ再命シテ其朝集ヲ促ス○三岡公正八郎○越前藩士ヲ以テ徴士参与ト為ス徴士ノ称ト任スル者皆徴士タルヲ以テ、後之ヲ略ス○徳川慶喜上「徴士ノ称ー」徴士ノ称此ニ始マル、凡ソ藩士ノ参与ニ

書シテ近日更革ノ事、一二ノ巨藩、幼帝ヲ挾ミ威福ヲ弄スルニ出ツルヲ抗訴シ、戸田忠至ニ因テ之ヲ岩倉具視ニ呈シ、又家門譜第諸藩ノ兵ヲ徴集ス、時ニ尾越土三藩相謀リ、慶喜ヲシテ入朝シ、辞官納地ノ事ヲ決行セシメントス、乃チ具視ニ就テ其書ヲ請下ス、

十九日、十時維恵（摂津河藩士）○柳ヲ以テ参与ト為ス、

二十日、参与長谷信篤ヲ以テ議定ト為シ、西園寺公望（中将）・正親町公董・烏丸光徳（侍従）ヲ参与ト為ス、

二十二日、勅シテ万機ヲ親裁シ、博ク公議ヲ採リ、旧幕府ノ美事良法ハ旧ニ仍テ変更セサルヲ告諭シ、直言讜議忌憚スル所勿ラシム（「万機親裁ヲ布告ス」）○荒川良知（甚作張藩士）○尾ヲ以テ参与ト為ス、

二十三日、林某（左門張藩士）○尾ヲ以テ参与ト為ス○牧野忠訓（駿河守）○長岡上書シテ再ヒ太政ヲ徳川氏ニ委セント請フ、省セス、

二十四日、徳川慶勝・松平慶永奏シテ朝旨ヲ奉シ、往テ徳川慶喜ヲ諭サント請フ、是日二人ニ命シテ旨ヲ伝ヘ官銜ハ旧例ニ拠リ、前内大臣ト称シ、政府ノ経費ハ公議ヲ経テ其制ヲ立テ、其管内ヨリ之ヲ供セシム、

二十五日、万機親裁公議博採ノ諭旨ヲ三条橋ニ掲示ス○旧幕府老中ノ江戸ニ在ル者、酒井忠篤（左衛門尉）○荘内ニ命シテ薩摩藩邸ヲ襲撃ス、（「旧幕府江戸ノ薩邸ヲ襲撃ス」）

二十七日、天皇建春門ニ御シテ薩芸長土四藩兵ノ操練ヲ覧ル○参与岩倉具視ヲ以テ議定ト為ス○三条実美（前中納言）・三条西季知（前中納言）・東久世通禧（前少将）・壬生基修（前修理権大夫）・四条隆謌（前侍従）筑前ヨリ至ル、即日実美ヲ以テ議定ト為シ、通禧ヲ参与ト為ス、

二十八日、伊達宗城ヲ以テ議定ト為ス、

二十九日、是ヨリ先、仏蘭西公使伊斯波尼亜国商船ノ横浜港ニ入ルモノハ、其国船ト同視センコトヲ旧幕府ニ請フ（其条約未済国ナルヲ以テナリ）、是日之ヲ許ス、

晦日、徳川慶勝・松平慶永ノ朝旨ヲ徳川慶喜ニ伝フルヤ、慶喜命ヲ奉シ政府ノ経費ハ全国ニ課スルニ非サレハ不可ナルヲ陳ス、是日二人慶喜ニ代テ奉命書ヲ上ル、

明治史要巻一終

修史局編纂

戊辰 明治元年（慶応四年〇九月八日改元）

正月

朔日、四方拜、節会、百官朝賀ス（恒例ヲ以テ、後之ヲ略ス）

三日、徳大寺実則（中納言〇公純ノ子）・久我通久（中納言〇建通ノ子）・壬生基修・四条隆謌及ヒ広沢真臣（兵助）・井上馨（聞多〇真臣、馨並ニ長門藩士）・小原忠寛（二兵衛〇大垣藩士）ヲ以テ参与ト為ス〇徳川慶喜既ニ命ヲ奉ス、（「徳川慶喜ノ兵北上」）適薩邸襲撃ノ報ヲ得タリ、是ニ於テ討薩ノ表ヲ草シ、瀧川具知（播磨守〇旧幕府大目付）ヲシテ之ヲ齎ラシ、会津・桑名等ノ兵ト共ニ北上セシメ、慶喜モ亦将ニ継テ発セントス、（「伏見鳥羽ノ役」）前軍伏見・鳥羽ニ至ル事聞ス、乃チ慶喜ニ命シ、大坂ニ在テ後命ヲ俟タシム、命未タ達セス、前軍益進ム、薩長二藩ノ戍兵邀ヘ撃テ大ニ之ヲ破ル（具知京ニ入ルヲ得ス、五日ニ至リ大垣藩士ニ託シ、戸田忠至ニ因テ表ヲ上ル）〇京師戒厳〇是夜、議定嘉彰親王ヲ以テ軍事総裁ヲ兼ネ、議定伊達宗城・参与東久世通禧・烏丸光徳ニ参謀ヲ兼シム（宗城故アリテ参謀ヲ辞シ、軍ニ従ハス）、参与橋本実梁・参与助役柳原前光（侍従〇光愛ノ子）ヲシテ兵ヲ大津口ニ督シ、参与西園寺公望ニ兵ヲ丹波口ニ督セシム〇徳川慶喜薩摩藩ノ罪ヲ声言シ、書ヲ大坂在留各国公使ニ贈リ、其人民ヲシテ条約ヲ確守セシメ、其軍艦兵器ヲ私売シ、及ヒ未開港場ニ至ルヲ禁ス、

四日、軍事総裁嘉彰親王ヲ拜シテ征討大将軍ト為シ（議定故ノ如シ）、錦旗節刀ヲ賜フ、大将軍出テ東寺ニ次ス〇西園寺公望ヲ以テ山陰道鎮撫総督ト為ス（参与故ノ如シ）〇是日、官軍再ヒ賊兵ヲ鳥羽・伏見ニ破ル、（「嘉彰親王征討大将軍トナル」）

五日、橋本実梁ヲ以テ東海道鎮撫総督ト為シ（参与故ノ如シ）、柳原前光之ニ副ス〇官軍賊兵ヲ追躡シテ淀城ニ抵ル、賊退テ八幡ニ拠ル、

六日、公卿ノ涅歯点眉、古制ニ非サルヲ以テ、必シモ循守セサルヲ令ス〇大将軍嘉彰親王淀城ニ入ル、官軍進テ八幡ヲ攻ム、山崎関門戍兵（津藩）之ニ応ス（別ニ勅使ヲ遣リテ之ヲ命ス）、賊兵潰走ス〇徳川慶喜大坂城ヲ尾越二藩ニ託シ、汽艦（「慶喜大坂ヨリ東走ス」）

ニ駕シテ東走ス、松平容保・松平定敬・板倉勝静等之ニ従フ、

七日、徳川慶喜ノ罪ヲ声シ、征討ノ大号令ヲ頒布シ、公卿・諸侯ヲシテ其去就ヲ決セシム○徳川慶勝・松平慶永、慶喜東帰ノ奏状ヲ上ル○禁門解厳○入道雄仁一品聖護院宮・尊秀無品○知恩院宮、十日ニ至リ華頂宮ト改称ス一親王ヲシテ復飾セシム尋テ雄仁名ヲ嘉言ニ復シ、改テ二品ニ叙シ、尊秀名ヲ博経ニ復シ、改テ三品ニ叙ス

九日、議定三条実美・岩倉具視ヲ以テ副総裁ト為シ並ニ議定故ノ如シ、嘉言親王及ヒ参与徳大寺実則ヲ以テ議定ト為シ、議定嘉彰親王ヲ以テ外国事務総裁ヲ兼ネ大将軍ノ如シ故、実美及ヒ参与東久世通禧・岩下方平・後藤元煒ニ外国事務取調掛ヲ兼シム○大将軍嘉彰親王ニ命シ、大坂城ニ次シテ諸軍ヲ指揮シ、東海道鎮撫総督橋本実梁ヲシテ桑名ヲ討セシム○岩倉具定大夫○具視ノ第二子、具綱ノ嗣トナルヲ以テ東山道鎮撫総督ト為シ、岩倉具経八千麿○具視ノ第三子之ニ副ス、高倉永祜三位ヲ北陸道鎮撫総督ト為シ、四条隆平大夫○隆謌ノ養子之ニ副ス○薩長二藩兵福山城ヲ徇下ス「薩長二藩兵福山城阿部正方ノ治所ヲ徇ヘテ之ヲ下ス○大坂城火アリ○旧幕府老中上国ノ報ヲ得テ諸藩ニ令シテ西上ノ備ヲ為シ、翌日又討薩ノ表及ヒ檄文ヲ諸藩ニ示シ、松平直克大和守○前橋・酒井忠篤ヲシテ江戸ヲ厳守セシム、「上国ノ報江戸ニ至ル」

十日、楫取素彦長門藩士ヲ以テ参与ト為ス○徳川慶喜及ヒ松平容保・松平定敬・板倉勝静・大河内正質豊前守、時ニ松平氏ヲ称ス、「慶喜ヒ下ノ官位ヲ褫ク」旧幕府老中格○大多喜・久松定昭伊予守、時ニ松平氏ヲ称ス、旧幕府老中○伊予松山・松平頼聡讃岐守○高松等二十七人永井尚志・平山敬忠・竹中重固・塚原昌義・戸川安愛・松平信敏・新見正典・設楽能棟・榎本道章・牧野成之・大久保忠恕・小栗政寧・星野成美・高力忠長・小笠原長遠・大久保忠恒・室賀正容・岡部某・大久保某・戸田某・ノ官位ヲ褫キ、容保以下六人ノ京邸ヲ没シ、酒井忠氏若狭守○小浜・戸田氏共采女正○大垣・本荘宗武弾正忠、時ニ松平氏ヲ称ス○宮津・内藤政挙備後守○延岡・稲垣長行平右衛門○鳥羽ノ入京ヲ禁ス○徳川慶喜ヲ討スルノ令ヲ、三条・荒神口ノ二橋ニ掲示シ、人民ヲシテ順逆ヲ誤ルコト勿ラシム、又旧幕府領地ヲ以テ直隷トナスノ布告書ヲ諸道ニ掲示ス○大ニ列藩ノ兵ヲ徴集ス○大将軍嘉彰親王大坂ニ抵ル、

十一日、諸侯ニ申令シ、兵ヲ率キテ入覲セシム○芸備土「再ヒ諸侯ヲ召ス」

三藩ニ命シテ松山（備中）・高松・松山（伊予）ヲ討シ、且ツ備中・備後・伊予等ノ旧幕府領地ヲ収ム、征討府モ亦薩芸長因津土六藩兵ニ令シテ、松山（伊予）・姫路・高松・大垣ヲ討ス○備前藩老臣日置忠尚（帯刀）ノ従兵英人ト神戸駅ニ争闘ス、

十二日、博経親王及ヒ細川喜廷（右京大夫○肥後藩主慶順ノ養子）ヲ以テ議定ト為シ、土倉正彦（修理介○備前藩士）ヲ参与ト為シ、議定伊達宗城ニ外国掛ヲ兼シム○徳川慶喜江戸城ニ還リ、東帰ノ情由及ヒ後日ノ形勢ニ因リ、再ヒ西上スルノ意ヲ列藩ニ告ク、

十三日、西四辻公業（大夫○公恪ノ子）ヲ以テ参与ト為ス○九条道孝ノ邸ヲ以テ太政官代ト為ス○戸田氏共ヲ東山道先鋒ト為シ、酒井忠氏ノ父忠義（右京大夫）ヲ北陸道先鋒ト為シ、並ニ功ヲ立テ自ヲ贖ハシム、尋テ忠氏ヲ忠義ニ付シテ之ヲ幽ス○征討府錦旗奉行四条隆謌ヲ以テ中国四国追討総督ト為シ、備前・阿波・宇和島・龍野四藩ニ命シテ、姫路・高松・松山（伊予）征討ノ応援ヲ為サシム、

十四日、長谷信成（美濃権介○信篤ノ子）ヲ以テ参与ト為ス○備前藩兵（「備前藩兵松山城ヲ徇ヲ下ス」）備中松山城（板倉勝静ノ治所）ヲ徇ヘテ之ヲ下ス○旧幕府長崎奉行河津祐邦（伊豆守）上国ノ変ヲ聞キ、後事ヲ肥筑二藩ニ託シテ逃ル、佐佐木高行（三四郎）・吉井正澄（源馬○並ニ土佐藩士）等諸藩士ト議シ、仮ニ其事務ヲ管理シ、状ヲ京師ニ奏ス、

十五日、天皇元服（「天皇元服」）ヲ加フ、詔シテ大赦ス○外国交際ノ事宇内公法ヲ按シテ施行スルヲ布告ス○参与外国事務取調掛東久世通禧、仏蘭西全権公使「レヲンロッシュ」英吉利特派全権公使兼総領事「スル・ハルリー・エスハークス」（「太政復古ノ書ヲ各国公使ニ付ス」）伊太利特派全権公使「コント・ド・ヲ・トゥール」孛漏生代理公使「エム・フォン・ブランド」荷蘭代理公使兼総領事「ド・テ・クラフ・ファン・ホルスブロック」米利堅弁理公使「アルビー・フヲン・ファルケンボルク」ニ兵庫ニ会シ、大政復古ヲ報スルノ国書ヲ付シ、又神戸駅争闘ノ事ヲ判理ス、初メ争闘ノ事起リシヨリ、英米二国兵ヲ出シテ神戸駅ノ両口ヲ扼シ、兵士及ヒ佩刀者ノ往来ヲ止メ、諸藩洋製船艦ノ

港内ニ在ル者ヲ拘留ス、是日皆之ヲ解ク○徳川慶喜甲府城代大久保忠礼（加賀守○小田原）ヲ罷メ、箱根関ヲ厳守セシム、

十六日、九条道孝以下十九人ノ朝参ヲ許ス、

十七日、「初テ七局ヲ置ク」職制ヲ定メ、神祇・内国・外国・海陸軍・会計・刑法・制度ノ七科ヲ置キ、議定之ヲ分督シ、参与之ヲ分掌ス、議定中山忠能ヲ以テ神祇事務総督ヲ兼ネ、議定正親町三条実愛・徳大寺実則・松平慶永・山内豊信、内国事務総督ヲ兼ネ、参与辻維嶽・大久保利通・田宮篤輝内国事務掛ヲ兼ネ、議定副総裁三条実美・議定晃親王・伊達宗城・参与東久世通禧外国事務総督ヲ兼ネ参与後藤元燁・岩下方平外国事務掛ヲ兼ネ、議定副総裁岩倉具視・議定嘉彰親王・島津忠義（初名茂久）海陸軍務総督ヲ兼ネ、参与広沢真臣・西郷隆盛海陸軍務掛ヲ兼ネ、議定副総裁岩倉具視・議定中御門経之・浅野茂勲・参与西四辻公業会計事務総督ヲ兼ネ、参与三岡公正・小原忠寛会計事務掛ヲ兼ネ、議定長谷信篤・細川喜廷刑法事務総督ヲ兼ネ、参与十時維恵・津田信弘刑法事務掛ヲ兼ネ、参与万里小路博房制度寮事務総督ヲ兼ネ、参与三岡公正・福岡孝弟・田中輔ニ制度事務掛ヲ兼シム、又幟仁親王（中務卿○有栖川宮）・白川資訓（三位）ヲ以テ神祇事務総督ト為シ（二人議定ニ非ス、蓋特例ナリ）、六人部某（雅楽○向日明神祠官）・樹下茂国（石見守○日吉祠官）・谷森種松（大和介○官人）ヲ神祇事務掛ト為ス（三人参与ニ非ス、亦特例ナリ）○伊達慶邦（陸奥守○仙台）ニ命シテ松平容保ヲ討ス○蜂須賀茂韶（淡路守）ヲシテ其父斉裕（阿波守、本月六日卒ス○阿波）ノ遺封ヲ襲カシム○備前藩兵姫路城ヲ徇下ス（酒井忠惇ノ治所）ヲ徇ヘテ之ヲ下ス、「備前藩兵姫路城ヲ徇下ス」

十八日、親王ヲ三公ノ上ニ班ス○宮・堂上及ヒ諸官人ニ諭シテ旧習ヲ洗除シ、志操ヲ砥励シ、以テ実用ニ適セシム○徳川慶喜、大河内輝照（右京亮、時ニ松平氏ヲ称ス○高崎）・戸田光則（丹波守、時ニ松平氏ヲ称ス○松本）ヲシテ、板倉勝殷（主計頭○安中）ト共ニ碓氷関ヲ守ラシム、

十九日、会計裁判所ヲ学習院ニ置ク○参与広沢真臣・中根師質・神山君風ヲ以テ内国事務掛ヲ兼シメ、真臣ノ海陸軍務掛ヲ罷ム、

二十日、戸田忠至ヲ以テ参与兼会計事務掛ト為シ、参与楫取素彦ヲ以テ制度寮事務掛ヲ兼シメ、参与酒井忠温ヲ罷ム○北陸道鎮撫総督高倉永祐、副総督四条隆平京師ヲ発ス○是ヨリ先、花山院家理（前左中将）内旨ヲ受ケ西海道ヲ鎮撫スト称シ、周防室積港ニ至ル、其党天草（肥後）・四日市（豊前）ヲ鹵掠ス、是日毛利敬親（大膳大夫）吏ヲ遣リ、家理ヲ拘留ス、余党尋テ平ク○徳川慶喜ノ大坂ニ在ルヤ、尾張藩士其主徳川徳成（元千代）ヲ擁シテ、之ニ応センコト謀ル、議定徳川慶勝請テ藩ニ帰リ、是日首謀渡辺某（新左衛門）・榊原某（勘解由）・石川某（内蔵允）ヲ誅シ、其党二十余名ヲ罰ス、

二十一日、議事条規及ヒ朝参放衙時限・休仮（暇）日ヲ定ム（刻已「大和鎮台ヲ置ク」）

朝参申刻放衙一六ノ日休仮○鎮台ヲ大和ニ置キ、久我通久ヲ以テ之ヲ督ス（参与故ノ如シ）○東山道鎮撫総督岩倉具定・副総督岩倉具経京師ヲ発ス○外国事務総督東久世通禧各国公使ニ移書シ、其国人ノ兵器戦艦ヲ徳川慶喜及ヒ其臣属ニ販鬻「各国公使局外中立ヲ布ク」貸与スルヲ禁ス、尋テ公使等其国人ニ局外中立ヲ布告ス（二十五日、ニアリ）

二十二日、鎮台ヲ大坂及ヒ兵庫ニ置キ、醍醐忠順（大納言）ヲ以テ参与内国事務掛ト為シ、外国事務総督伊達宗城ト共ニ大坂鎮台ヲ督シ、外国事務総督東久世通禧ノ軍事参謀ヲ罷メ、兵庫鎮台ヲ督セシム○沢宣嘉（前主水正）長門ヨリ至ル、「大坂兵庫両鎮台ヲ置ク」

二十三日、議定嘉言親王ヲ以テ内国事務総督ヲ兼ネ、博経親王会計事務総督ヲ兼ネ、寺島宗則（陶蔵）・町田久成（民部五代友厚才助○薩摩藩士）ヲ参与外国事務掛ト為シ、宗則ヲ兵庫ニ、久成ヲ長崎ニ派遣シ、木村貞通（得太郎○肥後藩士）ヲ参与刑法事務掛ト為ス○比年来人ヲ道路ニ暗殺スル者多キヲ以テ、令シテ之ヲ厳禁ス○紙幣製造（三百万両）ノ議ヲ決シ、「紙幣製造ノ議ヲ決ス」参与三岡公正ヲシテ其事ヲ掌ラシメ、其準備金ヲ京都・大坂ノ豪商ニ課ス○松平定教（万之助○定敬ノ義弟）東海道鎮撫府ニ詣リ、罪ヲ謝シ降ヲ乞フ、総督橋本実梁之ヲ納レ、法泉寺ニ幽シ、亀山（伊勢）藩兵ニ命シテ監守セシメ（既ニシテ膳所藩ニ命シ、再ヒ吉田藩ニ改メ閏四月以後ハ尾張・津二藩之ヲ監ス）其臣隷ハ寺院ニ屏居シ、尾

張・津二藩ヲシテ之ヲ監セシム、

二十四日、成瀬正肥（隼人正○尾張犬山）・竹腰正舊（龍若、後伊予守○美濃今尾○並ニ尾張藩付家老）・安藤直裕（飛騨守○紀伊田辺）・水野忠幹（大炊頭○紀伊新宮○並ニ紀井藩付家老）・中山信徴（備前守○常陸松岡○水戸藩付家老）ヲ藩屏ニ列ス○上杉斉憲（弾正大弼○米沢）・南部利剛（美濃守○盛岡）・佐竹義堯（右京大夫○久保田）ニ命シテ、伊達慶邦「大久保利通遷都ノ議ヲ上ル」ニ応援シ会津ヲ討ス○参与大久保利通遷都ノ議ヲ上ル、○是ヨリ先、松平頼聡其老臣伏見ノ役ニ与カル者小夫正容（兵庫）・小河久成（右衛門）ヲ斬リ、使ヲ発シテ罪ヲ征討府「土佐藩兵高松城ヲ徇下ス」ニ謝ス、会マ土佐藩兵高松城ヲ徇フ、頼聡乃チ城ヲ致シテ屏居ス、是日頼聡ノ使臣姫路ニ抵リ、二人ノ首級及ヒ謝罪書ヲ追討総督四条隆謌ニ上ル、

二十五日、東園基敬（中将）・鷲尾隆聚及ヒ伊藤博文（俊介○長門藩士）・林通顕（玖十郎○和島藩士）ヲ以テ参与ト為シ、沢宣嘉ヲ参与兼九州鎮撫総督外国事務総督ト為シ、博文ヲ以テ外国事務掛ヲ兼ネ、兵庫ニ駐在セシメ、木戸孝允（準一郎○長門藩士）ヲ以テ総裁局顧問ト為ス○筑前・肥前二藩ニ命シ、旧ニ仍リテ長崎ヲ戍衛セシム、

二十六日、初メ滋野井公寿・綾小路俊実（前侍従○有長ノ養子）私ニ京ヲ去リ、兵ヲ江濃ノ間ニ募ル、高松実村（左兵衛権佐○保実ノ子）モ亦甲信ノ地方ヲ徇フ、事聞ス、乃チ公寿・俊実ニ命シテ東海道鎮撫使ニ属セシメ（尋テ之ヲ召還ス）、是日又内旨ヲ実村ノ父保実（三位）ニ下シテ、実村ヲ召還ス、

二十七日、二条城ヲ以テ太政官代ト為ス○参与大久保利通ヲ以テ総裁局顧問ト為ス（尋テ之ヲ辞ス）○諸藩ノ征討警衛兵「大坂鎮台ヲ裁判所ト為ス」ニ菊章ノ旗幕ヲ用ヒシム○大坂鎮台ヲ改テ裁判所ト為シ、醍醐忠順（忠順）ヲ以テ総督ト為シ、伊達宗城之ニ副ス（参与内国事務掛、宗城議定外国事務総督ノ如シ）○諸侯松平氏ヲ冒称スル者其本氏ニ復セシム○三道鎮撫使及ヒ浅野茂長（備前守○備前）・池田慶徳（因幡守○因幡）・亀井茲監（隠岐守○津和野）・山内豊範（土佐守○土佐）・伊達宗徳（遠江守○宇和島）ニ命シ、旧幕府領地ノ東海・東山・北陸・山陽・山陰・南海（紀伊ヲ除ク）ニ在ル者ヲ撿シテ、其人民ヲ安撫シ、図籍ヲ上ラシム○徳川慶喜書ヲ松平慶永・山内豊信等ニ致シ、其素志ヲ陳シテ救解ヲ請フ、「土佐藩兵松山城ヲ徇下ス」是日慶永之ヲ上ル○土佐藩兵松山城（久松定昭ノ治所）ヲ徇ヘテ

之ヲ下ス、

二十八日、参与井上馨ヲ以テ外国事務掛ヲ兼ネ、九州鎮撫使ニ属セシム○毛利敬親、其占有スル所ノ豊前・石見ノ地（慶応二年丙寅ニアリ）ヲ上ラント乞フ、命シテ姑ク之ヲ管理セシム○大ニ東征ヲ議スルヲ以テ、大将軍嘉彰親王ヲ召還ス（大将軍凱旋）、是日親王京都ニ凱旋シ、錦旗節刀ヲ上ル○松平武聡（右近将監○旧浜田藩主、曩ニ封ヲ失ヒ美作ノ別邑ニ寓ス）其臣隷伏見ノ事ニ与カルヲ以テ、屏居シテ命ヲ俟ツ○東海道鎮撫総督橋本実梁桑名城ヲ収メ、尾張・津二藩ニ命シテ之ヲ管セシム、

二十九日、吉井徳春（幸輔○薩摩藩士）ヲ以テ参与ト為ス○三道鎮撫使ニ命シ、横浜居留ノ外国人ト釁端ヲ開クコト勿ラシム○徳川慶喜再ヒ書ヲ徳川慶勝・松平慶永ニ致シ、退隠ノ意ヲ陳シテ其救解ヲ請フ○慶喜榊原政敬（式部大輔○高田）ヲ以テ甲府城代ト為ス、

二月

朔日、長崎裁判所（長崎裁判所ヲ置ク）ヲ置ク○大和鎮台ヲ廃シ、久我通久ヲ以テ大和鎮撫総督ト為ス（大和鎮台ヲ廃ス）、参与ノ如シ故、

二日、近衛忠房ヲ以テ神祇事務総督ト為シ、鷹司輔熙ヲ制度事務総督ト為シ、小松清廉（帯刀○薩摩藩士）ヲ総裁局顧問ト為ス（兵庫鎮台ヲ裁判所ト為ス）○兵庫鎮台ヲ改テ裁判所ト為シ、東久世通禧ヲ以テ総督ト為シ（参与外国事務総督ノ如シ故）、九州鎮撫総督兼外国事務総督沢宣嘉ヲ以テ長崎裁判所総督ヲ兼シム、

三日、天皇太政官代ニ臨ミ、親征ノ詔ヲ頒チ、列藩ニ令シテ軍備ヲ為サシム（親征ノ詔ヲ頒ツ）○三職七科ヲ改テ、総裁局及ヒ神祇・内国・外国・軍防・会計・刑法・制度ノ七局ト為シ（七科ヲ改テ八局ト為ス）、総裁局ニ正副総裁及ヒ輔弼（副総裁以下議定之ヲ分掌ス）・顧問・弁事（参与之ヲ分掌ス）・史官等ヲ置キ、七局ニ督（議定之ヲ分掌ス）・正権輔（議定参与之ヲ分掌ス）・正権判事（参与之ヲ分掌ス）等ヲ置ク○議定中山忠能・正親町三条実愛ヲ以テ輔弼ヲ兼ネ、議定万里小路博房ニ制度事務局輔ヲ兼シム、

六日、東海・東山・北陸三道鎮撫使ヲ改テ、先鋒総督兼鎮撫使ト為ス○参与神山君風・十時維恵ヲ以テ弁事ヲ兼シメ、参与毛受洪ヲ罷ム、

七日、高倉永祐・西園寺公望・四条隆平・岩倉具定・柳

原前光ヲ以テ参与ト為シ（総督ノ如シ）、松尾相永（但馬）・松尾相保（伯者ニ官人）○並ヲ参与兼弁事ト為ス○議定島津忠義・細川護久（初名喜廷）・浅野茂勲・毛利広封（長門守○長門藩主敬親ノ子）・松平慶永・山内豊信連署シ、外国公使ヲシテ参朝セシメンコトヲ建議ス、

八日、諸藩（「諸藩触頭」）ノ管長（所謂触頭○加賀・薩摩・仙台・尾張・紀伊・肥後・筑前・安芸・長門・津・越前・因幡・備前・水戸・肥前・土佐・彦根・久保田・江・前橋・松代・忍・郡山・岸和田）ヲ設ケ政令ヲ伝達スルヲ掌ル、

九日、総裁熾仁親王ヲ拝シテ東征大総督ト為シ（総裁ノ如シ）、議定嘉言親王ヲ海軍総督ト為ス（議定ノ如シ）、又沢為量（三位）ヲ奥羽鎮撫総督ト為シ、醍醐忠敬（少将○忠順ノ子）之ニ副ス○日置忠尚ノ臣瀧正信（善三郎）神戸駅争闘ノ罪ヲ判シテ、兵庫ニ自刃セシム、

十日、貢士ノ制ヲ定ム（「貢士ノ制ヲ定ム」）大藩三員、中藩二員、小藩一員○参与助役石山基正○右兵衛権佐基文ノ子ヲ以テ参与ト為ス、

十一日、諸藩ヲ分テ大中小三等ト為ス（「藩ヲ三等ニ分ツ」）大藩四十万石以上、中藩十万石以上、小藩一万石以上、又凡ソ徴士ハ旧藩ト関渉ナキヲ告諭ス○島津忠義封土十万石ヲ献シ、軍政ヲ宏張セント請フ（三月ニ至リ、優詔シテ許サス）、

十二日、土肥実匡（謙蔵○因幡藩士）ヲ以テ参与兼内国事務局判事ト為ス、

十三日、是ヨリ先、徳川慶喜老ヲ告ケ、支族茂承（中納言○紀伊）ヲ以テ嗣ト為ント欲シ、奏状ヲ松平慶永ニ託ス、慶永之ヲ却ケ、痛ク自ラ反省セシム、慶喜乃チ書ヲ上リ、謹慎シテ罪ヲ乞フ、是日、慶永之ヲ奏上ス、

十四日、参与西郷隆盛・林通顕ヲ以テ大総督府参謀ト為ス（参与ノ如シ）故○大坂裁判所総督醍醐忠順、副総督伊達宗城兵庫裁判所総督東久世通禧等、各国公使ヲ大坂（本願寺）ニ会シ、新ニ外国事務局ヲ置キ、及ヒ近日将ニ召見セントスルヲ告ク、

十五日、秋月種樹（右京亮○高鍋藩主種殷ノ子）ヲ以テ参与ト為シ、青山貞（小三郎○越前藩士）ヲ参与兼内国事務局判事ト為ス○東征大総督熾仁親王（「大師東発」）陛辞シ、錦旗節刀ヲ賜フ、大師東発ス○土佐藩兵ノ堺浦ヲ戍ル者、仏蘭西人十余名ヲ殺傷ス○松平

頼聡ノ入京ヲ許シ、功ヲ立テ自ラ贖ハシム、因テ其封土ヲ復ス、

十七日、万国ノ通誼ニ循ヒ、外国公使ヲ召見スルヲ布告シ、三職モ亦副書シテ、天下ノ大勢、宇内ノ公法ヲ示諭ス、

十九日、議定松平慶永ヲ以テ内国事務局輔ヲ兼ネ、参与東園基敬ニ弁事ヲ兼シメ、林和靖間詰大原重徳及ヒ三条西季知・正親町実徳（大納言）・中院通富ヲ以テ参与ト為シ、季知以下三人ヲ林和靖間詰ト為ス○拝任（総裁局史官七局権判事）「総裁鈴印ノ制」以上ノ宣旨ニ総裁朱印ヲ鈴スルノ制ヲ定ム○京都裁判所「京都裁判所ヲ置ク」ヲ置キ、参与兼制度事務局輔万里小路博房ヲ以テ議定兼裁判所総督ト為ス○徳川慶喜江戸城ヲ去テ東叡山「慶喜東叡山ニ屏居」大慈寺ニ屏居シ、松平慶永ニ就キ、上表シテ東征ノ師ヲ弭メント請フ、是日慶永其表ヲ上ル、

二十日、議定幟仁親王ヲ以テ神祇事務局督ヲ兼ネ、参与白川資訓輔ヲ兼ネ、議定徳大寺実則内国事務局督ヲ兼ネ、参与辻維嶽・広沢真臣・大久保利通・中根師質・青山貞・土肥実匡判事ヲ兼ネ、議定晃親王外国事務局督ヲ兼ネ、議定伊達宗城・参与東久世通禧輔ヲ兼ネ、参与岩下方平・町田久成・伊藤博文・五代友厚・寺島宗則・井上馨判事ヲ兼ネ、議定嘉彰親王軍防事務局督ヲ兼ネ、参与烏丸光徳権輔ヲ兼ネ、参与津田信弘・吉井徳春判事ヲ兼ネ、参与壬生基修・四条隆謌・鷲尾隆聚親兵掛ヲ兼ネ、議定中御門経之会計事務局督ヲ兼ネ、議定浅野茂勲輔ヲ兼ネ、参与戸田忠至・三岡公正・小原忠寛判事ヲ兼ネ、議定近衛忠房刑法事務局督ヲ兼ネ、議定細川護久輔ヲ兼ネ、参与溝口貞直・土倉正彦・木村貞通判事ヲ兼ネ、議定鷹司輔凞制度事務局督ヲ兼ネ、参与福岡孝弟判事ヲ兼ネ、参与後藤元燁総裁局顧問ヲ兼ネ、顧問小松清廉・木戸孝允ト共ニ外国事務掛ヲ兼シム、又吉田良義（侍従）ヲ以テ参与兼神祇事務局輔ト為シ、植松雅言（少将）・亀井茲監ヲ参与兼判事ト為シ、岩倉具綱（侍従○具視ノ子）ヲ参与兼内国事務局権輔ト為シ、中川元績（対馬○官）人ヲ参与兼判事ト為シ、井関盛良（斉右衛門○宇和島藩士）ヲ参与兼外

国事務局判事ト為シ、吉田良栄（遠江官人○・土肥某（典膳○備前藩士）ヲ参与兼軍防事務局判事ト為シ、平松時厚（甲斐権介○・時言ノ子）・万里小路通房（右少弁○博房ノ子）・愛宕通旭（大夫○通祐ノ孫）ヲ参与兼親兵掛ト為シ、石山基正・鴨脚光長（加賀官人○）ヲ参与兼会計事務局判事ト為シ、五条為栄（少納言）ヲ参与兼刑法事、

〈一部欠〉

元ヲ出シテ、仏国ニ賠償セシム○金銀旧貨ヲ以テ姑ク新貨ト並行ハシム、

二十四日、東山道鎮撫総督岩倉具定、永井尚服（肥前守、旧幕府若年寄○加納）ノ旧幕府要路ニ居リ、匡救道ヲ失フヲ譴メテ謹慎ヲ命ス、

二十六日、九条道孝ヲ以テ奥羽鎮撫総督ト為シ、総督沢為量ヲ副総督ト為シ、副総督醍醐忠敬ヲ参謀ト為ス、

二十七日、神祇事務局督幟仁親王ヲ罷メ、参与兼神祇事務局輔白川資訓ヲ以テ議定兼督ト為シ、参与兼判事亀井茲監ヲ議定兼輔ト為シ、参与長谷信成ヲ以テ会計事務局権輔ヲ兼ネ、参与秋月種樹ニ内国事務局権輔ヲ兼シム○兵庫裁判所総督東久世通禧ニ命シテ、姫路藩ノ事務ヲ兼知セシム、

二十八日、諸侯ヲ便殿ニ召シ、親諭シテ、同心協力以テ国事ニ勉励セシム○是ヨリ先、旧幕府水戸藩士武田耋金次郎及ヒ其党百三十七人ヲ小浜藩ニ禁錮ス、是日之ヲ赦シ、令シテ先主徳川斉昭（贈大納言○水戸藩主慶篤ノ父）尊王ノ遺志ヲ継キ、且ツ本藩ノ奸党ヲ除カシム○大総督府水野忠敬（出羽守○沼津）ヲ以テ甲府城代ト為ス、

二十九日、議定鍋島茂実ヲ以テ外国事務局権輔ヲ兼シム、

晦日、英吉利公使「スル・ハルリー・エス・パークス」（「各国公使ノ朝見ノ始」）仏蘭西公使「レヲンロッシュ」荷蘭公使「ド・デ・クラフ・ソン・ボルスブロック」朝見ス、刺客英公使ノ従衛ヲ衝突ス、英公使朝スルヲ果サス（三月五日、首謀者三枝蓊・朱雀操ヲ梟ス）○大原俊実（初メ綾小路氏ヲ冒ス）ヲ以テ海軍先鋒ト為ス、

是月、松平頼位（主税頭○宍戸藩主頼徳ノ父）ノ禁錮（甲子歳譴ヲ旧幕府ニ獲ル者）ヲ釈シ、其職位ヲ復ス○松平容保江戸ヲ去テ会津ニ帰ル、

三月

朔日、鍋島斉正ヲ以テ議定ト為シ、長岡護美（後左京亮、肥後藩主細川韶邦ノ第二子）毛受洪ヲ参与ト為シ、参与坊城俊章・田中輔良ヒ洪ヲ以テ弁事ヲ兼シメ、参与荒川良知ヲ罷ム○是ヨリ先、松平定安（出羽守、出雲）罪ヲ山陰道鎮撫使西園寺公望ニ得、公望兵ヲ遣テ之ヲ責問ス、時ニ定安京師ニ在リ、是日其子瑶彩麿及ヒ重臣等、他ナキヲ陳シ、誓書ヲ公望ニ上ル、

二日、議定鍋島斉正・参与長岡護美ヲ以テ軍防事務局輔ヲ兼シメ、参与久保田秀雄ヲ罷ム○大久保忠礼・堀田正倫（相模守、佐倉）等四十三人、連署シテ書ヲ上リ、徳川慶喜ノ為ニ哀ヲ乞フ、大師既ニ東下スルヲ以テ、之ヲ大総督府ニ上ラシム、

三日、英吉利公使「スル・ハルリー・エス・パークス」朝見ス、

四日、蜂須賀茂韶ヲ以テ議定兼刑法事務局輔ト為シ、荒尾成章（駿河藩士、因幡藩）ヲ参与兼刑法事務局判事ト為シ、参与田宮篤輝ヲ以テ内国事務局判事ヲ兼ネ、外国事務局判事寺島宗則ニ制度事務局判事ヲ兼シム、

五日、吉川経幹（監物、長門藩老臣）ヲ藩屏ニ列ス○毛利元周（左京亮）致仕ス、養子元敏（宗五郎、左京亮）、後封ヲ襲ク○大総督熾仁親王駿府城ニ入ル、

六日、近藤昌宜（勇、旧幕府新選組長時ニ大久保剛ト称ス）其党二百余人ヲ率ヰ将ニ甲府ニ拠ラントス、東山道ノ官軍之ヲ勝沼駅（甲斐）ニ破ル、「大津裁判所ヲ置ク」

七日、大津（江近）裁判所ヲ置キ、議定長谷信篤ヲ以テ総督ト為ス（議定故ノ如シ）○酒井忠惇（雅楽頭、姫路）ノ官位ヲ褫キ、其入京ヲ止ム○堀親義（若狭守、飯田）致仕ス、養子親広（三之丞、後美濃守）封ヲ襲ク○入道公現親王（一品、輪王寺宮）駿府ニ詣リ、大総督熾仁親王ニ謁シ、徳川慶喜ノ謝罪書ヲ上リテ哀ヲ乞フ、

八日、橋本実麗（大納言）ヲ以テ参与林和靖間詰ト為ス○大総督府、東海・東山・北陸三道ノ先鋒総督ニ令シ、本月十五日ヲ期シテ江戸ヲ進撃セシム、「総督府江戸進撃ノ令ヲ布ク」

九日、天皇太政官代ニ臨ミ、蝦夷地開拓ノ得失ヲ諮詢ス、「蝦夷開拓ノ勅問」群議其利ヲ陳ス○毛利広封ヲ以テ議定ト為シ、議定鍋島斉正ノ軍防事務局輔ヲ罷メ、制度事務局輔ヲ兼シム

○旧幕府ノ臣山岡高歩（鉄太郎）駿府ニ抵リ、参謀西郷隆盛ニ就テ、徳川慶喜ノ為ニ哀ヲ乞フ、勝義邦（安房守○旧幕府陸軍総裁）モ亦書ヲ隆盛ニ致シ、其情ヲ陳ス、大総督乃チ謝罪ノ実効ヲ責メテ之ヲ遣ル○古屋某（作左衛門○旧幕府歩兵頭）歩兵千八百許人ヲ率キテ、将ニ信濃ニ赴カントス、東山道官軍之ヲ梁田駅（下野）ニ破ル、某会津ニ走ル、

十二日、神仏ヲ混同シ、薩権現等ノ字ヲ以テ神号ト為スヲ禁ス（「神仏混同ヲ禁ス」）○大総督入道公現親王ニ諭シ、徳川慶喜ヲシテ謝罪ノ実効ヲ表セシム、

十三日、副島種臣（二郎○肥前藩士）ヲ以テ参与兼制度事務局判事ト為シ、議定細川護久ノ刑法事務局輔ヲ罷ム○祠官ノ公卿ニ因テ執奏シ、及ヒ其配下タルヲ停メ、之ヲ神祇事務局ニ隷ス、

十四日、天皇南殿ニ御シ、公卿諸侯ヲ率キテ、天神地祇ヲ祭リ、五事ヲ誓約ス（「五箇ノ誓約」）一曰、広ク会議ヲ興シ、万機公論ニ決ス、二曰、上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フ、三曰、官武一途、庶民ニ至ルマテ各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マサラシム、四曰、旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基ク、五曰、智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起ス○凡ソ朝覲ノ諸侯必ス誓約ニ就ク、後チ恒例ト為ス（「掲榜ヲ改ム」）○旧幕府ノ掲榜ヲ徹シ、更メテ五条ヲ掲示ス（第一榜、一曰、五倫ノ道ヲ正フスヘシ、二曰、鰥寡孤独廃疾ノ者ヲ憫ムヘシ、三曰、人ヲ殺シ、家ヲ焼キ、財ヲ盗ム等ノ事ヲ為ス勿レ、第二榜、曰、党ヲ樹テ強訴シ、或ハ相率キテ田里ヲ去ルコト勿レ、第三榜、曰、切支丹邪教ハ、旧ニ仍リテ之ヲ厳禁ス、以上三榜、永世ノ定法トス、第四榜、外国人ニ対シテ暴行ヲ為スヲ禁ス、第五榜、逋逃ヲ禁ス、以上二榜、一時ノ掲示トス）○徳川慶喜、大久保忠寛（一翁○旧幕府若年寄）・勝義邦等ヲ遣シ、西郷隆盛（時ニ江戸高輪ニ在リ）ニ就テ謝罪ノ条款ヲ陳ス、隆盛乃チ仮ニ明日ノ進軍ヲ止ム、

十五日、長谷川景隆（二右衛門、時ニ由良洞水ト称ス○肥後藩士）ヲ以テ参与兼内国事務局判事ト為シ（二十日ニ至リ、大坂裁判所判事ヲ兼ヌ）、議定伊達宗城ノ大坂裁判所副総督ヲ罷ム○池田茂政致仕ス、支封池田章政（信濃守、初名政詮○鴨方）入テ其宗ヲ承ケ、章政ノ子政保（満次郎）父ノ封ヲ襲ク、

十六日、西郷隆盛駿府ニ帰リ、徳川慶喜謝罪ノ条款ヲ大総督ニ稟ス、督府乃チ三道総督ニ令シテ其進軍ヲ止メ、隆盛ヲ遣シテ其状ヲ奏ス、（「督府進軍ヲ止メ慶喜ノ謝罪状ヲ奏ス」）

十七日、長崎裁判所参謀大隈重信（八太郎○肥前藩士）ヲ以テ参与兼

外国事務局判事ト為シ、横浜ニ赴カシム○僧侶ノ社務ニ服スル者皆蓄髪セシム○是ヨリ先、東海道先鋒参謀木梨恒準（精一郎○長門藩士）横浜ニ至リ、外国公使ニ東征ヲ報シ本港護衛ノ事ヲ照会ス（十三日ニ在リ）、是日、熾仁親王英吉利公使ニ移書シ、東征大総督ノ任ヲ受ルヲ告ケ、且ツ米倉昌言（丹後守○武蔵金沢）ヲシテ、仮ニ横浜ヲ管セシムルヲ報ス、十八日、准后藤原氏（「皇太后ノ尊称ヲ上ル」）（夙子）ヲ尊テ皇太后ト為シ、大宮ト称ス○朝貴ノ名称ヲ冒シテ、金銀ヲ貸与（所謂名目金）スルヲ禁ス（後令シテ既ニ借ル者、ハ、之ヲ償弁セシム）

「横浜裁判所ヲ置ク」十九日、中山忠愛（前中将○忠能ノ子）ヲ以テ参与ト為ス○横浜裁判所ヲ置キ、兵庫裁判所総督東久世通禧ヲ以テ総督ト為シ、外国事務局権輔鍋島直大（初名茂実）ヲ副総督ト為ス（並ニ参与兼外国事務局輔故ノ如シ）○森忠典（美作守○赤穂）・織田信学（左近将監○天童）致仕ス、忠典ノ養子忠儀（帯刀、後越後守）・信学ノ子信敏（富久之助、後兵部大輔）並ニ封ヲ襲ク○東海道先鋒副総督柳原前光往テ甲府ヲ鎮ス、二十日、再ヒ徳川慶喜ノ罪状ヲ布告シ、私ニ文書ヲ通スルヲ禁ス、

「車駕親征」二十一日、車駕親征、是日京師ヲ発ス、

「大坂行在」二十三日、車駕大坂ニ抵ル、本願寺ヲ以テ行在ト為ス○「大政維新ヲ朝鮮ニ報ス」成瀬正肥ヲ以テ参与ト為ス○宗義達ニ命シテ、大政維新ヲ朝鮮国ニ報セシム○海軍先鋒大原俊実、横浜ニ至リ、奥羽鎮撫総督九条道孝仙台ニ至ル、

二十四日、顧問小松清廉・後藤元燁ヲ以テ外国事務局判事ヲ兼シム、

二十五日、是ヨリ先、旧旗下士等東叡山ニ聚合シ、彰義隊ト称ス、時ニ水野勝知（日向守○結城）江戸ニ在リ、密ニ徳川氏ヲ扶持セントス謀ル、本藩ノ義徒相謀リ、将ニ勝知ヲ廃シテ義叔父勝寛（禊之助）ヲ立ントス、是日勝知彰義隊ヲ率キ、藩城ヲ襲フテ之ヲ取ル、勝寛風ヲ聞テ先ツ遁ル、

二十六日、車駕天保山（大坂海口ニ在リ）ニ幸シテ海軍操練ヲ覧ル、

二十七日、参与兼外国事務局判事寺島宗則ヲシテ横浜ニ駐在セシム○保科正益（弾正忠○飯野）入京ス、其形迹疑フ可キヲ以テ謹慎シテ命ヲ俟タシム○一橋茂栄（大納言）及ヒ徳川氏ノ臣属等大総督府ニ詣リ、慶喜ノ為ニ哀ヲ乞フ、

二十九日、坊城俊政（右大弁）ヲ以テ参与ト為シ、大坂裁判所総督醍醐忠順ヲ以テ兵庫裁判所総督ヲ兼シム○諸標榜等ニ禁裡ノ字ヲ冒シ、及ヒ菊章ヲ濫用スルヲ禁ス○稲垣長行ニ令シ、京ニ至リ謹慎シテ命ヲ俟タシム、（「禁裡字及菊章ヲ用ルヲ禁ス」）

三十日、庶民ノ縉紳家臣隷（所謂未勤ノ家来）ト冒称スルヲ禁ス、

是月、松平定敬江戸ヲ去テ越後ノ別邑（柏崎）ニ赴キ、板倉勝静日光山ニ入ル、

四月

朔日、宿駅役所ヲ京都ニ置キ、諸道駅逓ノ事ヲ掌ラシム○東海道先鋒総督橋本実梁進テ池上本門寺ニ次シ、副総督柳原前光甲府ヨリ江戸ニ入リ、久留米藩邸ニ次ス、

二日、参与平松時厚ヲ以テ弁事ヲ兼シメ、横浜裁判所総督東久世通禧、副総督鍋島直大ニ江戸開市事務ヲ兼督セシム○旧幕府米利堅ニ購買スル所ノ甲鉄艦、横浜港ニ至ル、海軍先鋒大原俊実之ヲ抑留シテ、品川海ニ入ルヲ許サス、

四日、内藤政挙ヲ召シテ京ニ至ル、乃チ謹慎シテ命ヲ俟タシム○西郷隆盛、行在所ヨリ至リ、大総督ニ復命ス、（「両総督江戸城ニ入リ勅旨ヲ伝フ」）

是日東海道先鋒総督橋本実梁・副総督柳原前光江戸城ニ入リ、勅旨ヲ田安慶頼（中納言○家達ノ父）ニ伝ヘ、徳川慶喜ノ死一等ヲ減シ、命スルニ実効五事ヲ以テス（一日、慶喜ヲ水戸城ニ幽ス、二日、江戸城ヲ収ム、三日、軍艦銃砲ヲ収ム、四日、家臣ヲ郭外ニ屏ク、五日、家臣ノ与謀者ヲ処分ス）○北陸道総督高倉永祜・副総督四条隆平江戸ニ入リ東本願寺ニ次ス、

五日、始テ太政官日誌ヲ刊布ス○長崎裁判所総督沢宣嘉（「太政官日誌刊行」）各国領事ト議シ、其雇使スル所ノ支那人、我禁令ヲ犯ス者ハ国律ヲ以テ之ヲ処スルコトヲ定ム○東山道ノ官軍結城城ヲ復ス、水野勝知遁レ走ル、尋テ水野勝寛、其父勝進（摂津守○勝知ノ養祖父）結城ニ復帰ス、（「結城城ヲ復ス」）

六日、天皇諸藩兵ノ操練ヲ大坂城中ニ観ル○是ヨリ先、伊達慶邦東征ノ五不可ヲ陳シ、徳川慶喜・松平容保等ノ為ニ寛宥ヲ請ハントス、果サス、是日之ヲ大総督府ニ請フ、督府其書ヲ卻ク、

七日、列藩及ヒ諸采邑ノ租税・戸籍等ヲ録上セシム○諸

「江戸諸藩ノ家眷ヲ復帰ス」藩主及ヒ其臣隷ノ家眷、江戸ニ在ル者、悉ク本邑ニ復帰セシム○田安慶頼書ヲ東海道先鋒総督橋本実梁ニ呈シ、徳川慶喜勅旨ヲ奉スルヲ陳ス、是日慶喜・小野広胖内膳○旧幕府勘定奉行並・瀧川具知以下十人ヲ罰ス愛以下十一人ノ職ヲ解ク、並ニ伏見鳥羽ノ役ニ与カル者

九日、松平親良中務大輔○杵築致仕ス、其子親貴但馬守封ヲ襲ク○旧幕府ノ海陸軍士書ヲ東海道先鋒総督橋本実梁ニ上リ、田安家達亀之助ヲシテ仮ニ江戸城ヲ管シ、軍艦銃器ハ、「板倉勝静・勝全降ル」充用ノ余ヲ献セント請フ、省セス○板倉勝静・其子勝全万之助東山道ノ軍ニ降ル、之ヲ宇都宮藩ニ幽ス、

十日、嚮ニ神仏区別ノ令出ルヤ、祠官ノ徒之ニ乗シテ往往暴挙ヲ為ス、乃チ令シテ之ヲ厳禁シ、其処分ヲ稟請セシム○銅会所ヲ大坂ニ置キ、人民ノ私販ヲ禁ス、

十一日、東海道先鋒総督橋本実梁江戸城ヲ収ム、又其軍「江戸城ヲ収ム」艦ヲ収メントス、榎本武揚和泉守○旧幕府海軍副総督風濤ニ託シテ之ヲ辞シ、夜ニ及テ船艦八隻ヲ率キ、館山安房ニ走ル、大「榎本武揚等品海ヲ脱ス」鳥純彰圭助○旧幕府歩兵奉行モ亦其党千六百許人ヲ率キテ、市川下総ニ走リ、福田道直八郎右衛門○旧幕府撤兵頭千五百許人ヲ率キテ木更津総上ニ走ル○古屋某会津ヲ去テ、与板越後ヲ却掠ス○徳川慶喜水戸ニ赴ク、

「慶喜水戸ニ赴ク」

十二日、箱館裁判所ヲ置キ、議定兼軍防事務局督嘉彰親王ヲ以テ総督ト為シ、清水谷公考侍従○公正ノ子・土井利恒能登守○大野ヲ副総督ト為ス、親王之ヲ辞ス、乃チ旧官ニ復ス○列藩ニ令シ、旧習ヲ釐革シ、人材ヲ擢用セシメ、巡察使ヲ差遣シテ之ヲ按検ス、

「箱館裁判所ヲ置ク」

十三日、是ヨリ先、隠岐国民松平定安置ク所ノ吏ヲ逐フ、是日定安ニ命シ、旧ニ仍リテ之ヲ管セシム、

十四日、参与東久世通禧ヲ以テ議定ト為ス外国事務局輔横浜裁判所総督兼江戸開市事務総督故ノ如シ○在京諸侯既ニ誓約ニ就ク者ハ、定額ノ兵大藩百五十人ヨリ二百人、中藩百人ヨリ百五十人、小藩二十五人ヨリ百人ニ至ルヲ留メテ、各其藩ニ帰ラシム官守アル者ハ此限ニ在ラス○久保田・盛岡・弘前・松前四藩ニ命シテ、戍兵ヲ箱館ニ置ク○松平容保官軍ニ抗スルノ報至ル、乃チ薩・長・佐土原三藩ニ命シ、兵ヲ北越ニ出シテ奥羽ノ官軍ニ応援セシム○奥羽鎮撫総督九条道

孝進テ岩沼陸奥ニ次シ、諸藩ニ令シテ会津ヲ討シ、副総督沢為量、別軍ヲ率キテ荘内ニ向フ、是ヨリ先、仙台・米沢二藩首トシテ会津ノ為ニ救解ヲ謀ル、是日伊達慶邦大総督ニ上ル所ノ書ヲ持シテ総督府ニ詣ル、道孝モ亦之ヲ卻ク、

十五日、「笠松裁判所ヲ置ク」学習院ヲ以テ、仮ニ大学寮ト為ス○笠松美濃裁判所ヲ置キ、参与大原重徳ヲ以テ総督ト為ス（参与故ノ如シ）○軍功ヲ以テ戸田氏共ノ罪ヲ宥シ、其隊長伏見ノ役ニ与カル者ヲ永禁錮ニ処ス、松平頼聡モ亦重臣ヲ刑シ、軍資金十二万両ヲ献スルヲ以テ、其謹慎ヲ釈シ、官位ヲ復ス○「大総督江戸ニ入ル」大総督熾仁親王江戸ニ入リ、増上寺ニ次ス、

十七日、「宮堂上子弟僧トナルヲ禁ス」宮・堂上ノ子弟ヲ度シテ僧ト為スヲ禁ス○箱館裁判所総督ニ蝦夷地開拓ノ方法ヲ授ク（蝦夷ノ称ヲ廃シテ南北二道ヲ置キ、府ヲ宗谷ニ開キ、税金ハ開拓費ニ充テ、諸藩ノ開墾ヲ乞フ者ニハ土地ヲ分属シ、且ツ其人材ヲ擢用シ、先ツ本部ノ規模ヲ立テ、後ニ北蝦夷ニ及フ等ノ条件）○榎本武揚等ノ品川海ヲ脱スルヤ、東海道先鋒総督橋本実梁、田安慶頼・勝義邦ヲ責メテ之ヲ追ハシム、是日義邦船艦ヲ率キテ品海ニ還ル○賊兵（大鳥純彰）将ニ結城ニ逼ラントス、東山道官軍之ヲ小山駅（下野）ニ邀ヘ撃ツ、利アラス、結城城援絶ユ、水野勝進・勝寛皆遁ル、石川総管（若狭守）○下館・井上正巳（辰若丸、後伊予守）○下妻モ亦守ヲ棄テ走ル、賊去ルニ及テ各其邑ニ帰ル、

十八日、「初テ各国使節ヲ命スル」議定外国事務局輔東久世通禧ニ命シテ、英吉利・仏蘭西・孛漏生・伊太里・魯西亜・荷蘭六国ニ使セシム（五月二十四日ニ至リ、合衆国使節ヲ命ス、皆行ヲ果サス）○大総督府江戸ノ金銀銅座ヲ収ム「金銀銅座ヲ収ム」現存旧新金貨九十二函、総計六万千七百三十両余、古大判三十四枚、新大判三十八枚、當百銅銭凡ソ三万貫、文久銭四万零九百貫余、真鍮銭十二万四千六百貫余、鉄銭九万八千貫余、金銀地金三百五十六貫目余、銅千七百貫目、鉛七万七千四百貫目余、丁銀二百貫目、及ヒ製造器械数種○東海道先鋒総督橋本実梁、徽ヲ武総房常ノ二十九藩ニ伝ヘ、大鳥純彰・福田道直ヲ討ス、

十九日、「新潟府中二裁判所ヲ置ク」新潟・府中（但馬）二裁判所ヲ置キ、北陸道先鋒兼鎮撫副総督四条隆平ヲ以テ、新潟裁判所総督兼鎮撫副総督ト為シ、山陰道鎮撫総督西園寺公望ヲ府中裁判所総督ト為ス、又北陸道先鋒総督高倉永祜ヲ北陸道鎮撫総督兼会津征討総督ト為ス○大鳥純彰宇都宮城ヲ陥ル、「賊宇都宮城ヲ陥ル」戸田忠恕（越前守）○宇都宮藩主忠友ノ父、時ニ忠友大津ニ在リ）館林ニ走ル、

二十日、「神奈川奉行所ヲ収ム」横浜裁判所総督東久世通禧、神奈川奉行所及ヒ横須賀製鉄所ヲ収ム○各国領事、書ヲ長崎裁判所ニ致シ、耶蘇宗ノ禁ヲ解カント請フ○東山道ノ官軍関宿ニ次シ、旁近ノ賊ヲ討ス、是日本藩ノ奸党百余人江戸ニ赴キ、藩主久世広文隠岐守ヲ擁シテ東叡山ノ兵ニ投ス、

二十一日、「湊川社創営」勅シテ贈正三位左近衛中将楠正成ノ祠宇ヲ湊川摂津ニ営シ、其子正行以下ヲ配祀ス金千両ヲ下シテ造営費ニ充ツ○大「大総督江戸城ニ入ル」総督熾仁親王江戸城ニ入ル○東海道先鋒総督橋本実梁仮ニ江戸旧町奉行石川利政河内守・佐久間信義鐘五郎ヲ以テ市中取締ト為シ、米倉昌言ノ横浜取締ヲ罷ム、

二十二日、長崎裁判所総督沢宣嘉、浦上天主教徒ノ処分ヲ稟請ス、乃チ議案ヲ在京諸侯ニ下シ、各意見ヲ上ラシム、

二十三日、横井時存平四郎○肥後藩士ヲ以テ参与ト為ス○大総督府令シテ、旧幕府所有ノ軍艦四隻ヲ徳川氏ニ賜ヒ、余「宇都宮城ヲ復ス」ハ悉ク之ヲ上ラシム○東山道ノ官軍宇都宮城ヲ復ス、大鳥純彰、板倉勝静父子ヲ擁シテ日光山ニ奔ル、

二十四日、「佐渡裁判所ヲ置ク」佐渡裁判所ヲ置キ、滋野井公寿ヲ以テ総督ト為ス○奥羽鎮撫副総督沢為量新荘ニ次シ、軍ヲ清川荘内ヲ距ル六里許ニ進メテ荘内ヲ討ス、

二十五日、徳川氏継嗣禄秩ノ事ヲ下問ス○内国事務局権判事小河一敏弥右衛門○岡藩士ヲ以テ参与兼内国事務局判事ト為ス○稲葉正邦美濃守○淀・松井康英周防守○川越・大給乗謨縫殿頭○龍岡・大給近説左衛門尉○府内旧幕府ノ要路ニ居リ、匡救道ヲ失スルヲ譴メ、並ニ謹慎ヲ命ス○古屋某越後ヨリ信濃ニ入ル、松代藩兵、尾張藩兵ト共ニ之ヲ飯山ニ破ル○合衆国人「ウエンリート」我国民百四十許人ヲ傭ヒ、私ニ之「米人我国人ヲ布哇ニ送ル」ヲ布哇島ニ送ル傭奴ノ事旧幕府ノ約ニ係ル、東久世通禧横浜ニ至ルニ及ヒ、布哇ハ条約未済国ヲ以テ之ヲ止ム「ウエンリート」聴カス

二十六日、大総督府、軍費不貲ヲ以テ毎月金拾万両弐分金、「宦朱銀」ヲ鋳造シ、具状シテ之ヲ奏ス○牧野貞直越中守○笠間ノ臣賊ニ応スル者アリ、貞直捕ヘテ之ヲ幽ス後首謀六人ヲ斬ニ処シ、従三人ヲ禁獄ス、

二十七日、大村永敏益次郎○長門藩士ヲ以テ軍防事務局判事ト為

シ、東下シテ大総督ヲ輔ケシム○大関増勤（泰次郎、後美作守）ヲシテ養父増裕（肥後守、戊辰三月七日卒ス○黒羽）ノ遺封ヲ襲カシム、

二十八日、賊兵信濃ニ入ルノ報至ル、徳川慶勝ニ命シテ之ヲ討シ、駿遠参ノ諸藩ヲシテ応援セシム、大総督モ亦真田幸民ニ令シ（廿四日ニ在リ）旁近諸藩ヲ督シテ進討セシム、

二十九日、参与戸田忠至ヲ以テ京都裁判所副総督ヲ兼シ（「参河裁判所ヲ置ク」）ム○参河裁判所ヲ置キ、駿遠両国ヲ併セ管シ、参与兼弁事平松時厚ヲ以テ総督ト為ス○春日神社別当大乗院隆温（後ニ松岡氏ヲ称ス）以下復飾ノ請ヲ允シテ、仮ニ新神司ト称セシム○是ヨリ先、本荘宗秀（伯耆守）入京ス、其子宗武朝譴ヲ蒙ルヲ以テ、之ヲ廃シ自ラ復職セント請フ、許サス、宗武ヲ召シテ入京ス、是日二人ニ命シ、屏居シテ罪ヲ俟タシム、

閏四月

朔日、英吉利特派全権公使「スル・パルリー・エス・パークス」行在所ニ朝シ、国書（「パークス」ヲ特派全権公使ニ任スルヲ報ス）ヲ上ル○東山道ノ官軍、進テ日光山ニ逼ル、大鳥純彰等会津ニ逃ル、

二日、大総督府田安慶頼・大久保忠寛・勝義邦ニ江戸市中取締ヲ命ス、

三日、竹腰正美（兵部少輔○今尾藩主正旧ノ養父旧幕府ノ譴責ヲ受テ屏居ス）ニ蟄居ヲ命ス○松平定敬ノ臣隷（寺院ニ屏居スル者）伏見ノ挙ニ与カル者、及ヒ重臣ヲ除クノ外悉ク之ヲ赦ス○東山道官軍、近藤昌宜ヲ流山（下総）ニ擒ス（後之ヲ斬リ首ヲ京師ニ伝ヘ三条磧ニ梟ス）○賊兵（江原周甫）官軍ヲ八幡（下総）ニ襲フ、官軍利アラス、既ニシテ之ヲ破リ、船橋駅ニ次ス、

四日、大木喬任（民平○肥前藩士）ヲ以テ参与兼外国事務局判事ト為ス○掲榜中切支丹邪宗門ノ邪字ヲ削リ、別ニ邪宗ヲ禁スルノ一条ヲ加フ○大総督府東海道先鋒副総督柳原前光ヲ遣シ、房総ヲ鎮撫ス○横浜裁判所総督東久世通禧、書ヲ合衆国公使ニ贈リ、其国人「ウエンリート」我国人ヲ布哇ニ送リシ状ヲ審糾セシム（公使復書ス「ウエンリート」ハ布哇ノ領「荘内兵天童ヲ陥ル」事タリ、舶ハ英船ニ係ルヲ以テ之ヲ審糾スルノ権ナシト）○荘内兵天童ヲ陥ル、織田信学（時ニ藩主信敏京都ニ在リ）仙台ニ遁ル、

五日、箱館裁判所副総督清水谷公考ヲ以テ総督ト為シ、内国事務局権判事井上長秋（石見○薩摩藩士）ヲ参与兼内国事務局判事ト為シ（箱館在勤、故ノ如シ）、橋本実陳（大夫○実麗ノ孫）ヲ参与兼弁事ト為シ、参与横井時存ヲ以テ制度事務局判事ヲ兼シム○東征第二軍ヲ置キ、府中裁判所総督西園寺公望ヲ以テ総督ト為シ、軍防事務局輔長岡護美ヲ副総督ト為ス、又池田章政ヲ以テ議定兼江戸鎮台補ト為シ、兵ヲ引テ任ニ赴カシム（後皆行ヲ果サス）○稲葉正邦ノ謹慎ヲ釈ス○小笠原長国（佐渡守○唐津）、其子長行（図書頭○旧幕府老中）所在ヲ失スルノ状ヲ奏シ、兵ヲ出シテ自ラ効サント請フ、乃チ第二軍ニ属セシム○酒井忠篤・水野勝知ノ官位ヲ褫キ、其家臣ノ入京ヲ禁ス、

「豊国社復興」

六日、豊国社ノ祀典ヲ復シ、新ニ其祠宇ヲ造営セシム○顧問参与木戸孝允ヲ長崎ニ遣シ、浦上村ノ天主教徒ヲ処分セシム○宗義達上書シテ朝鮮国交際ノ事例ヲ更革セント請ヒ、其条款ヲ陳ス○大総督府金十五万両ヲ田安慶頼ニ下付シ、徳川氏ノ家眷臣隷ヲ賑救ス、

「慶喜ノ伏罪状至ル」

七日、大総督熾仁親王、徳川慶喜伏罪ノ状ヲ奏ス、是ニ於テ親征ヲ止メ、車駕北還、是日大坂ヲ発ス○松平直克（時ニ京都ニ在リ）ニ命シテ上総・上野地方ヲ鎮撫ス○東海道先鋒副総督柳原前光佐倉城ニ入リ、旁近諸藩ノ老臣ヲ召シテ其向背ヲ問ヒ、監軍渡辺清（清左衛門○大村藩士）相良長発（治部○薩摩藩士）ヲシテ兵ヲ率ヰテ木更津ノ賊ヲ討セシム、賊兵敗走ス、

「車駕京ニ還ル」

八日、車駕京師ニ還ル○小笠原長行ノ官位ヲ褫ク○是ヨリ先、賊兵（古屋某）越後ニ抵ル、新発田藩主溝口直正（誠之進）拒ミテ納レス、高田藩主榊原政敬之ヲ納ル、是日直正ヲ賞シ、政敬ノ老臣ヲ召ス（前日北陸道総督高倉永祜、政敬ノ罪ヲ貸シテ其自効ヲ責ム）○本多助成（豊後守○飯山）賊ヲ城下ニ逗ムヲ以テ、屏居シテ罪ヲ東山道先鋒総督岩倉具定ニ乞フ、是日之ヲ宥ス、

「関東大監察使ヲ置ク」

十日、関東大監察使ヲ置キ、副総裁三条実美ヲ以テ之ヲ兼シム○永井尚服ノ謹慎ヲ釈ス、

十一日、東海道先鋒副総督柳原前光、進テ大多喜ニ抵ル、大河内正質城ヲ致シテ罪ヲ待ツ、乃チ堀田正倫ニ付シ

テ之ヲ幽シ、宗家大河内信古（刑部大輔○参河吉田）ヲシテ其城地臣隷ヲ監守セシム、

十二日、参与五辻安仲ヲ以テ仮ニ弁事ヲ兼シム、

十三日、是ヨリ先、西海道諸藩ヲシテ旁近直隷ノ地ヲ監撫セシム、是日之ヲ長崎府ニ属ス、

十四日、「金銀貨銅鉄銭ノ価位ヲ定ム」親征扈蹕ノ諸侯ニ帰藩ヲ命ス○新旧金銀貨及ヒ銅鉄銭ノ価位ヲ定ム、

〈一部欠〉

荘内賊勢鴟張、官軍援ナシ、是日奥羽鎮撫副総督沢為量、師ヲ新荘ニ還ス、

十五日、「親王宣下賜姓ノ制ヲ定ム」伏見・有栖川宮以下親王宣下及ヒ賜姓ノ制ヲ定ム、又入道昌仁（梶井宮）・信仁（照高院宮）ニ親王ヲシテ復飾セシ「天主教徒ヲ諸藩ニ分付ス」ム信仁ハ智成ニ復ス○浦上村天主教徒ヲ諸藩ニ分付シテ、之ヲ教諭セシム（六月ニ至リ、長門・福山・津和野三藩ヲ除クノ外、姑ク其令ヲ停メ己巳歳ニ至リ更ニ加賀・薩摩・尾張・紀伊・福岡・安芸・因幡・津・備前・阿波・土佐・松江・郡山・姫路・松山・高松・大聖寺・富山十八藩ニ命シ、漸次ニ之ヲ分付シテ、庚午ノ春ニ終ル、総計三千四百三十余人）○仙台・米沢二藩、松平容保ヲ救解スルヲ謀リ、諸藩ト共ニ兵ヲ擁シテ進マス、容保ニ説キ、城ヲ致シ罪ヲ謝セシム、容保屏居シテ恩裁ヲ待ント請フ、諸藩乃チ連署シテ其書ヲ併セテ、鎮撫総督九条道孝ニ上リ、征討兵ヲ弭メント請フ（十二日ニ在リ）、是日道孝之ヲ卻ケ、其軍ヲ督進ス、

十七日、東海道先鋒副総督柳原前光、阿部正恒（駿河守○佐貫）ノ賊ニ党スルヲ以テ、其封土ヲ収メ佐倉藩ヲシテ之ヲ管セシム、

十九日、大原重朝（左馬頭○重徳ノ第二子）ヲ以テ参与兼弁事ト為ス○列藩ニ賦課シテ、陸軍ヲ編制ス（「陸軍編制」毎一万石ニ京畿常備兵十人、姑ク三人ヲ出ス、藩地予備兵五十人、軍資金三百両、万石以下ノ者ハ単ニ軍資金ヲ課ス、其額前ニ準ス）○新ニ紙幣ヲ製シ、通行（「紙幣新造布告」）十三年ヲ限リ、且ツ之ヲ列藩ニ貸与スルヲ布告ス（一万石ニ一万両ヲ貸ス、富民モ亦之ヲ借ルヲ許ス、十二月ニ至リ始テ之ヲ貸与ス）○京極高富（主膳正○峯山）・立花種恭（出雲守○下手渡）○稲葉正善（備後守○館山）入京ス、高富・種恭及ヒ正善ノ父正己（兵部少輔）旧幕府ノ要路ニ居リ、匡救道ヲ失スルヲ譴メ、並ニ謹慎ヲ命ス（高富ハ、十八日ニ在リ）○議定鍋島直正（初名斉正）長崎警備ノ故ヲ以テ帰藩ヲ請フ、之ヲ聴ス（疾アリ発セス八月藩ニ帰ル）○

「仙米諸藩官軍参謀ヲ殺ス」奥羽鎮撫総督九条道孝ノ仙米諸藩ノ請ヲ卻クルヤ、諸藩皆参謀ノ意ニ出ルヲ疑ヒ、相議シテ其兵ヲ罷遣セント欲ス、是夜参謀世良砥徳修蔵○長門藩士ヲ福島ニ殺ス○会「会津兵白河城ヲ陥ル」津兵進テ白河城ヲ陥ル、

二十日、副総裁兼海陸軍務会計事務総督岩倉具視、輔弼中山忠能ヲ罷メ、日ニ御前ニ候セシム○諸侯以下采地ヲ有スル者ニ命シテ、旧幕府付与スル所ノ判物ヲ上ラシム○阿片煙ノ禁ヲ厳ニス○柳沢光昭伊勢守○黒川致仕ス、養子光邦伊織、後刑部大輔封ヲ襲ク○伊達慶邦・上杉斉憲奥羽「奥羽諸藩会盟」諸藩ノ老臣ト白石ニ会盟シ、鎮撫総督九条道孝ヲ要シテ仙台ニ入ル、

「官代ヲ禁中ニ徙ス」二十一日、太政官ヲ二条城中ニ営スルヲ以テ、仮ニ官代「官制改定」ヲ禁中ニ徙ス遂ニ営スルヲ果サス○官制ヲ改定シ、太政官ヲ分テ、議定・行政・神祇・会計・軍務・外国・刑法ノ七官ト「三権分掌」為シ、立法・行政・司法

〈一部欠〉

「蔵人所林和靖間詰ヲ廃ス」○蔵人所及ヒ林和靖間詰ヲ廃ス○笠松裁判所総督大原重徳ヲ罷ム、

二十二日、徴士ノ三等官以上ニ位階ヲ授ク○房総地方鎮定ス、是日、東海道先鋒副総督柳原前光江戸ニ凱旋ス、

二十三日、刑法官知事山内豊信ヲ以テ議定ト為シ、大原重徳ヲ刑法官知事ト為ス○第二軍総督西園寺公望ヲ以テ北国鎮撫使ト為ス○親王・公卿・諸侯以下、騶従ノ制ヲ定ム侍六人、下部三人、諸侯以下八佩刀者二人、小者一人○横浜裁判所総督東久世通禧、各国公使ニ移書シ、徳川慶喜既ニ罪ニ伏スルヲ以テ、局外中立ヲ解カンコトヲ諭ス、

二十四日、親王・大臣ノ喝道ヲ禁シ、三等官以上宜秋門「京都・箱館裁判所ヲ府ト為ス」ヨリ出入シ、九門内騎馬乗轎ヲ許ス○京都・箱館ノ二裁判所ヲ改テ、並ニ府ト為シ、大津裁判所総督長谷信篤ヲ以テ京都府知事ト為シ、箱館裁判所総督清水谷公考ヲ箱館府知事ト為シ、箱館裁判所副総督土井利恒ヲ罷ム○北国鎮撫使西園寺公望ヲ以テ三等陸軍将ヲ兼シム○大監察使三条実美江戸ニ至ル、

「日田・富岡・富高三県ヲ置キ大津・笠松裁判所ヲ県ト為ス」二十五日、日田豊後・富岡肥後・富高日向ノ三県ヲ置キ、大津・

笠松ノ二裁判所ヲ改テ、並ニ県ト為ス、松方正義（助左衛門）

○（薩摩藩士）ヲ以テ日田県知事ト為シ、長崎裁判所判事佐佐木高行ヲ富岡県知事ト為シ、木村貞通ヲ富高県知事ト為シ、辻維嶽ヲ大津県知事ト為シ、田内盛徳（源助○越前藩士）ヲ笠松県知事ト為ス○松平武聡ノ謹慎ヲ釈シ、其老臣尾関当遵（隼人）ニ死ヲ賜フ、

二十六日、箱館府知事清水谷公考、旧奉行所ノ金穀簿書（「箱館奉行所ヲ収ム」）ヲ収ム、

二十七日、政体書ヲ頒布ス○田安慶頼、徳川氏臣隷ノ禄秩ヲ大総督府ニ録上ス（知行高三百零六万五千五百八十石余、切米現石四十一万五千一百十二石余、役料米現石五千八百三十石余、役金・手当金・隠居料四十万二千六百六十両余）

二十八日、久美浜県（丹後）ヲ置キ、伊王野坦（次郎左衛門）○因幡藩士ヲ以テ知事ト為ス○稟准ヲ経スシテ書籍ヲ刊行スルヲ禁ス、（「久美浜県ヲ置ク」）（「書籍私刊ヲ禁ス」）

二十九日、貢士ニ三事ヲ策問ス（一日、兵制ヲ定メ海軍ヲ興ス、二日、理財ノ方法、三日、東征ノ方略）○田安家達ヲ以テ宗家徳川氏ヲ嗣カシム○大総督、其参謀林通顕ヲ罷ム○箱館府知事清水谷公考、大政復古ノ国書（正月十五日各国公使ヲ魯西亜領事ニ付ス、ニ付スル者ト同シ）ヲ魯西亜領事ニ付ス、

五月

朔日、大総督府、田安慶頼・大久保忠寛・勝義邦ノ江戸市中取締ヲ罷ム○大総督府、生糸蚕種紙改所ヲ江戸ニ置キ、印税ヲ収ム○東海道先鋒副総督柳原前光再ヒ甲府ニ赴ク（「白河城ヲ復ス」）○東山道ノ官軍白河城ヲ復ス○鎮撫総督九条道孝ノ要セラレテ仙台ニ入ルヤ、米沢モ亦兵ヲ新荘ニ遣シテ、副総督沢為量ヲ迎フ、為量之ヲ卻ク、是日、為量久保田ニ赴ク○大鳥純彰会津ヲ出テ大田原城（太田原勝清ノ治所）ヲ焚掠ス、

二日、大坂裁判所ヲ改テ府ト為シ、総督醍醐忠順ヲ以テ知事ト為ス○各国公使横浜裁判所総督東久世通禧ニ復書シ、徳川慶喜朝裁ニ伏スルノ証左ヲ得テ、局外中立ヲ解クコトヲ商議セントス、是日、通禧朝命及ヒ慶喜ノ奉命書ヲ遣ル、（「大坂裁判所ヲ府ト為ス」）

三日、大総督府、横浜裁判所副総督鍋島直大ニ命シテ、上野・下野ヲ鎮撫セシム○旧旗下帰順ノ者ヲ朝臣ニ列

ス、○伊達慶邦・上杉斉憲重ネテ南部利剛・佐竹義堯・丹羽長国・津軽承昭（越中守）○弘前・阿部正静（美作守）○棚倉・戸沢正実（中務大輔）○新荘・相馬季胤（因幡守）○中村・秋田映季（万之助、後信濃守）○三春・水野忠弘（真次郎、後和泉守）○山形・松平信庸（伊豆守）○上山・安藤信勇（対馬守）○磐城平・田村邦栄（右京太夫）○一関・板倉勝尚（甲斐守）○福島・六郷政鑑（兵庫頭）○本荘・松平頼升（大学頭）○守山・本多忠紀（能登守）○泉・岩城隆邦（左京大夫）○亀田・内藤政養（長寿麿、後湯長谷）○長谷・立花種恭・南部信民（美作守、後内分）○盛岡・上杉勝道（駿河守）○米沢・新田・織田信敏・松前徳広（志摩守）○松前・福山・米津政敏（伊勢守）○長瀞及ヒ生駒親敬（大内蔵、以上並ニ陸奥出羽）○交代寄合○ノ老臣ト、仙台ニ会盟シ、更ニ班師ヲ朝廷ニ請ヒ、若シ允サレスンハ君側ヲ清ムルヲ以テ名ト為シ、兵ヲ挙ケテ薩長ヲ撃ント謀ル、乃チ公議所ヲ白石ニ開ク、尋テ溝口直正（誠之進、新発田）○・牧野忠訓・内藤信民（紀伊守）○村上・堀直賀（左京亮）○村松・牧野忠泰（伊勢守）○三根山・柳沢光邦（以上並ニ越後）モ亦同盟ニ列ス、

四日、外国官ノ権限ヲ定ム（「外国官ノ権限ヲ定ム」）○長崎裁判所ヲ改テ府ト為シ、総督沢宣嘉ヲ以テ知事ト為シ、大和鎮撫総督久我通久ヲ罷ム（「長崎裁判所ヲ府ト為ス」）○彰義隊ノ東叡山ニ拠ルヤ、諸藩逋逃ノ徒モ亦相率ヰテ之ニ投シ、勢頗ル横肆、入道公現親王ヲ擁シテ、徳川氏ノ為ニ興復ヲ謀ル、是日大総督府、其参謀西四辻公業等ヲ遣シテ親王ヲ招ク、至ラス、（「東叡山ノ兵公現親王ヲ擁戴ス」）

五日、酒井忠績（前雅楽頭、藩主忠惇ノ養父）○姫路書ヲ大総督府ニ上リ、徳川氏ニ隷属セント請フ、

六日、奥平昌服（大膳大夫）○中津・三浦弘次（備後守）○美作勝山・織田信成（筑前守）○柳本致仕ス、昌服ノ養子昌邁（美作守）・弘次ノ子顕次（玄蕃頭）・信成ノ養子信及（修理、後筑前守）並ニ封ヲ襲ク○大総督府徳川家達ニ令シ、江戸市街ノ旧幕府掲榜ヲ撤セシム、

七日、西郷隆盛ヲ以テ参与ト為ス（大総督府参謀ノ如シ）○真田幸民（信濃守）○松代賊ヲ飯山ニ破ルノ功ヲ賞シ、書ヲ下シテ之ヲ奬励シ、榊原政敬戦労アルヲ以テ、其罪ヲ宥シ、老臣ヲ召スノ命ヲ止ム、

八日、軍費不貲ヲ以テ、貨幣ヲ富商ニ借ル○諸道駅逓助役地（所請助郷ノ制ヲ釐定ス、東海道ハ毎駅七万石、中山道ハ三万五千石、其他ハ概シテ一万石、但シ御領・宮堂上諸侯・社寺領ヲ論セス）○北陸道鎮撫総督兼会津征討総督高倉永祜、新潟裁判所総督兼鎮撫副総督四条隆平、江戸ヲ発シ是

（「助郷ノ制ヲ釐定ス」）

日高田越後ニ至ル、

九日、「丁銀豆板銀ヲ廃ス」丁銀・豆板銀ノ通行ヲ停メ、新貨ヲ鋳造シテ之ヲ兌換スルヲ布告ス○凡ソ神祠・伊勢両宮及ヒ大社・勅祭社ヲ除クノ外、悉ク之ヲ府藩県ニ属ス○酒井忠氏ノ幽閉ヲ解キ、其父忠義ノ謹慎ヲ釈ス○奥羽鎮撫副総督沢為量久保田城ニ抵リ、佐竹義堯ヲ見テ之ヲ奨励ス、義堯依違シテ決セス、且ツ薩長兵ノ随従スルヲ拒ム、為量乃チ弘前ニ赴ク、

十日、「府藩県ノ印章ヲ定ム」府藩県ノ印章ヲ定ム○松平武聡ニ美作ノ地二万七千八百余石ヲ賜フ（後鶴田藩ト称ス）○内藤政挙・稲垣長行ノ謹慎ヲ釈ス○膳所・篠山二藩ノ京都市中取締ヲ免ス○新「死事者ヲ霊山ニ祭ル」ニ祠宇ヲ京都霊山ニ建テ、癸丑以降死事ノ士及ヒ春来戦死ノ者ヲ祀ル○松平定安再ヒ吏ヲ隠岐ニ遣ル、島民復タ乱ル、

十一日、「江戸府ヲ置ク」江戸府ヲ置ク、

十二日、議定蜂須賀茂韶、軍務官副知事長岡護美（十七日ニ至リ）ヲ命ス議定心得及ヒ立花鑑寛（飛騨守○柳河）ニ命シ、東下シテ大総督ヲ輔翼セシム○一橋茂栄書ヲ大総督府ニ上リ、松平容保・松平定敬ノ罪ヲ赦サント請フ、報セス○和蘭人「スネル」新潟港ニ抵リ、日本政府開港ノ許可ヲ得ト称シ、私ニ銃器ヲ米沢・荘内等諸藩ニ販売ス、

十三日、三等陸軍将四条隆謌ヲ以テ甲府鎮撫使ト為ス○久松定昭ニ蟄居ヲ命シ、其父勝成（隠岐守）ノ職ヲ復シ、軍資金十五万両ヲ献セシム、

十四日、松井康英・大給乗謨・大給近説・小笠原長国・稲葉正善ノ謹慎ヲ釈ス○堀直明（恭之進、後長門守）ヲシテ養父直虎（内蔵頭）二月二十八日江戸城中ニ暴卒ス○須坂ノ遺封ヲ襲カシム、

十五日、太政官・諸官・諸司・府・藩・県印ノ寸法ヲ定「宣旨鈐印ノ制」ム（大政官印、曲尺二寸五分、諸官府、藩県印、二寸二分、諸司印二寸）又宣旨鈐印ノ制ヲ定メ、勅授官（三等官以上）ハ太政官印、奏授官（四等五等官）ハ行政官印、判「紙幣発行」授官（六等官以下）ハ其所轄官印ヲ鈐ス○新紙幣（拾円、五円、壱円、壱分、壱銖ノ五種）ヲ発行ス○甲府鎮撫使四条隆謌ヲ以テ駿府鎮撫使ト為ス○刑法官判事土肥実匡ヲ以テ監察使ト為シ、隠岐ニ

赴カシム○高家・交代寄合以下、帰順入観スル者ハ、其旧禄ヲ給ス○立花種恭・京極高富ノ謹慎ヲ釈ス○東叡山屯聚ノ徒日ニ益暴横、官兵ヲ途ニ殺スニ至ル、是ニ於テ、大総督府諸軍ニ令シテ之ヲ討ス、賊徒大ニ敗ル、輪王寺執当等、入道公現親王ヲ擁シテ逃匿ス、尋テ会津ニ走ル、

「東叡山ノ賊ヲ討ス」

「公現親王会津ニ走ル」

十六日、倉敷県中ヲ置キ、内海利貞多次郎○旧旗下士ヲ以テ知事ト為ス○列藩ノ私ニ関ヲ置クヲ禁ス○土屋寅直采女正○土浦致仕ス、養子挙直余七麿、後相模守封ヲ襲ク○大総督府、徳川家達ニ令シ、其撤兵隊・別手組等ヲ解放セシム、

「倉敷県ヲ置ク」

「私ニ関ヲ置ヲ禁ス」

十八日、大総督府、横浜裁判所副総督鍋島直大ノ上野・下野鎮撫ヲ改メテ、下総・下野二国ヲ鎮撫セシム○新潟開港ノ期三月九日ニ在リ、果サス、各国公使屢之ヲ促シ、本月十二日ヲ以テ期ト為サント謂フ、是日、横浜裁判所総督東久世通禧、書ヲ贈リ、新潟地方未タ鎮定ニ就カサルヲ諭シ、且ツ各国人民ノ密ニ其地ニ赴テ互市スルヲ禁セシム○奥羽鎮撫総督九条道孝ノ仙台ニ在ルヤ、伊達慶邦其外人ト相見ルヲ許サス、参謀前山長定清一郎○肥前藩士仙台ニ入ルヲ及ンテ、慶邦ニ詭説シ、道孝ヲ奉シテ京ニ帰ントス、慶邦之ヲ諾ス、是日、道孝・長定仙台ヲ発シテ盛岡ニ赴ク、

「九条総督仙台ヨリ盛岡ニ赴ク」

十九日、池田章政ヲ以テ刑法官副知事ト為ス○奈良県大和ヲ置キ、春日仲襄讃岐守○久我建通家士ヲ以テ知事ト為ス○大総督熾仁親王、仮ニ鎮台ヲ置キ、自ラ其事ヲ摂ス、又南北市政裁判所・社寺裁判所・民政裁判所ヲ置ク○大総督府、東海道先鋒総督橋本実梁・副総督柳原前光・東山道先鋒総督岩倉具定・副総督岩倉具経・海軍先鋒大原俊実ヲ罷ム○林忠崇昌之助○請西賊游撃隊ト合シ、海ニ航シテ伊豆ニ走リ、将ニ甲府ニ拠ラントス、大総督府田安慶頼ニ命シ、忠崇等ヲ沼津藩ニ拘留セシム、是日、忠崇等沼津ヲ去テ箱根ニ赴ク○官軍、長岡城ヲ抜ク、城主牧野忠訓会津ニ走ル、

「奈良県ヲ置ク」

「大総督江戸鎮台及市政社寺民政裁判所ヲ置ク」

「東海・東山海軍ノ先鋒総督ヲ罷ム」

「長岡城ヲ抜ク」

二十日、大坂府判事岩下方平ヲ以テ参与ト為シ、笠松県知事田内盛徳ヲ罷メ、長谷部恕連甚平○越前藩士ヲ以テ之ニ

代フ○酒井忠惇ニ蟄居ヲ命シ（時ニ忠惇江戸ニ在リ遂ニ藩ニ赴カス）、養子忠邦（直之助、後雅楽頭）ヲシテ其封ヲ襲キ、軍資金十五万両ヲ献セシム○大総督府、岩倉具定ヲ以テ奥羽征討白河口総督ト為シ、岩倉具経ヲ副総督ト為シ、北陸道鎮撫兼会津征討総督高倉永祐ヲ越後口総督ト為ス○林忠崇箱根ヲ侵ス、小田原藩兵叛テ賊ニ応シ、軍監中井正勝（範五郎○因幡藩士）ヲ殺シ、三雲某（為一郎○佐原藩士）ヲ逐フ、

二十一日、真田幸民ヲ以テ甲府城代ト為ス（故アリ任ニ赴カス）、

二十二日、松平茂昭（越前守○越前）ニ命シ、兵ヲ率キテ越後ニ赴援セシム（遂ニ行カス）、

二十三日、大坂府知事醍醐忠順ヲ罷メ、参与後藤元燁ヲシテ大坂ニ居リ、仮ニ府事ヲ管理セシム○兵庫裁判所（「兵庫裁判所ヲ置ク」）ヲ改メテ県ト為シ、大坂府判事伊藤博文ヲ以テ知事ト為シ、飛騨県（「飛騨県ヲ置ク」）ヲ置キ、梅村準（速水、初メ沼田準次郎ト称ス○水戸藩士）ヲ知事ト為ス○本荘宗武及ヒ其父宗秀ノ謹慎ヲ釈ス○大総督府、錦旗奉行穂波経度（左京大夫）ヲ以テ問罪使ト為シ、下参謀河田景与（左久馬○因幡藩士）ヲ参謀ト為シ、小田原ニ赴カシム○東叡山ノ余賊飯野武蔵ニ拠ル、官軍撃テ之ヲ走ラス、

二十四日、輔相三条実美ノ大監察使ヲ罷メテ、関八州鎮将ヲ兼ネ、三等陸軍将烏丸光徳ヲ以テ江戸府知事ト為シ、軍務官判事大木喬任、権弁事坂田莠（高鍋藩士）ヲ以テ、公議所議長ノ事務ヲ兼摂セシム○参与大久保利通ヲシテ江戸ニ駐在セシム○近畿洪水ヲ以テ、窮民ヲ賑恤ス○府県ニ令シテ、旧幕府旗下士ノ采邑ヲ管ス○徳川家達ヲ駿河府中（「徳川家達ヲ駿府ニ封ス」後静岡ト改ム）ニ封シ、遠江・陸奥ノ数郡ヲ併セテ、七十万石ヲ賜ヒ、其臣隷ノ官爵ヲ停ム○一橋茂栄・田安慶頼ヲ藩屏ニ列ス（後其旧領摂泉播ノ地八万八千四百石ヲ茂栄ニ賜ヒ、四万四百石ヲ慶頼ニ賜フ、並ニ藩名ナシ）○諏訪忠誠（因幡守○高島）致仕ス、養子忠礼（伊勢守）封ヲ襲ク、

二十五日、議定山内豊信ヲ罷ム○贈正三位楠正成ヲ河東操練場（聖護院村）ニ祭ル○一橋茂栄・田安慶頼、書ヲ大総督府ニ上リ、旧旗下ノ士ヲ以テ悉ク朝臣ニ列セント請フ○問罪使参謀河田景与兵ヲ率キテ小田原ニ抵ル、大久保忠礼城ヲ致シテ屏居シ、賊ヲ討シテ以テ自効セント

請フ○仙米会等ノ兵、大挙シテ白河城ヲ攻ム、官軍撃テ之ヲ卻ク、

二十七日、林忠崇ノ封土ヲ没シ、其臣隷ノ入京ヲ禁ス○通貨二種「二分金一分銀ヲ鋳ル」「二分金一分銀」ヲ増鋳ス製造所ハ大坂ニ在リ○醸酒鑑札ヲ改正シ、「醸酒鑑札ヲ改メ酒税ヲ課ス」酒税ヲ課ス○大総督府、徳川家達ニ令シ、長崎・箱館・七島伊豆及ヒ硝石・川船等諸会所ノ簿冊ヲ、南市政裁判所ニ致サシム○小田原藩兵、箱根ノ賊ヲ討シ、官軍之ヲ援ク、林忠崇、海ニ航シテ陸奥ニ逃ル○奥羽鎮撫副総督沢為量、大館ニ抵ル、弘前藩モ亦拒ミテ納レス、為量転シテ野代港ニ赴キ、将ニ箱館ニ航セントス、適総督九条道孝ノ使者至リ、盛岡ヲ発シテ久保田ニ赴カントスルヲ報ス、為量乃チ野代ニ次ス、

二十八日、中下大夫・上士ヲ置キ、高家・交代寄合以下帰順ノ者ヲ以テ之ニ班ス高家・交代寄合ヲ中大夫ト為シ、寄合以下千石以上ヲ下大夫ト為シ、両「公務人ヲ置ク」番席以下百石以上ヲ上士ト為ス○諸藩公務人ヲ京都ニ置ク貢士之ヲ兼ヌ○菊亭脩季ノ邸ヲ以テ、仮ニ貢士対策所ト為シ、一月三次策問「貢士対策」ス○伊達慶邦・上杉斉憲、奥羽越諸藩ヲ連合スルノ報至ル、乃チ慶邦・斉憲ノ京邸ヲ没シ、其臣隷ノ入京ヲ禁ス、又奥羽越諸藩ニ諭告シ、順逆ヲ誤ルコト勿ラシム○京極高富致仕ス、養子高陳右近、後備中守封ヲ襲ク○大総督府、水野忠敬ノ甲府城代ヲ免シ、其林忠崇ヲ逸スルノ罪ヲ責ム○各国領事、書ヲ長崎府ニ致シ、天主教徒ノ処分ヲ問フ、是日、本府答書シ、国法ヲ按シテ之ヲ諸藩ニ安置スルヲ告ク、

冊子原寸　縦二〇・五糎　横一四糎　五三枚

一六九四　桂右衛門ヨリ小松帯刀ヘ

佐土原侯従軍ノ件

（封紙ウワ書）「帯刀様（案）　右衛門

玉擦下拝呈　上置

封　」

尚々、樺山私方江参候ハヽ返答いたし置候様可仕間、

左様御心得可被下候、

昨日参接之節申上置候心得ニ御座候処、不図致失念大形之至奉存候、土佐原（佐土原）御供願之儀御談合申上置候通、御船御都合もとても不出来候付、いつれ御上京之上御都合向を以被仰返候上、御上京相成候様相成度致演舌可然哉之旨大久保御用序ニ

二之丸相伺、

御本丸ニハ求馬（島津）を以相伺候処、其通御返答可致承知仕候間、初より貴兄御聞込之事候付、御返答被成置度、自然今朝も樺山（舎人）辺参候半も難計御座候付、此段為御心得形行申上候、尚又得と御口合申上候而可取計事候処、私迄も催促ニ逢ひ早目之方可然存、右通取計置候付、不悪様御汲取可被下候、此旨用事迄に可被得貴意候、以上、

十一月五日

文書原寸　縦一七・八糎　横九六糎

一六五　小松帯刀ヨリ桂右衛門へ

新軍艦乗組ノ件

（封紙ウワ書）「桂右衛門殿　小松帯刀　貴下要詞」

愈御安康御毎勤之筈珍重奉存候、扨

御発駕御日限茂被召延候由、未御軍艦も不参如何之御都合ト、早々廻着之処頻ニ相願居申候、小拙も昨日は上京被仰付難有奉存候、御礼申上候、一昨日粗御内話相願置候通、昨日より内々差越申度含之処、無拠用向も有之、昨日は相調不申、今日はか様之天気合ニ而、明早朝より差越精々入湯、成丈御供仕候心得ニ御座候、併昨今之塩梅ニ而は五六日中快方ニ相成候処無覚束、か様之御時節、病身ニ而は十分之御奉公も出来兼可申と、実々残念之至ニ御座候、併明日より差越精々入湯仕候心得ニ御座候、御多用中海軍所等之義、御頼申上候も誠ニ御気之毒奉存

候得共、伺出候義は何卒宜敷御願申上候、新御軍艦兵士乗付之義は、当分四艘之御船ニ被召乗候人数、壱艘ニ十人ツヽ、都合四拾人御座候間、右之内一艘より五人ツヽ、引上ケ弐拾人、此節新御軍艦一往来丈被召乗度相考申候、当分翔鳳丸乗組十人之内三人丈欠跡有之由御座候間、右欠跡丈は被仰付候而、四艘より人撰之上引上相成候得は、跡ニ五人ツヽ、相残賦、此節柄之事ニも御座候間、全ク兵士御引取ト申場合ニも参兼候半ト相考申候間、可然御勘考ニも御座候ハヽ、宜敷御申渡被下度奉頼候、別紙両人翔鳳丸欠跡被仰付度趣承居申候間、前文之都合ニ可相成ト相考、一往来御船乗付之処は可被仰付筋ニ返答いたし度申候間、翔鳳丸三人欠居申候間、右江乗付被仰付候様御取計被下度御頼申上候、新御軍艦船将は、此節一往来丈は松方被命度、外ニ差当いたし方無御座候、其辺旁宜敷御頼申上候、先は此旨御頼旁得貴意候、匆々頓首、

十一月七日

再白、乍自由御内序中江宜敷御頼被下度、月番方江も病気之筋を以、内々入湯之段別段不申上候間、重々乍憚其段も宜敷御願申上候、毎度自由之事御頼申上候義、御海涵可被下候、再具、

文書原寸　縦一六糎　横一八七糎

一六九六　大山格之助ヨリ小松帯刀桂右衛門へ

茂久公上京、五卿帰洛ノ件

（包紙ウワ書）
「帯刀様　太宰府
大山格之助
御直折
右衛門様」

「十一月廿四日」

一筆奉拝啓候、先以愈御機嫌克被為遊御精勤恐悦御儀奉存候、然は一昨廿二日長州より報知有之候次第、左ニ奉申上候、

一去ル十六日昼時分蒸気船より御先江黒田嘉右衛門三田尻江致着、当夜中ニは御召船も御着港可相成迎相待居之処、翌十七日昼時分被遊御着船、然処長門守様（毛利広封）ニも

速ニ同所迄御出懸相成、翌十八日於三田尻終日御対顔無御滞被為済、万事　御決定之上十九日未明同所御発船相成、無御滞被遊　御通船候得は、廿一日　御上坂、廿二日一日御滞坂、廿三日　御登川之御日割ニ御座候由、左様御座候得は昨今被遊　御京着候半と奉恐察候、御発船翌十四日余程之時化ニ而、汐抔も相係り候　御模様ニも被伺申候、

一於長州先般応
御召、本藩家老、末家ニは徳山侯（毛利元蕃）・吉川家老明後廿六日三田尻開帆、西之宮辺迄参り懸滞船、御指図ヲ相待候由ニ相決候由、

一芸之世子公（浅野茂勲）ニも明廿五日御発船ニ而、外兵隊船は明後廿六日長州同行ニ而出船之由、尤於長州も此節は倍増之人数も差出相成候由ニ御座候処、惣隊一同出船も不相調、半方は一応御国船着坂引続彼方江御借受ニ而、二蒸りニ出懸之賦相決候由、

一土州容堂公ニも去ル十九日御国御発シニ而、廿一日御着坂之御賦ニ御座候由、是ハ土州より芸州江御使者到来、其段長州江報知相成候由、

一上国之儀も爾后相変候儀も無御座由候得共、紀州藤堂等より段々
朝廷江致建言、再応依旧之通、御政権幕府江御依頼被遊度段ニ相廻候趣、芸州辺江相聞得候由、

一五卿方急速被遊御発途と之御旨趣、以御書取被仰出候事件折柄、大脇弥五右衛門当地江立寄帰国ニ付、委細申含奉申上候通御座候処、其末段々
朝廷より　被仰出候廉々も御承知相成、孰れ今一層之　御沙汰被成御待度、御落着ニ相成申候間、此上御軽卒之御旨趣被為在間敷奉存候、暫時は不一方行違等之儀有之、大ニ不平ヲ抱キ申候仕合ニ御座候、已来異変之儀不被為在候間、御安慮被遊可被下候、

一五卿方之内東久世（通禧）殿御事は取分ケ御聡明被為居、爾后之処は別而為　朝廷御成功之御人物ニ御座候、然処兼而御素志被為在、是悲（非）御微行ニ而崎陽海外之形勢其他

無残所御熟覧被為在度御宿志ニ御座候処、既ニ不日
御帰洛ニ差臨ミ候ニ付、唯今之内御微行被為在度、分
而極内御依頼之趣承知仕候ニ付、実ニ不容易御大志被
思召立候ニ付、不閣御引受申上、万事以薩名既ニ今夕
当地発途、御微行相成申候、尤足軽一人召付途中之儀
は都合仕候ニ付、懸念も無御座、彼地之儀は汾陽・五
代江委細懸合も仕候ニ付、彼是不都合之儀有御座間敷
奉存候、極内此段奉入御聞置候間被聞召置可被下候、
右は今日崎陽迄幸便有之、不取敢此段為可奉申上、
如是御座候、恐々謹白再拝、

丁卯　十一月廿四日　大山格之助

帯刀様

右衛門様

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第四巻第五五六号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦　一四・六糎　横二九二・五糎　包紙原寸　縦二八・五糎　横　四二糎

一六七　大山格之助ヨリ小松帯刀桂右衛門へ

茂久公大挙上京ノ件

一筆奉拝啓候、先以愈御機嫌克被為遊御精勤恐悦御儀奉賀候、然は去ル十七日三田尻江
太守様御事被遊
御着船候形行、昨日崎陽迄一封差出仕置候間、追々相届
御覧被遊被下候半と奉存候、然処馬関詰鮫島元吉事三田
尻迄為伺　御機嫌罷出候処、最早　御発船後ニ而折柄木
戸準一郎・広沢兵介等江致面会候所、此節御打合之次第
小生迄極内相通候様被申含、昨廿四日当地迄元吉事罷越
委細承届申候、就而は不日御大事之御場合ニ差臨ミ候ニ
付、尚示談仕御機密之事件は中村矢之介江申含、今日出
立仕御直ニ可奉言上候ニ付、御聞取被遊可被下候、尤於
三田尻長人より相通候次第は元吉より委細奉申上候ニ付、
私より別段言上不仕申候、孰れ当地之処は上国之模様次
第如何様ニも尽力可仕候間、決而御安慮被遊可被遊被下（裕カ）
候、

先は右之事件不取敢奉申上度如是御座候、恐々謹言、

大山格之助

帯刀様

右衛門様

文書原寸　縦一六糎　横一〇九糎

一六八　慶応三年十一月ヨリ明治元年正月ニ至ル玉里邸控書　一綴一冊

（表紙、付箋）「玉里下り　△　写済　」

一六九八ノ一

（中表紙）（朱）「『丁卯十一月ヨリ』

朝廷ヨリ

御沙汰書並諸藩建白等

（朱）『一』　」

陸軍惣裁　大関肥（増裕）後守

同奉行　浅野美（氏祐）作守

監察　牧野伊（成行）予守

右兵隊多人数引卒豆州三島宿迄押来ル（リ）候処、

右大早々打ニテ御直書持宿ニテ上京之儀被差留候事、

海手ヨリ閣老　稲葉兵（正巳）部大輔

松平縫殿頭（大給乗謨）

其外参政之人々

右兵卒四大隊計ニテ浪花江着、其節

大監察　滝川播（具挙）磨守

監察　永井肥（肥前守、尚服）後守

古賀筑（筑後守、増）前守

右上京右之以前　忍藩　佐藤江場之助

去十月廿三日夕早打ニテ江戸着、於酒席大議論集議沸騰

弥大挙シテ上京相極ル、然ルニ閣老稲葉美濃（正邦）守殿上京、

先ツ見合セ可申旨被相達候付、又々人気沸騰、同侯江多

人数詰掛ケ大議論有之候趣極内々、右ハ於京都モ内応之

藩有之哉ニ被察候事極内々也、

宅江銘々家来呼被仰書付

酒井雅楽頭（忠惇）

非常之節　御本丸大手前へ人数可被差出候、委細之儀は大目付御目付可被談候、

田安御門外
真田信濃守（幸民）
久世出雲守（広文）
阿部駿河守（正恒）

呉服橋御門内
井上河内守（正直）
松平和泉守（乗秩）
細川玄蕃頭（興貫）
田沼玄番頭（意尊）

外桜田
松平大和守（直克）
阿部美作守（正静）

同外
馬場先御門内
松平下総守（忠誠）
内桜田御門板下御門外
酒井左衛門尉（忠篤）

清水御門外
安藤理三郎（信勇）
板倉甲斐守（勝尚）
米倉丹後守（昌言）
森川内膳正（俊方）
松平丹波守（光則）

同
井伊掃部頭（直憲）

御門外
松平中務大輔（親良）

半蔵御門外
酒井若狭守（忠氏）
水野真次郎（忠弘）

雉子橋御門外
松平能登守（乗命）
本多能登守（忠紀）
小出伊勢守（英尚）
板倉摂津守（勝弘）

一橋御門外
青山左京大夫（忠敏）
内藤若狭守（頼直）
板倉主計頭（勝殷）
本多豊後守（助成）

常盤橋御門内
津軽越中守（承烈）
本多美濃守（忠民）
加納嘉元次郎（久寛）

神田橋御門外
水野肥前守（忠順）
伊東播磨守（長春）
建部三二郎（政世）

外桜田
堀田相模守（正倫）

日比谷御門内
遠山信濃守（友詳）
安部摂津守（信発）
渡辺丹後守（章綱）

右非常之節固所々江人数可被差出候、委細之儀は大目付・御目付可被談候、

十一月二日　持帰

上杉式部大輔（茂憲）

当分之内

静寛院宮様御警衛被　仰付候、平常家来詰所と之儀は猶可相達候得とも、夫迄之処非常之節坂下御門外へ人数操

出之儀とも可相心得、右之段差向内意相達候事、

十一月二日　持帰

清水御門外　井上宮内（正順）　赤坂御門外　青山源五郎
四ッ谷同　松平主計頭（直哉）　柳橋手前　酒井鉉次郎（忠美）
新橋手前　織田摂津守（長易）

非常人数出候被成御免候、

十一月三日　持帰

新橋内　岡部筑前守（長寛）　小原相模守
片桐主膳正（貞篤）　虎御門外　織田出雲守（信親）
木下備中守（利恭）
谷大膳亮（衛滋）
大橋　牧野遠江守（康済）　浅草　大岡主膳正（忠貫）
両国橋　佐竹播磨守（義諶）　和泉橋　大久保三九郎（忠順）
小石川御門外　松平大蔵少輔（久松勝行）　四ッ谷御門外　柳沢伊勢守（光昭）
京極飛騨守（高厚）　伊東播磨守（長春）
昌平橋　松平摂津守（忠恕）

但神田橋御門内人数出御免、

非常之節人数可被差出候、委細之儀は大目付・御目付可被談候、

十一月三日　持帰

酒井紀伊守

非常之節内桜田御門外より坂下御門通り江人数差出候様酒井左衛門尉（忠篤）江相達候間、其方儀も同所へ人数被差（可脱カ）出候、委細之儀は大目付・御目付可被談候、

十一月三日持帰

十一月五日

御作事奉行
岡田安房守（忠養）

御勘定奉行并
在方掛り被仰付候

御勘定奉行並
羽田十左衛門（正見）

御作事奉行並

土佐国仰渡

皇国之勢ヲ按スルニ、往古ヨリ其革有トイエトモ、鎌倉之時ヨリ海内之政権西朝府(霸カ)ニ帰ス、是大変革之一也、世道之気運ニ随而転換ススル(衍カ)ヨリ其機ニ応シ、其所置之然ラシムル処也、徳川氏ニ至リ封建ノ勢成而二百五六拾年之今迄大将軍之職ヲ以テ是ヲ統ラレシカ、此度宇内之勢ヲ考ラレ、鎌倉以来ノ旧政ヲ変革セラレ、政権ヲ天朝ニ還シ、帝室隆盛之古ニ復シ奉リ、弘ク宇内万国ノ公法迄モ斟酌シテ、光明正大之御政務行ルヘキ基ヲ開カントノ御事実、当今気運世道之機会ニ応シタル大変革ト言ヘシ、我土佐国モ今日ノ如キ旧例ニ因循セシ政ニテハ、一方ニ藩屏シ皇威之赫耀イタシ候様奉補翼事覚束ナク、依テ当時之不使ハ　祖宗之法度ト雖モ、今日ヨリ更始一新ヲ以時態適当之改革申付候、孰モ爰ニ基キ我ラ天朝之御為忠誠ヲ抽ツヘキ助ト成候様協心戮力専要ニ存候、

卯十一月十五日

一諸政簡易ヲ主トシ、世界公法ニ基キ爾後政法正可致事、

一既往ノ是非曲直ヲ不問、勿論是迄之罪跡ハ人ヲ殺ス者ヲ誅スルノ外尽可赦之事、

一軍例ハ当時之急務ニ候得は一日モ速ニ可取調事、

一此度御隠居様思召は

皇国之御為公明正大之御建白被為　在、遂ニ幕府政権を

朝廷江奉還之御次第ニ被為至、感激不過之候折柄、一夜之事件相生、実ニ異外之至リ、御国府ハ勿論　天下と倶ニ更始一新之場合、右等之仕業憤慮ニ不堪候様之事出来不申候而は、御大体ニおゐて御憂慮之筋も画併と相成、決而難打捨、篤と探索いたし事蹟分明之上は至当之処置も可有之、殊ニ御隠居様不日御着京も被為在候付、孰も軽挙妄動無之益慎戒(戒カ)ヲ加ヘ、却而(マヽ)彼之輩之術中ニ不陥様屹と可相心得候、以上、

卯十一月

右土佐之達書

撒文関東ヨリ

一大丈夫誰カ国家ヲ泰山ノ安ニ置、生民ヲ塗炭ニ救ヒ、吾君ヲ堯舜ニ致事ヲ希ハサラン、列丈夫誰生民ヲ鴻毛ヨリ軽スヘモ君（キ脱カ）ノ為身ヲ励チ芳名ヲ青史ニ留事ヲ不希ニヤ、近年国難荐ニ生シ二百余年撃壤鼓腹民復タ生ヲ聊ニスルコト不能、四方ノ奸雄窃ニ割拠ノ謀ヲ企テ、幕府頓死旦夕ニ迫レリ、臣子タル者豈手ヲ袖ニシテ傍観スヘキノ時ナランヤ、慎テ惟ルニ

東照神君四海打払（本のマ）ノ乱世ニ出玉ヒ、暴ヲ誅シ乱ヲ平ケ、上ハ朝廷ヲ尊テ廃忠ヲ興シ、中ハ功臣ヲ封シ帰順ノ諸侯ヲ懐ケ、賞ヲ重シ刑ヲ軽シテ寛仁ノ政ヲ得ト雖モ、誰カ其沢ヲ蒙ラサル者アランヤ、然ニ一二ノ説客名利ヲ暗シテ

神祖ノ恩沢ヲ忘却シ、兵革ノ事ナケレハ功名ヲ立ル時ナシト思ヒ、佞弁ヲ以テ浮浪ノ徒ヲ嘯聚セシヨリ以来百犬虚ニ吠テ天下ノ人心ヲ詭惑シ、無頼ノ徒互ニ相響応シ、陽ニ勤　王ノ名ヲ唱テ陰ニ叛逆ノ謀ヲ企テ、利ヲ以中国西国ノ諸侯ヲ従慂シ、尚佞弁ヲ逞フシテ公卿縉紳ヲ欺罔シ、恐多モ

天聴ヲモ惑シ奉ン事ヲ謀リ、百事皆　幕吏ノ罪ニ託シテ公武ノ間ヲ離間シ、種々讒言ヲ構

幕府ヲ調誹（ママ）シ、或ハ異人ヲ暗殺シテ外国ト

幕府トノ間ニ怨ヲ結シメ、或ハ忠節ノ士ヲ殺シテ誣マルニ天誅ノ名ヲ以シ、或ハ山谷ニ聚リテ劫掠ヲ行ヒ、或ハ行幸ヲ奉勧テ

鳳輦ヲ奪ン事ヲ謀リ、或ハ

禁城下ニ砲火ヲ放テ京洛之地ヲ蹂躙スルニ至ル、是等ノ罪勝テ数フヘカラス、是浮浪説客ノ輩ヨリ起ル事ニシテ、実ニ彼等は

王法ヲ不恐、神祖ノ恩沢ニ背キ国家ヲ乱スノ賊子狛ヲ覩モ其余ヲ不食ノ徒也、然ニ先

帝崩御在シ大喪ニハ大赦ヲ行ハルノ旧典ニ従ヒ、長州ノ罪ハ是ヲ置テ更ニ不令問、干戈一度止ニ似タレトモ彼ノ奸詐ノ士、浮浪ノ兇徒、愈跋扈シ陰ニ之ヲ食ノ諸侯有リ、招テ謀テ間ノ別郷アリ、皆　幕府ノ威権ヲ奪テ中原逐鹿ノ世トナサン事ヲ謀者アリ、如是奸賊京畿ノ地ニ充満シ、大君是カ為ニ帰政ノ表ヲ朝廷ニ奉ニ至ル、正ニ是天下ノ安危ニ係ル処ニシテ、徳川氏ニ至テハ実ニ危急存亡ノ秋ナリ、倩惟ルニ、天下事ヲ誤ル者ハ佞弁説客浮浪ノ兇徒ナリ、今根ヲ断テ葉ヲ枯スニ非レハ、天下ノ乱止ヘカラス、昔シ蘇秦張儀カ輩合従連衡ヲ説テ諸侯ヲ煽動シ、終ニ周ノ王室ヲ滅亡セシメタリ、彼輩生存スルノ間ハ奸雄愈増長シ、海内忽チ修羅ノ街トナリ、

王室幕府共ニ累卵ノ危ニ臨ン事、鏡ニ掛テ見ヨリモ明也、今日ノ急務、心ヲ一ニシテ力ヲ戮

神祖ノ恩沢ヲ感戴シ忘却セサルノ諸侯ヲ糾合シ、上ハ朝廷ヲ尊崇シ、下ハ大君ヲ翼戴シテ兵権ヲ他ニ任ルコトナク、敢死ノ勇士ヲ募テ伍ヲ集、隊ヲ分テ佞弁ノ謀士ヲ披索シテ一人モ不残之ヲ誅戮シ、奸雄ノ胆ヲ奪ヨリ他ナカルヘシ、而後詐謀ヲ懐テ帰順セサルノ諸侯アラハ、明ニ

勅命ヲ請テ征討スヘシ、今時ニ当テ幕府一度兵権ヲ解ニ至ラハ、奸雄悉志ヲ得テ強ハ弱ヲ欺キ、大ハ小ヲ併セ天下之形勢四分五裂シ、応仁ヨリ天正ニ至ル間頃ノ如父ヲ弑殺シ君ヲ逐、乱臣賊子相踵テ出ニ至ン、コノ極ニ至テハ誰カ

王室ヲ輔翼尊崇スル者アランヤ、然は今日幕府ニ忠ヲ竭スハ、乃

皇国ヲ泰山ノ安ニ置ガ為也、乱臣賊子ヲ誅鋤シ諸侯奸謀ノ根ヲ断ハ即芳名ヲ千載ニ留ルノ盛挙也、希は同志ノ士志ヲ変スル事ナク、誓テ宗室ノ家ニ尽シ幕威振興シ、奸賊ヲ誅戮シ、四海静謐万民安堵ノ場ニ至ラシムルノ義挙在ンコトヲ、

月　日

閣老板倉侯へ差出候書付

此度従　朝廷被為　召候間、伝奏衆ヨリ御直達御座候得共、私とも儀は
朝廷奉対陪臣之身分ニて、公義を被差置御直ニ御用可有之筋ニ有之間鋪、此度大政変革ニ付定而意外之御用向も可有之哉、万一御沙汰之品ニ寄御当家へ奉対臣節を失ひ候場合ニ立至リ候而は、上は
神君様已来御歴代様御神霊奉対、下は私共祖宗先霊へ対し申訳無之、且被
召寄候上は
朝廷ヨリ御政務向御下問被為在候様には仕候間、右一々御答申上候様成行候而は、陪臣之身分相立不申、何分ニも御請之儀当惑仕候、右次第柄付応
召上京仕候儀其詮無之、伏而乍恐家老一人ヲ以此段御哀訴仕、幾重ニも　伝奏衆まて御達被下度、伏而奉至願候、

帝鑑間　　月日　　連名

右家々重役或は使者を以上京被致、閣老まてさし出、若御取用不相成段　御沙汰候ハヽ、右之文面を　伝奏へさし出候事、

伝奏御両卿へ差出候書案

謹而奉申上候、此度私共御用被為在候付上京可仕旨御達御座候得共、従来私共儀は
徳川家累代之家人ニ而
朝廷江奉対候而は陪臣之身分ニ御座候間、主家を指置御直ニ御用御請申上候而は君臣之大義ニ相戻リ候姿ニ相成、何共奉恐入候、且被
召寄候上は御政務向
御下問被為在候様承知仕、右一々御答申上候様成行候而は陪臣之身分相立不申、何分ニも御請之儀は当惑仕候、右次第柄ニ付、応
召上京仕候而も其詮無之、依而乍恐隷臣一人を以此段哀訴仕候、何分ニも螻蟻之微衷御洞察被下置、却而是

迄之通徳川家臣僕之御取扱被下候様泣血奉懇願候、恐惶誠惶頓首、

帝鑑間

月日　　連名

一十一月廿四日子刻頭左府公（近衛忠房）・右府公（一条（一条実良））御参　内、其後御辞退上表書左之通、

一方今不容易時勢

朝廷憲法重大之事件、過日可被議行之処、臣不有暗弱（肖カ）之質徒高官一事汚

朝議候儀有之候而も、実以恐懼之至ニ候間、当官辞申上度、何卒速被

聞食候様伏而希候、乍然即今形勢不堪傍観、国事御用之儀は微力之限勉励、聊可奉報

天恩心底候間、於辞官之儀は先以出格之

御憐愍速ニ被

聞食候様、只管頼存候事、

右之通ニ候処被留于

御名前候也、

近衛左府公　一条右府公

右昨廿六日御辞退ニ相成候事、

左大臣　九条殿（道孝）

右大臣　大炊御門殿（家信）

右は御内意被

仰出候事、

広幡殿（忠礼）　内大臣

右御内意被

仰出候事、

伝奏

信州松代藩士ヨリ幕へ差出ス建言

一近々上坂之聞有之候、実美（三条）以下脱走人之事、

此段乍恐五卿御預リ五藩ニハ右ニ付深ク苦慮モ可仕義ニ御座候テ、前後之事情モ熟知可仕ト奉存候、仍之右五藩申上候趣モ可有御座候、乍恐右五藩申上候趣ヲ御採択被為遊度御儀ト奉存候、

一外国之事、右猶　召之諸侯上京、公論衆議之上御決定ニ相成候得共、先指向御取扱之処尋被下候事、

此段乍恐一時御差向之儀ニ御座候得共、深ク宇内古今ノ形勢ヲ明察被為在、天下万世ニ御達観御通視被為遊、皇国御維持之御大事御一定被為在、就而ハ一時御差向之儀ニ御座候得共、右御一定ハ御大計ニ障碍ヲ生シ、万世一点ノ御患害ニ不相成様乍恐深厚御熟慮被為尽衆儀、其上ニテ御施行共義ト奉存候、依之尚乍恐聊奉存付候、謹而奉申上候、

一明大義　御国是ヲ被為立度候事有、目前利害ニ依テ御国是被尊議之節ハ、乍恐利害百端衆議、茲ニ御一定之期御座有間敷ト奉存候、重々乍恐大義ニ依テ　御国是ヲ被為議候節ハ多弁ニ不有議カト奉存候、右ハ漢土周代之滕文公小国ヲ以テ斉楚大国ノ間ニ罷在、深ク恐れ候而此ニ処スル方ヲ孟軻ニ問候節対テ申候ニ、是謀非吾所能及也、無已則有一焉、鑿斯池也、築斯地也ト民守之効死而民弗去、則是可為也、又問候節対テ申し候ハ、昔大王居邠犯之、事之以皮弊不得免焉、事之以珠玉不得免焉、乃属其耆老而告之曰、狄人之所欲者吾土地也、吾聞之也君子不以其所以養人ハ害人ニ三子何患乎、無君我将去之去邠踰梁山邑于岐山之下居焉、邠人曰、仁也不可失也、従之者如帰市、或人曰、世守也非身之所能為也、効死而勿者君講択於二者ト孟子ノ書ニ相見へ候義ニ御座候、孟軻ノ書不可取義多端ニ御座候得共、右之論ニ於テハ是ヲ天地鬼神ニ質テ蓋一点無疑者ニ御座候節、大義ニ依テ言ヲ建候義カト被奉存候、異邦小国之事且異邦人之言語ヲ取候而奉申上候義深厚奉恐入候得共、乍恐何レノ世何レノ国ニ御座候テモ、右二者ノ外決シテ他ニ道ハ無御座カト奉存候、右様々御座候ハ、乍恐堂々たり

天朝外国ノ覬覦ニ依テ狄人ノ欲斯大地也ト可為避之義、乍恐

皇祖神ニ奉誓決シテ無之御事ニ御座候得ハ、重々乍恐上下一心死ヲ決シ御国ヲ奉守護之外決テ他ニ道ハ無御座

候義ト奉存上候、君父辱ヲ受候時ハ臣子死ヲ効シ候ハ人道之義ニ御座候、其君父ノ

御国万一辱ヲ被受候様之儀御座候節ハ、凡ソ

皇国ノ御臣民ニ候者誰カ憤激決死不仕候者可有御座哉焉、死ヲ効シ候義固ヨリ当然之義ト奉存候、伏而尚重々乍恐攘夷ノ御大義厳然御英断、御国是被為立度御儀ト奉存候、左候処世上ニハ攘夷ト鎖港トヲ混同仕候論説モ御座候哉ニ伝承仕候義モ御座候処、攘夷ヲ鎖港ト固ヨリ別段之義カト奉存候、鎖港ハ外国人一切　御国地江来候ヲ御禁絶被為在、外国人ト見候得ハ善悪ヲ不論追払ヒ、膺懲(懲カ)候義ニ可有御座候処、攘夷之義ハ右トハ相違仕、外国人ノ実ニ善意ヲ以テ来候者ハ是ヲ信好撫懐セられ来候テ　御国ノ御患害ト罷成候者ヲハ掃攘膺懲候義ト奉存候、依之開鎖之儀ハ攘夷中ノ実件ニ御座候テ、時勢ニ随ひ利害ヲ詳ニシテ、開ク時ハ此ヲ開キ可鎖時は此ヲ鎖候義ニテ、開鎖之二端ニ深ク抱(拘)泥可仕義ニハ有御座間敷義ト奉存候、左候時外国人之来候テ御国之御患害ヲ仕候讎敵トモ罷成候ハヽ、其節

朝敵ニ御座候間、是ヲ賊ト呼ひ夷狄ト名付候ハ当然の義ト奉存候、其来候テ御国之御憂ト相成候者ハ君父ノ大讎敵ニ御座候テ、共ニ不可戴天之

朝敵逆賊ニ御座候、是ヲ攘斥膺懲候義即天地ノ大義ニ御座候テ、乍恐

神国ノ御大道ニ御座候義ト奉存候、仍之重々乍恐何(ママ)攘夷之

宸断　御国是御厳定被為遊

皇国御維持之御大事ヲ被為立、万世御一定、天下遵奉仕候様被為在度御義、乍恐深ク誠ニ至願奉リ候、

一詳利害厳御守備ヲ被為設度候事、

右ハ深ク宇内ノ形勢情実ヲ御観察被為在、時勢之変遷ニ随はされハ

皇国四辺之御守衛御指置、御遣算無御座様厳然御確定、大義ヲ明ニセラレ、大ニ士気ヲ御振作被為在、攻守ノ道詳ニセられ、大ニ兵制御略ヲ被為立、城堡・船艦・

大砲・鉄船ノ兵器ヨリ粮穀等ニ至ル迄御全備御充足被為至、大ニ形勢ヲ被為張海内之諸侯、一心致尽力守禦相成候様其道ヲ被為立、天下ノ英気御国中ニ溢れ、稜威表ニ震ひ候様被為在度御儀ト、尚乍恐誠ニ奉至願候、

一正道義御交際之御法則ヲ厳重ニ被為在度候事、

右ハ万国ノ尊卑等并通信通商之事、華夷交際之法則ヲ詳ニセラレ、礼法ヲ明ニセラレ、信義ヲ厚クセラレ、万世御患害ノ御座なき様被為遊度、恐れなから謹而粗天地ノ形勢ヲ観察仕、古今ノ沿革ヲ伝聞仕、尊卑ヲ通聴仕候

皇国ハ天地之元首ニ御座候テ、

天朝ニハ宇尊人間之絶尊ニテ被為在、　御国ハ即チ

皇国ト奉称候義ニテ、外国唱候処之帝国王国之比論セらるへき御事ニハ有御座間敷奉存上候、左候得ハ外邦帝国ト呼ひ候者も

皇国江奉交候テハ猶王国之帝国ニ交わり候、此節ヲ取候義当然之修理ト奉存候、乍恐

皇国ハ

天祖日神ヨリ被為賜候　御国ニ御座候テ、乍恐

皇統ハ実ニ　日神ノ御神孫ニ被為在候、

天位無窮ニ被為践候御座候得ハ、世界ヨリ万国誰カ比論可仕者可御座候哉、能此道義ヲ照明チ外国江御告諭御座候者必敬眼可仕義ト奉存候、何卒厚ク此大義ヲ御厳立被遊（為カ）遊度御事カト奉存上候、然上ニ通商貿易之義ハ利害得失之道ヲ詳明ニセラレ、万世御弊害之無御座様御信義不被為失候様深厚被為尽衆議、御交易之御法則御確定被為在候様有之度御義ト、乍恐重々奉至願候、

右之段御尋被為下候御義微賤之私儀感激伏泣之至ニ不堪奉存候、不顧身分不遜万死重々乍恐謹而奉言上候、

誠恐誠惶頓首謹言、

十月

真田信濃守
家来
長谷川（昭道）深美

紀州以下四十有余人ヨリ建白

今般御復政之御挙御曠世之御猛断、大公至誠之御謨図旨被為在候儀、実ニ不堪感泣御次第ニ候、御連枝御普代臣夫々面々奉伺候者、

九重御幼冲、輦下御動揺之折柄、　御祖宗変世之大業卒然一朝御辞解ニ相成候段、争カ座視傍観すへき、悲嘖痛腕此ニ候、此上は利害得失ヲ不顧各為徳川氏益君臣之大義ヲ砥礪シ、数百年之御厚恩ヲ報シ候外無之義ト奉存候、抑東照宮御武徳ヲ以テ天下ヲ戮合被為在、大ニ内外諸侯ヲ被封候而ヨリ、何レモ君臣之分ヲ守候事殆ト今ニ三百歳、其功徳之隆ル実ニ前古以来御比例モ無之、近年草莽不逞之徒姦説ヲ蟲張シ、禍ヲ蕭墻之内ニ釀シ次第ニ御羽翼ヲ奉殺、御孤主之勢ト相成候旨、既ニ近来討幕之企相唱スニ至リ、又一変シテ今日之場ニ奉陥、剰万石以上之進ハ今ヨリ両役ニテ被取扱候旨被　仰出、且又召之諸侯上京之旨は、王臣ト相心得候御沙汰モ出候哉之実奉恐入候次第ニテ、一旦

朝命相下リ候上ハ、即日

幕府ト君臣之恩義ヲ相絶候迚、又彼如何様之黄(横)車出来候哉(モカ)テ難計、実ニ寒心之至ニ候、夫レ子弟功臣ヲ建立シテ夫ヨリ大封ヲ被宛行候義ハ申迄モ無之事ニ候得共、私愛之御偏晴ヨリ出候儀ニハ万テ無之、斯ル時勢之本鉋迄扶持匡救之為ニ被建置候処、昇平数百年上下之情隔絶致シ、君臣之恩義澆薄ニ趣、御連枝御普代之向迄各其民士ヲ私ニ自開拓封殖致シスカ心得ニ相成、甚敷ハ従来之姦説ニ籠落セラレ、往々幕府ト君臣之大義ヲ忘ル、斯ル大難ニ由不計モ不忠不義ニ陥リトモ難計、近年国家御多難之折柄、御親藩其外各

天幕之御為周旋シ、聊臨機御次第有之候、全ク御祖宗之御大業御恢復之御一途ニ候処ニ、臣僕之諸藩ト比肩モ徳川家ト被為成候事実ニ冠履顚倒、綱常払把トモ可申、嗚呼年寒シテ松柏俊稠ヲ知、誰カ幕府ト君臣之大義ヲ明シ、寧忘恩之王臣たらんヨリ全義之倍臣トナリ、益砥節奮武之目的相立候ハヽ、即依然タル徳川氏ヲ不被失、世運御挽回之機モ有之哉と奉存候、御深算之御見込モ可有之、

為国家御示し方之度（有脱カ）候事、
右紀伊建白極々秘々之由、

（付箋）
「十八藩建白」
諸藩建白写凡十八藩
藤堂和泉守家来言上
一微臣蒙　御垂問恐惶之至奉存候、不容易御用筋ニ候処、
不顧恐直様奉申上候、抑政権武家江　御委任之事は不
得止之勢ニヨリ相帰し候事ニ而、幕府力を尽し候間、
海内之治安二百五十年余、今般大樹公
虚心を以
朝廷江奉帰候儀御願之通内心向背御定権も被為在候得
共、卒然如願被　仰出候は、
輦轂之騒擾即
皇国之乱階此ニ基キ可申と奉存候、今日蒙
御垂問候脱走五卿上坂之儀、自然兵勢を張り
朝廷を脅し迫而入来之形勢ニ有之、且は其罪を重ね候
次第ニ付、速ニ御所置可然御事と奉存候、外国之事件
ハ今日ニ至り候次第之処、
御廟議模様ニ寄候而は信を外ニ失ひ、内禍乱を包蔵し
候者不生共難申、枳憂（紀憂カ）之至奉存候、只是迄之通幕府ニ
御委任被為在候様仕度奉存候、猶其余細事御ケ条之儀
は申上候迄も無御座候、諸侯上京候ハヽ御公論も可被
為在候得共、猶微臣是迄御委任之廉俄ニ御変革ハ不可
然と奉存候事、

十一月廿一日　　藤堂和泉守内
深井半左衛門
藤井鼎助

一八ケ条文略
右八ケ条　召之諸侯上京之処ニ而衆議御決定ニも御座
候間、是迄之通被居置可然哉ニ奉存候、
津軽越中守
家来
森石礼次郎

一謹而奉言上候、昨日被仰出候脱走人并外国之事件ハ素ヨリ関係不仕儀ニ付、可否申上候共、脱走人到着ニも相成候ハヽ、何ニ而も着之処ニ御差留、先言上之旨趣御聞上被為在、且外国御応接之儀は御差留難被遊廉出来候間、其品御達之上諸侯見込をも御尋被為在候方可然奉存候、誠恐謹言、

同月同日　　尾州在京役
佐々鉄太郎

謹而奉言上候、昨日被　仰渡候幕府より伺之件々は、過日御達之処都而　召之諸侯上京御評定迄御差延、其内片時も御猶予難被遊廉候、先是迄之手続を以為御取計御座候方可然と奉存候、誠恐惶謹言、

同月同日　　尾州在京役
佐々鉄太郎
上杉弾正大弼内
真野寛介

一昨日俄ニ急出府仕候付居残之者何之存寄も申上候者無御座候、此段御断申上候、以上、

同日　　上杉弾正大弼内
小森次郎右衛門

一昨日於御仮建所拝見被
仰付候御書付之件々、見込之儀も御座候得は奉申上様奉畏候、猶又取下ケ篤と熟考仕候処、元来御書付之ケ条何レも是迄御仕来之御次第柄も一切承知不仕義ニ御座候得は、別段奉申上候見込も無御座と奉存候得共、乍恐万機之御政務一日御捨置難被為成御事柄と奉伺候得は、今般
召之諸侯上京迄之処ハ先是迄之通被成置候而は如何可有御座哉、御尋下ニ付不顧僭越愚衷奉申上候、誠惶謹言、

同月廿一日　　越前少将内
島津十大夫

一御書付拝見被　仰付見込之儀言上可仕様被仰付候得共、

見込之儀更ニ無御座候、此段奉申上候、以上、

同月廿一日　　松平三河守家来
山岡季四郎

一昨日被　仰渡候御書付御ケ条之趣、当時詰合之者ニ而は別段申上候見込も無御座候、何分右事件之儀ニ付召之諸侯上京之上御聞定ニ相成可然と奉存候、乍恐此段申上候、以上、

同月廿一日　　稲葉美濃守留守居
岡鉚之助

一昨廿日　御所御仮建所被召出、御書付を以御達之趣拝見仕候、今日中御請可仕様被仰付候処、重役詰合茂無御座、私共不都合之見込言上仕候様無御座候間、此段申上候、以上、

同月廿一日　　丹羽左京大夫家来
増子衛守

一右同文言

同日　　溝口誠之助家来
村井寛助

昨日私共式ハ　御下問之趣敬承候、然処誠ニ大事件之御儀ニ御座候間、容易確之見込も立兼候間、乍恐一二之事件而已左ニ申上候、

一五卿御帰洛之事、

此一事件々取極判議は仕兼候得共、御着坂に相成候ハ、理非曲直御糺明、

朝威御恐服之境御見当之上御帰洛御相当欤ニ奉存候、

一外夷之事、

朝廷御新政之儀ニ而難被為届儀も被為在候ハ、、当分是迄之姿ニ成置れ、

朝廷よりも御打混御所置被為在候ハ、如何可有御座哉、

一幕府より御伺御ケ条書之事、此御儀も幕府より差立之件々と御伺迄之義と奉存候間、御廟議を以御決定相成候様仕度奉存候、

右之通ニ御座候、以上、

戸田采女正内
桑山豊三郎
井田五蔵（護）
市川元之助

同月廿一日

一昨廿日以御書取三ヶ条見込之儀も御座候ハヽ可奉申上御尋被下置、委細奉得其意候、然は今度武辺江御届申上置候通、重臣并ニ国事ニ携候者当時詰合不申、私付属役人孰レ茂右京太夫国政ニ携候役筋之者ニ無御座候、自然主家之賞罰さへ相心得不申、重大之皇国御政体形見込可奉申上様も無御座、右京大夫無程上京何等見込形可申上哉、其程も難量、聊主人之存寄ニ齟齬仕候事ニ而は、主人ニ対し不相済儀ニ御座候、素ヨリ高貴之御方々様江格別之御評議被為尽候御場合、国政をも不案内ニて鄙賤之愚意奉申上候迚、御採用不被為成ハ不奉存候、不遠右京大夫上京可有御座哉ニ奉存候、夫迄之間御尋被成下候儀御用捨被成下候様奉願候、以上、

佐竹右京太夫
留守居
長瀬兵庫

同日

今般件々奉蒙　御尋申上候義も深奉恐入候得共、左ニ申上候、

一近々上坂之聞有之候実美已下脱走人之事、

此儀着坂相成候ハヽ先滞坂被　仰下、召之諸侯上京之上被為尽衆議、公明正大之御所置被為在度奉存候、

一外国之事、

此義　召之諸侯上京之上被為尽衆議候上御決議ニ可相成、即今之順序も可有之候得共、於幕府最初ヨリ取扱之手続有之候処、新ニ御取扱相成、万一御苦労筋も生候而は不宜奉存候付、幕府ニ御任せ相成候方可然御儀と奉存候、右御尋之二事ニ不限惣而幕府へ是迄之通御委任之方可然御儀ニ奉存候、不顧恐見込之趣申上候、

以上、

同廿一日　　井伊掃部頭家来
　　佐成源五兵衛

御達之趣奉畏候、実美以下脱走人之儀は　御召之諸侯上京迄之処、未た出帆無之候得は、右宰府へ其侭御差置、万万一出帆有之候ハ、大坂表ニ御留置ニ而可然奉存候、

一外国之儀は是迄之通　御召之諸侯上京迄之処都而幕府へ御委任可然奉存候、

右御尋ニ付見込之趣奉申上候、以上、

同廿一日　　松平下総守家来
　　平野俊吾

酒井雅楽頭家来
青木平蔵

柳原式部大輔家来
服部瀬兵衛

酒井左衛門尉家来
大野一郎右衛門

一御別紙之件々ハ都而幕府へ御任之方可然と奉存候、尚主人上京之上見込之儀御座候ハ、奉申上候、以上、

同廿一日　　右五名

肥後藩建白

一今度御下問之件々重大之儀ニ而、差寄利害得失之見込は付兼候得共、近々上京之聞有之候脱走人御取扱之儀は、既洛外迷居迄之儀は

朝廷御聞済之上、御許容被成置候と奉存候得は、今更別途ニ言上仕候程之儀無御座候、尤迷居後之御所置筋は、召之諸侯上京之上御衆議も可有之、且又外国事件及大樹公御伺之廉々共差向候義は、先幕府へ被任置候而御差障不被為在候儀候ハ、、

召之諸侯到着之上は従来之通被閣、其段は両御役より御触達ニ相成候ハ、、去ル十六日

御沙汰之事件言々御旨趣も相叶可申義ニ奉存候、為差立見込も無御座候得共、御受まてニ申上候、

細川越中守様
内

同廿一日

一実美已下脱走人之事、
右御所置振之儀は
御召之諸侯上京之上衆議公論を以御取計可被為在儀と
奉存候得共、不日上坂之趣相聞得候間、指向上坂候ハ
、同所へ被指置、追而御沙汰可被為在候而は、五藩へ
御達ニ相成可然奉存候事、
一外国御取扱振之事、
一幕府より被指伺候、
召之諸侯上京迄之処取計向件々之事、
右外国御取扱向は勿論、其余之件々迚も是迄於幕府被
取扱来候手続有之、俄ニ御扱変りニ相成候而は如何之
御不都合も相生候哉難計奉存候、只此度伺ニ相成候件
々而已ならす、一日万機之御政務或は
朝廷におゐて御取扱之事件有之、或ハ幕府ニ而被取扱
候事件も有之候而は、人心疑惑適従する所を不知、万
事凝滞可仕、全く御綱紀不相立義と奉存候、御政柄
朝廷江御引取相成候上は、賞罰黠渉財利断獄牧民治興
之官員諸役方付属吏徒ニ至まて、夫々相帰り万機皆
朝廷より出不申候而は不相成候処、未俄ニ御備も相立
申間鋪、追々諸侯上京之上は不抜之御制度も御確定可
相成候得共、夫迄之処ハ万事是迄之通幕府へ御委任被
成置候外有御座間鋪奉存候、此段深く　御思惟被為在
皇国之御混乱ニ不立至様御遠謀奉仰候事、

松平伊勢守家来
鈴木七郎右衛門（重遠）

同廿一日

先般大非常之御変革被
仰出候儀は、既往之事柄一切被為捨、万事公平正大衆議
之所帰を以、一途之御政道相立、速ニ
神妙之治安之御鴻基を被為開候
叡慮之旨奉敬承候、実ニ雀躍ニ堪不申、上下目を刮而

御沙汰を相究居候内、去ル九日ニ至俄ニ
召之列藩兵士戎服之侭参
朝、就而は何となく
闕下騒々敷、何方も驚愕罷在候処、
先帝已来御当職之二条殿下を初官家数十人除職之上、御
門出入迄も被差留、且将軍家も頓と除職解官、削封も可
被　仰出趣ニ相聞、右十々心定御縋責之御評義可有御座
哉、其儀は済計相弁不申候得共、将軍家祖宗已来世襲之
大権被差上、只管御自責を以
聖業を被奉輔度との
御趣意ハ、末々迄も感賞仕候折柄、右様之所置被為在候
而は、更始御一新之御手初、他日如何様之御都合ニ成行
可申哉、実ニ杞憂至ニ奉存候、依之仰願付差寄　御所内
外戎服等之儀至急被止、一刻も人心鎮定之御沙汰ニ相成、
随而　摂政殿下を初御取扱之義も公平正大衆議之所帰を
以御施行有之、往々弥以御改革之御趣意屹度相貫候様被
為在度、幾重も奉懇願候、昨今形勢所謂百尺竿頭一歩を
進之御時節ニ奉存候間、重畳恐多奉存候得共寸意奉言上
候、誠恐誠惶頓首百拝、

十二月十二日

松平阿波守内（蜂須賀斉裕）
蜂須賀信濃
松平美濃守内（黒田斉溥）
久野四郎兵衛
細川越中守内（慶順）
溝口孤雲
有馬中務大輔内（慶頼）
山村源大夫
南部美濃守内（利剛）
西村久次郎
立花飛騨守内（鑑寛）
十時摂津（惟恵）
丹羽左京大夫内（長国）
田辺市左衛門

松平肥前守（鍋島茂実）内

酒井平

十二月廿日写

一日本政府大変革をなす事要用なるの場合ニあたり、是迄厳烈正緯なる所置以て条約を一々履行ひ得たる貴公子へ対し、条約済各国公使等敬腹感誉の深意を申述ふること、要用なると心付きたり、今当地にある外国公使等ニ於てハ、政権を争奪せんと謀る党与中之紛起する議論ニ立障わる事なき様等と申合セし上ニ而、唯一事祈望すること有り、是は各国と約定を取極られし諸件を履行セるゝため、確証を以更ニ懸念なき様堅然たる国民恨和之政府を建られんとの事也、此望と均しく爰ニ一ツの公理あり、是ハ右公使等日本ニおゐて其本国之事務の取扱ふ事出来すへき政府はいつれなる哉を、無遅滞報告セらんとの事也、

徳川貴公子其望ミと公理とを深く思慮セられ、可成丈ケ速ニ已来右公使等相対して事を所置すへき政府は何れなる哉を告知セられん事を望む也、

一此度日本政体大ニ変革する場合ニ至る、条約済外国公使共申述度旨趣は、是迄上様勉励信義を以て右条約無相違被為遂候を忝致感服候、然は当時在坂之各公使ニおいてハ、現在直ニ政体を討論する事ニは一切関係無之候、望む所は政体堅固ニ被立、国民帰服し、外国江対し信義を不失之事ニ候、且又本国之事務付引合用向有之時は、何れ之政府江引合べきか公然之吹聴有之候而は当然之義と存候、依之上様ニおいてへハ（ママ）右両条諒察被為在、此已後何れ之政府へ諸事引合べきを無遅滞吹聴被成候様望之候、

（此本文ヲ以英ヨリ草稿イタシ、仏江談シ徳川氏江差出候処、左之紙面ヲ以返詞ニ及ヒ、サドーヨリ内々ニストル江談シノ上、此方（相通シ候コト、）

一我か祖宗　東照公日本国之政体を卒事大綱立ち、万目挙り二百余年上天子より下庶人ニ至るまて、其聴を尊ひ其侭談せさるものなし、然るニ宇内の形勢一変し、外国と条約を結ひし以来、全責の良法も虧欠あるを免れす、余継統之

（本文之意ヲ以可推知コト）

初ヨリ此事を熟考して京師と協議し、此法を改革せんとす、これ他念あるニ非す、偏ニ憂国愛民之赤心より余か祖宗以来伝承之政権を擲ち、広く天下の諸侯を聚め公議を尽し、輿論を採りて余国政府の建法変革を定めんと信約を以て
朝廷ニ寄せたる此鴻業を成ん為
先帝より遺命ありて、
幼主を扶翼するの摂政殿下をはしめ宮堂上方数名余、政権を帰する事を諾し、乍去諸侯之公議相決する迄諸事是迄之通政権を執行ふへしとの
勅命たるニより、専ラ無会議の期を待て断然其席ニ臨まんとせしニ、豈料んや、一朝数名之諸侯兵仗を帯して
禁門江突入し、
先帝顧命之摂政殿下をはしめ宮堂上を放逐し、
先般譴斥之公卿等を引入て代らしめ、最前
勅命之旨を変し、公儀を待す将軍職をも廃する事ニ至れり、余か旗下譜代之諸藩大ニ憤激し、日本の大臣を壊り余国民心ニ背れし暴戻之罪を責め、兵を挙るの外他なし、今日夜余ニ迫れり、然れとも最初政権を投寄せしハ、畢竟上下之人心を一和する為なく、右様之辺激ニ及るハ素志ニあらす、仮令如何なる正理ありとも余り乱階を醸す事決然為すニ忍する処なり、故余此禍乱を避んかため、一と先下坂ニ及ひしなり、然とも此事他人より視る如き事状にハあらす、全ク国を憂民を憂する情より彼兇暴之所業を視るニ、
幼主を挾み
叡慮ニ托し私心を行、万民を悩ますは見るニ忍ひす、何分国之為ニ弁論せさるを得す、万一異見之向をも告諭し、公議輿論を問ひ、偏ニ我国の隆治を祈る、是祖宗　東照公愛民の余霊ニ依り、
先帝之遺志を継んと欲し、天下と同心協力して正理を貫き、事業を遂、公儀を定んと希ふ之外他なし、就而は余か国ニ和親之条約を結ひし各国は、国内之事務ニ

関係するニ及はす、都而条理を妨くる事なきを要す、
余既ニ条約の箇条残る所なく履行ひしなれは、尚此上
も令誉を失さる様各国之利益を扶け、追而全国之衆論
を以て我か国之政体を定るまてハ、条約を履み各国ニ
約せし諸件を一々取行ひ、始終之交際を全ふするハ余
か任ニある事なるハ諒せらるへし、

十二月九日従
朝廷依
召九ツ時分御供揃、
太守様御衣冠ニ而
御出、公家御門ヨリ
御入、諸大夫之間ヨリ
御上リ、御同席上之間江
御着座之処、尾張前大納言様(徳川慶勝)・越前宰相様(松平慶永)・安芸少将(浅野茂勲)
様・土佐前少将様(山内豊信)追々御参
内、当夜七ツ時分
御帰殿被遊候、
御召書
一当朝依
御達兵隊戎服之侭罷出候様御達有之、追々繰出相成候
処、左之通御警衛被
仰出候、
一日御門内外并穴門四ヶ所、
一御台所御門并北之方穴門弐ヶ所内外、
一参台殿并奏者所前、
一御座軒下人撰十人ツヽ御警衛、外四藩ニも夫々請持御
警衛被　仰出、御同様人数繰込相成候、
一当夜左之通被止参
朝候、
「二条」
摂政関白前左大臣様「斉敬公」(ナリユキ)
「賀陽」
弾正尹宮様「朝彦親王」(アサヒコ)
近衛前関白前左大臣様「忠凞公」
鷹司前関白前右大臣様「輔凞公」

近衛前左大臣様「忠房公」
徳大寺前右大臣様「公純公」
一条前右大臣様「実良公」
九条左大臣様「道孝公」
大炊御門右大臣様「家信公」
広幡内大臣様「忠礼公」
日野大納言様「資宗卿」
飛鳥井大納言様「雅典卿」
柳原大納言様「光愛卿」
葉室大納言様「長順卿」
広橋大納言様「胤保卿」
六条中納言様「有容卿」
野宮中納言様「定功卿」
久世前宰相中将様「通熙卿」
豊岡大蔵卿様「隨資卿」
伏原三位様「宣諭卿」
裏辻中将様「公愛卿」

一三職人体

総裁

有栖川帥宮様「熾仁親王」

議定

仁和寺宮様「嘉彰親王」
山階宮様「晃親王」
中山前大納言様「忠能卿」
正親町三条前大納言様「実愛卿」
中御門中納言様「経之卿」
尾張大納言様「慶勝卿」
越前宰相様「慶永卿」
安芸少将様「茂勲朝臣」
土佐少将様「豊信朝臣」
此御方様（島津茂久）

参与

大原宰相様「重徳卿」
万里小路右大弁宰相様「博房卿」

長　谷　三　位　様「信篤卿」
岩　倉　前　中　将　様「具視朝臣」
橋　本　少　将　様「実梁朝臣」
右同
五藩士之内ヨリ三人宛
右之通被　仰出、五藩人柄之儀明日早朝可申上旨被
仰出候、
一三条実美已下一族議絶被止、且入洛御復位被
仰出候、
一同夜　御室宮様御還俗被　仰出候、
一四斗樽御酒三挺
一鰯五拾把
右厳寒之砌苦労被
思食候付、兵隊へ被下候旨非蔵人ヨリ相達、四藩も同
様之由、
一同十日佐次右衛門（岩下方平）殿・西郷・大久保一蔵御留守居御仮
立江罷上候、
一御酒肴　一御菓子
右御五家君公方御頂戴為有之由、
一右同詰合之五藩士江被下相成候、
一四斗樽御酒五挺
一鰯百把
右前条同断ニ付兵隊江同断、
一当夜昼夜静謐ニは候得共、二条城人数会桑藩等暴発之
街説市中人気動揺之聞得有之、斥候被差出候形行、
御所江御届ニ相成候、
一同十日会津・桑名御囲被差許候、
一同十一日御警衛等何も相替無之、
一今日依
召
太守様四ツ時御供揃ニ而御参
内、芸州侯（浅野茂勲）御同断、尾張（徳川慶勝）老公・越前侯（松平慶永）二条城江御越相
成、同夜四ツ時過
太守様　御帰殿被遊候、

一同十二日佐次右衛門殿・吉之助・一蔵御留守居御仮立
江罷出、今日右三人参与被
仰付候、今日茂先日之通兵隊へ御酒肴等被下相成候、
一今日尾張老公二条城江御越、夕六ツ時御参
内相成候、
一徳川家同夜六ツ半比会桑之両侯御引列御下坂相成候、
専尾張老公彼是御尽力ニ而右御運ニ相成候、
一応
召早速登京
御満足候、随而不容易大事御評決之儀有之、唯今参
朝可有之旨
御沙汰候事、
一　（島津茂久）薩摩少将
議定職被
仰下候事、
口宣追而下賜候事、
一其藩中可然仁両三輩為参与即時可差出旨
御沙汰候事、
一日御門並穴門四ヶ所内外、
一御台所御門並北之方穴門二ヶ所内外、
一参台殿並奏者所之前、
一神仙門往反人数改取締所、
一公家門前桑名固メ被
免引替、
外御座檐下詰任撰十人之事、御拝道廊下檐下詰従僕之
事、
王政復古大変革ニ付而は、何時非常之儀出来も難計、依
之右場所藩兵を以厳重警衛可有之旨、
御沙汰候事、
但九門内は勿論
禁内ニ至り兵士戎服之侭可参
朝候事、
一公家門前桑名守衛之儀被止候付、其場所速ニ厳重可警
衛之旨

御沙汰候事、

一参与人体各注進之通被仰付候、

御改革之御時節万事尽力可有精勤候事、

但御改革規則相立候迄一同辰刻参集、夜分ニおゐて申合四五人宛直可有之候事、

三職之輩為心得被相渡候一紙

一御評議始御場所仮設之事、

一御評議所　小御所

一総裁議定詰所　麝香間

一同休所　水鳥間

但宮公卿奥之座、列藩端之座、且ツ総裁・議定一列スルト雖、総裁ニ於てハ一席を隔へき事、

一参与詰所御色部屋二間

一同休所同東之間　於供藩士之向ハ諸大夫之間仮立

但公卿奥之座、列藩端之元を藩士向座、

一宮公卿列藩奏下所　林和靖間

一神祇(社)寺院諸藩士以下奏下所　虎之間

一今度武家伝奏御役被廃候付而は、差当り候処参与御役ニおゐて取扱相成候、石薬師通一乗院里防を以仮ニ右役所ニ被設候、且参与役所と被称候間、武家伝奏取扱之廉々右役所へ可申出候事、

但右掛り之方々

大原宰相

万里小路右大弁宰相

長谷三位

岩倉前中将

橋本少将

右手当を以可差出事、

御用掛り

松尾備後(相徳)

松室豊後(重進)

鴨脚加賀（光長）
松尾但馬（相永）
松尾伯耆（相保）
中川対馬（元纘）
吉田遠江（良栄）

右非蔵人

西池左兵衛
松田大進
伊佐左近番長
立川掃部
長井奉膳
徳岡刑部
岡本市之進
小野兵部丞

一　薩州

一日御門並穴門四ヶ所内外、
一御台所御門並北之方穴門二ヶ所内外、
一参台殿並奏者所等之前、
一御座檐下詰、
右御守衛之儀被
免候間、明朝可引払事、

十二月十三日

一去ル九日被　仰付候御警衛之向は勿論、在来御警衛於場所も九門之外悉被　免候得共、今度改而、

日御門　土州
御台門（所脱カ）　薩州
南　門　尾州
朔平門　芸州

右之通御警衛之儀被
仰付候事、

一徳川内府従前御委任大政返上、将軍職辞退之両条、今般被

聞食候、抑癸丑以来未曽有之国難
先帝頻年被悩
宸襟候御次第、衆庶之所知ニ候、依之被決
叡慮、王　政復古、国威挽回之御基被立候間、不論既
往更始一新、自今摂関・幕府等廃絶、即今先仮リニ総
裁・議定・参与之三職ヲ置レ、万機可被為行、諸事
神武創業始ニ原ツキ、搢紳武弁堂上地下別ナク、至当
ノ公議ヲ竭シ、天下ト休戚ヲ同ク可被遊
叡念ニ付、各勉励旧来驕惰之汚習ヲ洗ヒ、
皇国之為メ忠誠ヲ可尽候事、
一内覧　勅問御人数、国事御用掛・議奏・武家伝奏・守
護職・所司代総テ被廃候事、
一大政官始追々可被為興候間、其旨可心得居候事、
一朝廷礼式追々御改正可被為在候得共、先摂籙門流之儀
被止候事、
一旧弊御一洗ニ付言路被洞開候間、見込有之向ハ不拘貴
賤無忌憚可致献言、且人材登用第一之御急務ニ候故、
心当ノ人言上候事、
一近年物価格別騰貴如何トモスヘカラサル勢、富者ハ益
富ヲ累ネ、貧者益窘急ニ至リ候趣、畢竟政令不正ヨリ
所致、民ハ王者ノ大宝、百事御一新之折柄、旁被悩
宸衷候、智謀遠識救弊之策有之候ハヽ、無誰彼可申出候
事、
右之通御確定被
仰出候ニ付而は、六十余州之大小藩ハ申ニ不及、陪従
吏卒之末ニ至ル迄御趣意相心得候様
御沙汰候事、

一総裁以下巳刻参集、卯刻評議之事、
一参与之儀、身今(自カ)堂上向上ノ参与と称シ、諸藩士下ノ参
与ト称し候事、
十二月十五日
一　大原宰相
参与職辞退

聞食候事、

一　薩　州

頃日御変革御混雑之虚ニ乗し、悪徒横行之聞有之候付洛中洛外巡邏之儀被仰付候事、

但是迄町奉行取計向之儀為替、当分之処不取敢兼而山城国中取締被仰付置候、本多主膳（康慶）・青山左京亮（忠敬）・松平図書頭（信正）江市中御取締被仰付候、尚又市中見廻之儀次第不同亀井隠岐守（茲監）・加藤遠江守（泰秋）・加藤能登守（明実）・小出信濃守（伊勢守、英尚）・松浦肥前守（詮）・植村駿河守（家衡）六藩被仰付置候得とも、尚又加州・土州・中川等江洛中洛外見廻被仰付候間、此段心得迄申達候事、

一　小松帯刀

今般御改政御一新ニ付、広く天下之人材御登用被為在候、其方兼々被聞召入候儀有之候間、早々登京可致御沙汰候事、

十二月十九日　壬生基修

一廿日

先年以一族儀絶被仰出候、今度被止、其儀入洛復位被仰出候事、

於官者可称前官、尤入洛之上闕官節追々可被復候事、

一　尾張大納言

比日被仰含置候筋ニ付段々尽力之処、華城往反彼是難届次第も有之、自身下坂死生之間ニ立候而も御趣意御徹底ニ可至様志願之趣ニ而、今日ヨリ御暇願度旨始終出極之心得、神妙ニ思召候間、願之通被仰付候、但去ル九日已来日々物義を生候事、偏ニ尾越周旋之廉不挙之故付、此上は来ル廿五日中三日を限リ成功可有之候、右期日ニ至リ尚是迄之如く遅延之義被

申出而も於
朝廷情決而不行件々も有之間、前件之通弥以精々尽力
可致被
仰出候事、
願之旨趣も有之別紙之通被
仰出候、随而ハ復古之初日ヨリ偏ニ被為的目と候儀ハ
尾越周旋、徳川内府言上廉成否ニ有之候間、各其分可
心得候、尚又海外各国御布令之事ニ於而、迅速御処置
可然
御確定之上、段々言上之向も有之、旁昨今之御運ニ至
リ候得共、越・芸・土始下参与之輩彼是建言之次第、
其情実も亦難黙止被
思召候間、万端右期日ヲ限リ御処置可被遊候、此段為
心得被
仰下候事、

十二月廿二日夜

一 十二月廿三日　岩下佐次右衛門　西郷吉之助　大久保一蔵

御用之儀候間、今廿三日午刻参　朝可有之事、
尚尾張大納言・越前大蔵大輔より言上之儀有之候付
総裁始一同参
朝之儀相願候、仍此段申入候事、
一謹而御請奉申上候、臣慶勝下坂仕
御趣意御徹底仕候様、鄙誠を相尽度奉願候処、蒙
勅許難有仕合奉存候、然処臣慶勝等周旋之廉不挙故を
以、此上は来ル廿五日中三日を限成功可仕旨、
勅意之趣、誠ニ以恐懼之至奉存候得共、於坂城多人数
之儀候間、一々説諭仕候は一言之間ニは難行届、且道
程往反之時刻も御座候間御刻日之数ニ而可奏成功とは
難行届奉存候、臣慶勝熟考仕候ニ、今般
皇国御維持之為
朝政御一新之
御趣意ニ被為在候得共、不動干戈天下之蒼生得其所候

様相運候方時日遷延仕候共
天意ニ相叶候儀と奉存候間、何卒日数遅速之儀は別段
之
天恩を以
被下置候様偏ニ奉懇願候、臣慶勝不堪伴
天闈哀訴之至、誠恐誠惶頓首、

十二月廿三日　　大納言慶勝

一当時御政体御変革ヨリ速ニ外国へ御布告当然之御事、
右御告文、朕は列侯会盟之主と被遊候御儀、乍恐今日
におゐて事理的当之御文体と奉拝見候、然ニ此儀
朝廷御親政之始尤重大之事件付、猶又反覆愚考仕候処、
只今之形ニ而はいまた
御政体維新之鴻基夫々御順序相立不申、殊ニ
闕下江相会候諸侯僅ニ五六藩而已ニ而、御告文列侯会
盟之主之
御文意未付被行不申、且外国応接ハ是迄幕府御委任付
其取扱之次第も可有之、然ニ只今此侭ニ而俄ニ御布告
相成候而は、御文体と御事実と致齟齬、却而外国ニお
ゐても疑惑を生し可申、仍而申迄も無之候得共、徳川
内府も向後ハ列侯之地位ニ被閣候上は帰洛有之、廷議
ニ相参し、
召之諸侯も未致到着者迅速致上京候様被命、内府ハ勿
論天下諸侯之衆議
朝廷ニ而御参考、御国体至当之公議ニ御審決、後日毫
髪之遺憾無之様被遊、其上にて早々御布告ニ相成候ハ
ヽ、誠ニ以列侯会盟之主之御事実被相行、
皇国外国江致光耀可申と奉存候、先其迄は幕政を
朝廷江奉還候ハヽ、徳川内府ヨリ一応外国江致演舌置
候様被命可然儀考慮仕候、以上、

十二月廿二日　　松平容堂

一徳川内府宇内之形勢を察し政権を奉帰候間、
朝廷おゐて万機
御裁決被遊候付而は、博く天下之公議をとり、偏党之
私なきを以衆心と休戚を同し、徳川祖先之制度美事良

法ハ其侭被差置、御変更無之候間、列藩此
聖意を体し心得候儀ハ不憚忌諱極言高論して、救縄補
正ニ力を尽し、上勤
王之実効を顕し、下民人之心を失はす、
皇国をして一地毬中冠絶せしめ候様、淬励可致旨
御沙汰候事、

十一月廿三日

一嘉彰幼而仁和寺ヲ相続シ、齢十三之秋ニ至奉
勅出家得度、爾来一点之法燈ヲ扼ト雖モ、中心全ク仏
果ニ不帰、年長ニ及ヒ少ク文学ヲ勉ト雖、空過光陰而
已、不知々々将違
勅旨、其罪難逃慙愧之情日夜無止、然ルニ去ル九日之
挙ニ因テ頓ニ還俗ヲ允サレ、且重任之
命ヲ蒙リ恐懼屏営叨ニ職務ニ就ト雖モ、齢僅ニ弱冠ニ
過キ才力空疎、徒ニ自益慚愧而已、方今
皇国政権一ニ
朝廷ニ帰ス、所謂千戴之一期会、実ニ万世不拔之業、
其所置何如ニ在而已、抑
皇国今日之形勢ニ至リシコト、外国人来港ノ日ヨリ起
レリ、今是ヲ挽回スルノ道ハ西洋各国ノ政体事情ヲ知
ラ在リ、士庶ノ中間ニ行観ノ者在リト雖モ、在上之人
未タ航行ノ挙ヲ聞ス、下明カニシテ上通セサレハ凡百
ノ事行レサルノ基也、嘉彰自熟慮曰ク、雖有百聞不如
一見、机上燈下之識見而已ニテハ天下之事難被行欤、
故ニ今且賢路ヲ聡明ノ公卿ニ譲リ、忽一身ヲ抽キ万国
ニ航行シテ外国之情実ヲ親視シ、彼之長短ヲ洞察シ、
然後帰朝以四方帰化ノ道ヲ開、遂ニ
神州之威武ヲ普ク六合ニ被ラシメント欲ル也、嘉彰忠
ヲ
皇国ニ竭ス所以ノ儀唯在此事、仰願クハ
朝廷此素志ヲ諒シ速ニ允裁ヲ賜ハレ、此旨
奏聞宜頼入候、誠恐誠惶謹言、

慶応三年丁卯十二月　　嘉　彰